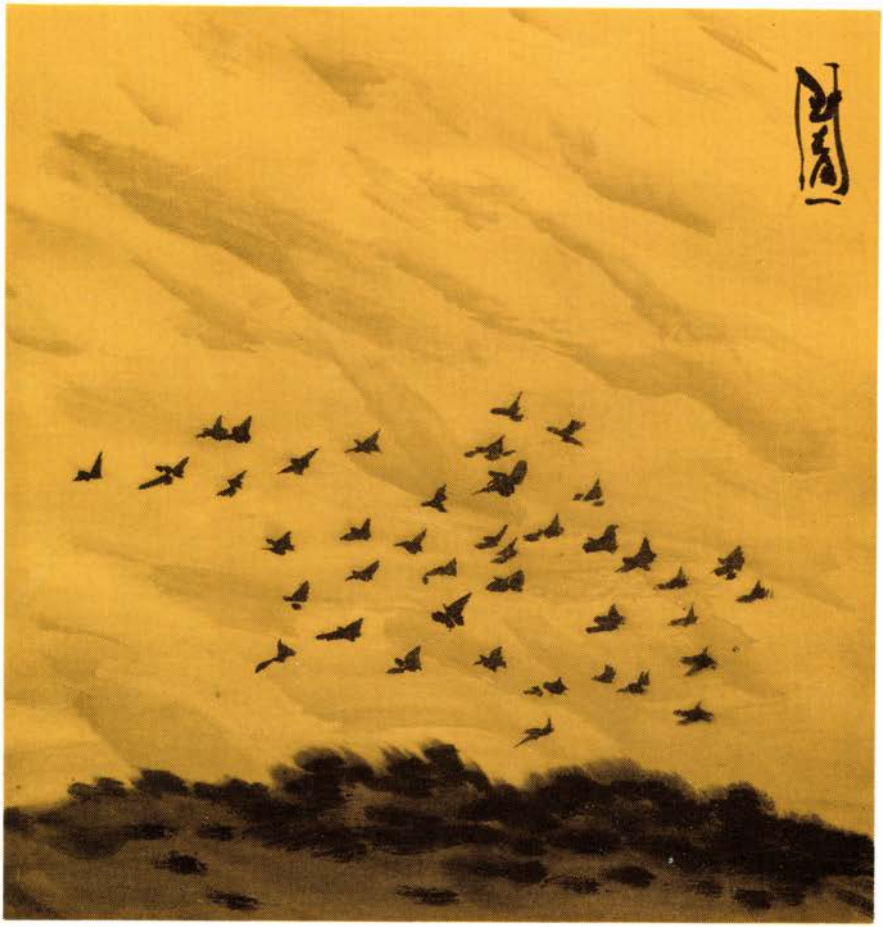
川柳塔

昭和六十一年八月二十五日　印刷
昭和六十一年九月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年　通巻七一二号



日川協加盟

No. 712

九月号

61年度 同人総会と二賞表彰10月句会

日　時　昭和61年10月5日（日）午後一時開場

会　場　メンズファッションセンター3階
地下鉄谷町線「谷町4丁目」下車2号出口
谷町3丁目交差点西南角
電話　06（941）1918

▼同人総会　午後2時～3時30分
〔議事〕①会計報告―高杉鬼遊　②事業経過報告―
樫谷寿馬　③役員改選　④質疑応答

▼二賞表彰句会　午後5時30分から
おはなし　西尾　梨
路郎賞・川柳塔賞表彰
兼　題　「青」　西山　幸選
「深い」　里　小路選
「魔法」　岩本　雀踊子選
「苦心」　黒川　紫香選
席　題　二題　各題3句　締切6後30分
会　費　五百円

川柳塔社

一本の自由を、

人って、さみしかったり、うれしかったり、いろいろあって。一本のボトルをキープする。それはつまり、自由な時をキープする、ということ。いい酒だから自由になれるのか。自由だからいい酒になるのか。心開いて、いつものオールドにたどりつく。

今夜も会う・憩う・酔う
サントリーオールド キープする。

製造・販売　サントリー株式会社

風蘭

西尾　栞

私の街に、桃林堂という生菓子の老舗がある。ここの御主人は私と同じ歳であるが、旧制八尾中を出られて、どこへも修業に行かれず、すぐに生菓子の製造に就かれた。その時の話をきくと「Aの店で修業するとA店の餡の味になり、B店に入ると、B店の餡の味になる。桃林堂独特の味を出すには、自分自身の納得のゆく研究に頼るより外にない」というて、今日の老舗を造られたのである。

一千坪に余る製造工場の庭に数十本の桃の林がある。春四月ともなれば、温かいピンク色の桃の花が霞のように咲く。

文字通り桃林堂である。その頃になると、知人、得意先へ桃開きの角封筒の案内状がくる。今年も来たので鬼遊君を誘って出かけた。

折よく東大寺の元管長清水公照長老が見えていて、桃の木の間に佇って野外法話があった。正に桃源境にある春の一時であった。

それから間もなく桜草の案内が来た。最近では風蘭の案内が来た。私の景仰してやまない榊莫山先生のお話があるというので、朝十時から出かけた。莫山先生は風蘭がとてもお好きで、水の流れる庭園のそこここに、鉢植の風蘭が白い煙のように風の如く咲いていた。期待していた先生のお話がなく、現管長さんの御令息のお話を、風蘭のゆかしい香気の中に聞いた。

桃の花孤独の顔はなかりけり

桃の花解脱の僧の色話

桜草水のせせらぎきいて咲く

風蘭や御僧の挨拶掌を合せ

風蘭の香に酔う話佳い話

それから日本間の壁間に飾られている書や絵をゆっくりと見た。

莫山先生の絵も字も惚れ惚れする出来栄えであった。一株のしめじを描いた色紙に

山を眺めて　雨降る日には
世を想い　雨に酔い
花を眺めて　風吹く日には
人を恋う　風に酔う

という一文が先生独特の書体で書かれていた。

鬼遊君は奥さんと午後に行かれて、莫山先生の話を聞かれたそうだ。

座右の句

申請書　明るい顔の方へ出し　（由多香）

私の句

税金の額は中流かも知れぬ　羽津川　公乃

川柳塔　九月号　目次

題字・中島生々庵／表紙・直原玉青

風　蘭……西尾　栞……(1)
〝動物的〟……谷垣史好……(2)
川柳塔（同人吟）……西尾　栞選……(4)
自選集……(28)
■川柳太平記(100)　川柳の群像　河野春三……東野大八……(32)
■連戴　誹風柳多留廿六篇研究（二十七丁）……(34)
水煙抄……黒川紫香選……(36)
61年度二賞候補作品中間発表……(54)
秀句鑑賞「同人吟……八木千代……(31)
　　「水煙抄……小砂白汀……(57)
愛染帖……橘高薫風選……(58)
英訳句―若者との話題……竹内紫錆……(61)

〝動物的〟

谷垣史好

ちょっと古い話になるが、東京のお堀端で例のカルガモの引越しに、物見高い群集が何と万余も集まった。寂莫とした都市砂漠に生活する私たちにとって、たしかに、ほほえましくも心温まる情景にはちがいないにしてもそれは人間の見方であって、カルガモの立場になって考えてみると、実に迷惑千万であったにちがいない。

人間は万物の霊長なり、と教えられて、私たちは他の動物より絶対的にすぐれていると思いこみ、すべてのものを人間中心に考えすぎてきたのではないだろうか。

頭の良さ、賢さということでは、例えば脳の重さを比べてみると、馬は体重の約五百四十分の一、犬は約三百分の一に対し、人間の場合、成人で約四十分の一である。カバなどは体重の二千分の一の脳重しかなく、しかもシワが全くない。人間の頭脳は、これをコ

ジンギスカンは源義経か……東野大八……(64)
第一回川柳塔勉強会……里　小路……(66)
同居あれこれ……栗谷春子……(74)
甘　栗……正本水客……(81)
初歩教室……阿萬萬的……(68)
「　波　」……森井菁居選……(70)
一路集「輝　く」……狭間希久志選……(70)
「筋　書」……中西兼治郎選……(71)
柳界展望……(72)
本社八月句会……(75)
各地柳壇（佳句地10選／辻　白渓子）……(79)
■9月各地句会案内　91　■編集後記　93

座右の句

鏡見て以来芋虫ふさぎこみ　（史　好）

私の句

撫子や刻々曲る命かな　金山夕子

ンピューター化しようとすれば、おそらく超高層ビルと同じくらいの容量が必要とされるだろう。

それほどすぐれた頭脳ではあるけれども、すべての人間が、そのすぐれた頭脳の働きを一〇〇%使っているかとなると疑問である。その点、動物は、平均化された能力をみんながフルに発揮している。能力を無駄なく使うという機能的な面では、むしろ動物の方がすぐれていると言えるかもしれない。それに、また、頭の良さ、賢さが必ず幸福であるとは言いきれまい。

同じ種属の間で仁義なき闘い、無益な殺し合いをするのは人間だけである。個体維持、種属保存を生き方の根幹におく野生動物は、そんなヤバンなことはしない。動物の最も激しい闘いである異性の取り合いにおいても、〝敗北〟を態度で示すと、勝者はそれ以上の攻撃はしない。動物的＝野蛮という考え方こそヤバンであり、むしろ動物の方が人間的であるかもしれないのである。

これからの人間のあるべき姿を考える上で動物に教えられることは多い。

川柳塔

西尾栞選

熊本市　有働芳仙

左遷から成歩になって社に帰り
低い腰一本背負いでくる気かも
ライバルが出来て編棒速くなり
万歩計少し狂わす人に遭い
工場の流れをロボット変え始め
マンションで最後に消える灯が一つ

松原市　谷垣史好

方丈記今年も蟬が鳴いている
敏感な鼻が不幸の始まりに
芋虫に毛虫がとても偉く見え
夕立が来てひとときの倫理観
見苦しきもの魚屋の指の傷
何が不満で戦争ごっこ医者ごっこ

桜井市　岩本雀踊子

寡婦というただそれだけの風の街
不揃いの身内ばかりの鳩の首
騙されて来た仕合せの女下駄
ニュータウン隣の人に顔がない
よたよたと蝶が生きてる廃止線
だいそれた夢を持ってた無精卵

八尾市　高杉鬼遊

一宿一飯駅前で買うしゃれた菓子
晴耕雨読年金おりる日を数え
天災地変ゆたかな胸にけつまずき
大器晩成高血圧が気にかかり
天地無用あの世へ送る白い箱
十人十色空気のようなおつきあい

大阪市　西森花村

赤信号他人に見えぬ僕の家
靴下も夫婦も片方見当らず
別れの日会社も女もその気なり

窓開けて雨に濡れてる男物
祭月大の月なり飲むビール
女の嘘まだ旧作を聞かされる

松原市　玉置重人

名も知らぬ外車のそばでガードマン
無駄足のつもりが生きた棒グラフ
選挙です必ず訪ねてくれる人
豚まんをみやげにミナミから帰り
赤ちゃんの意見は聞かぬ紙おむつ
西成を歩く夫婦は足早で

大阪市　北勝美

過剰包装無駄で食べてる人もいる
半眼の菩薩に心覗かれる
寺の道乞食なくなる福祉国
夕陽ヶ丘入日に風化の家隆の碑
通行税あった切符をなつかしみ
法門をアロハで通る志納袋

岡山県　嘉数兆代賀

クーラーを止めて偲ぼう原爆忌
いいことが降って来そうな空の碧
昼餉ひとり胡瓜の歯切れよい音で
無理にとは言わんと無理を言って来る
手を拭いて何もなかったことにする
ご破算にしてもわたしの敗けである

堺市　高橋千万子

ボーナスの話小商い耳ざわり
美しく別れてたぎるものを秘め
母よりも女としての意見娘に
切りつめて母晩酌へ惜しみなく
蓋をした過去が息づく木の芽どき
種なしぶどうちょっぴり枇杷も見習えば

大阪市　西出楓楽

凍豆腐ふっくらもどり満ち足りる
気の合わぬ人とみじめなビヤホール
生ハムとメロンを食べるライバルで
手応えはたしかと思う口答え
頭痛薬胃ぐすり切れている不安
生涯は幕間のピエロそれでよし

鳥取県　川崎秋女

雨降ってふって固まる城もある
七月の雨よいつまで愚痴を吐く
今日も雨スイカ畑の絵がくもる
七変化ながい長い梅雨だった
お手紙か電話か迷う雨の午後
双六の上りが哀しゅうてならぬ

八尾市　宮西弥生

二人ずつ二人ずつ消えてゆく宵祭
負け犬の仮面で酔うて昼の酒
クーラーの世界で燃える他はなし
旅立ちへ男の見送りほしくなる

旅立ちへ年を忘れた女たち
友達と生命を分ける空の旅

唐津市　久保正敏

模索する道で下五が決まらない
飽食の街から消えて行く知性
指しゃぶる野党に遠いドンの椅子
スコッチの空のボトルにある昨日
ミラーボール人の虚栄を見てばかり
明るさが取り柄の妻の団子鼻

西宮市　林はつ絵

たいせつな余白へ好きな花を描く
一寸の虫で白旗まだ振れぬ
授乳するおんなの隙は見逃そう
過去ばかり言う人も乗せ船進む
土砂降りに頭が少し軽くなる
戦のない国境　橋にあるコント

竹原市　小島蘭幸

絵日記へわたしのあさがおがさいた
ヒロシマの夏をあるいて来てひとり
燕スイスイ僕は郵便屋でござる
非常ボタンを一度は押してみたいのだ
ワッハッハ一年生の通信簿

大阪市　江城修史

四季巡る素直に亡母の忌も巡る
距離置いたままで老師の噂聞く
隙のない男に過去など語れない
妻よ子よ走ろう虹の消えぬまに
煙草絶つ程の命じゃないけれど（禁煙）

豊中市　安藤寿美子

あなたの夢見たけどとても言えません
山梔子やただかなしくてかなしくて
祖母の手にあまる一歳六ヵ月
紙おむつ違和感あるのは祖母ばかり
紙おむつ小さなリュックでしょってくる

伊丹市　樫谷寿馬

文人となって武蔵の里を訪う
妻の背が温かそうな壺坂路
赤福の甘さや天照大神
三人の母在る友が羨まし
旅人の句も添えてある星祭り

京都市　松川杜的

電卓もよいけど五つ玉の音が好き
五線譜より僕にはぴったりロツレチハ
サイフォンの香りへしばらく待たされる
画き添えた水へ目高生きて来る
五本の指こんな便利なものありますか

平田市　久家代仕男

寿司桶へおんなの指のしなやかさ
器量よしよりは気の合う疣胡瓜
飽食の舌に珍味な花茗荷

情状酌量という手もあり浮気
五量霧中なら土鼠叩きを初めよう

島根県　西村早苗

もう秋か別れの指が冷えすぎる
その女の国火の炎える阿蘇の里
晩運という占いを信じ切る
舌に包む酒はやっぱり秋の味
ともかくも逢って見ようと子を連れて

堺市　中川滋雀

引越の人の情が荷に余り
引越の疲れは言わぬ置き薬
閑居とは猫が町ゆく昼下り
一人だけ喫う灰皿を小さく居る
自転車を磨くと雨がやってくる

兵庫県　遠山可住

人工の蛍けなげに闇を切り
カラオケへ静かな席がほしい酒
大物と言われて少し抜けている
腰痛が起きてようやく世帯主
スミレからベゴニアへ太陽が炎える

松江市　恒松叮紅

几帳面すぎても困る酒を酌ぎ
ふる里は野面をわたる祭り笛
くじ運に一番弱い里の父
終章を飾る写真は少し暈け
補聴器で聞くと依固地になるひびき

松江市　柳楽鶴丸

頑固一徹上には上がありました
嘘も方便お釈迦様が笑ってる
シェークスピア真似て「真夏の夜の夢」
馬鹿でもブスでも笑顔は可愛
日本人です島が好き海が好き

松江市　舟木与根一

マル優も余生も影が薄くなる
年金でじっとして居るのに疲れ
脱サラ一号じゃが芋みごとなり
手のまめの辺りへ伸びる運命線
飼われても油断はしない兜虫

出雲市　原独仙

そもそもは足を踏まれてからの縁
出張の濡れ場で濡れて来た自慢
創作へ意欲老眼鏡二つ
夕食へ呼べどテレビのサザエさん
GBの八十歳以上と優勝戦

弘前市　波多野五楽庵

薔薇の花枯れないうちに差し上げる
修整の写真の主と気がつかず
にわとりを見る事がない茹で卵
咳払いから始まった御挨拶
いまに見ろ芋虫だって蝶になる

倉敷市　野田素身郎

外国の女性もやはり長電話
梅雨晴れ間商店街も活気づき
高いはず箸袋まで粋に出来
自民圧勝僕も宗旨を変えようか
沈黙が続き二本目をつける

米子市　小西雄々

楢山へ来てからしこりなど忘れ
脱皮した浴衣姿の娘に見とれ
貯めすぎて遺産争いなどさせず
遺言が上手に書けた日の安堵
無料でも二の矢おそれる妻の勘

倉吉市　渡辺独歩

別れると老妻が言い出す筈がない
ブランコを濡らした雨は問い糺す
遮断機で軍靴の音はさえぎれぬ
付け睫男の震え見てしまう
エッセーが厨の手抜きとは知らず

下関市　石川侃流洞

機に敏な人と飲んでるまずい酒
陳情の少しオーバーかも知れず
憶病な尺取虫が首を振る
ある日ふと恐怖女の長い爪
バーゲンの下から掘り出す手が縺れ

京都市　都倉求芽

土踏まず千里の道へ耐えている
指人形同じ台詞を聞き飽きる
装身具独身貴族の勲章ぞ
梅雨空へ不機嫌に回る洗濯機
雑草が選挙事務所へあわててる

倉敷市　小野克枝

自由の身になって本当の汗をかく
宝石の似合わぬ指を磨き抜く
よこしまな心花屋で考える
敬礼の癖が抜けない戦中派
差し引いた残りで二人食う話

島根県　小砂白汀

馥郁とマスクメロンの傷の跡
微風にも張り子のトラのうこさべん
真実を衝けば傷つくこと多し
恋の唄知らぬカラスよ哀れなり
勤勉な蟻が犯した砂糖壺

島根県　堀江正朗

確かめる若さ両手でさする頬
膝抱いて風と遠慮のない話
降りやまぬ雨の気ままな音に飽き
半端聞く耳が救いのときもあり
カラス鳴く声へ夕陽も頬にくる

大田市　藤田軒太楼

責やっと果たし新居の茶を啜る

念願の家持って知る荷の重さ
チャッカリと飲む気車はおいて来る
赴任した島で拾った人情味
独身の若さが惚れた兄の嫁

岡山県　土居耕花

以下次号妻が怒ったまま眠る
急用の時に限って妻トイレ
蓑虫を剝いてみたいは人情か
坊さんの立小便を見てしまう
もうアカンのを乗せて行く救急車

東京都　増田次章

衣食足り礼節昔のことにされ
肩書きがとれて自分を見失う
世話好きで皆から好かれ出世せず
損なのか得なのか保険が満期
しゃべり過ぎ結論先に延ばされる

美祢市　安平次弘道

弾む毬自信過剰になりたがる
契約者は悪魔か怖い保険金
年金で細々動く縄電車
県人会出世頭の標準語
地鎮祭神を信じた訳じゃなし

富田林市　岩田美代

八月がまた来るぞうすいの話など
海鳴りを遠くで聞いた耳もウツ
身から出た錆はシャボンで落とせぬぞ
悪友は裸になって来てくれる
だしぬけの桜餅には騙されぬ

大阪市　天正千梢

ずっこけながら道徳教育そだてる
恋はマジックさめてから分かり
いっちこわい事に自分をあざむいて
「別れたくない」そんな答を待っている
きっぱりと別れては来たものの

大阪市　河井庸佑

広げ過ぎ風呂敷たたむのに困り
ほっと息抜いた瞬間つけこまれ
愚痴言うて己の値打ち下げただけ
嫁がせて嫁の実家の苦労知る
見てほしいとこ見てくれぬ参観日

大阪市　津守柳伸

旅情には遠い真夏の河童橋
カラオケが済んで身内の酒になる
目覚しが三つ並んだ旅前夜
しあわせを願う女の自己暗示
それからの保険は誇大妄想狂

倉敷市　稲田豊作

楽隠居取越し苦労で暇つぶす
夜の更けて雨だれ亡妻の譜を歌う
煩悩を払えば味のない世界

久し振り笑いに来たと早や笑い
水飲んで汗の補給の労働者

唐津市　仁部四郎

与野党の相乗りで出る騙し舟
裏門が開く時刻に蟻が湧き
養殖鯛梅雨晴れの特売日
ピカドンが開いた道でかくあぐら
髪洗うその時女若返る

鳥取市　両川洋々

ハッピーエンド見届け神もねむくなり
人すくう軽い嘘なら神もつく
廻り椅子へレールの嘆き聞こえまい
泡沫候補からも神様頼まれた
民営分割外堀一つずつ埋まり

倉吉市　渡辺菩句

バランスのいい紙飛行機になってくれぬ
一番強いのはスサノオノミコトかなア
おしゃべりな蟻たちは一匹もいない
天へ投げた石が夏鶯の声
月見草には鬼は涙を隠さない

大阪市　黒田真砂

夏足袋や想い出の人逝きし人
想い出をたどれば温いはにわの瞳
想い出す度違う音糸車
昨日のうそ心が病んで居る自嘲
この橋を越えれば絆切れる悔い

竹原市　森井菁居

能率給もなくロボットは社に仕え
方程式解くとたたりがありそうで
体験で物を言うたら嫌われる
関白は孤独妥協の彩を撰る
初夏の詩枇杷に酸味があってよし

和歌山市　西山幸

暗号がいつも日記の片隅に
旅に出て古いわたしに手を振ろう
種なしぶどうも次の世紀を考える
いつしかに紅差し指も退屈で
本棚の聖書も秋を待ち佗びる

和歌山市　松原寿子

約束の小指あなたへ辿り着く
初めての出逢いレモンの章に棲み
腕を組むそんな度胸もないままに
息切れをのんびりと待つにくい人
噴水のようにあふれてくる余韻

兵庫県　辻文平

勝つまでは帰らぬ無人駅を発つ
唇を咬んで出てくる小さい嘘
胃カメラに昔の傷を覗かれる
汐時を探してコンパクトを開く
ちと過ぎた愛語の後が続かない

近江八幡市　前川千賀子

脱サラと離婚の重さなど較べ
生きているだけで済むなら蚊も蛇も
八月の緑にむせぶ悔いひとつ
とある日の神を信じぬ啄木もまた
一日の茶断ち師の忌とは言わず

玉野市　小谷仙山

ポケットの鈴は最後に振るつもり
泣いたならあなたゆるしてくれますか
同権にはまだ程遠し夫婦箸
皆嘘に成ってしまって梅雨明ける
古希の糸切れぬ程度に引張られ

和歌山市　福本英子

夜更けの珈琲イブモンタンのパリー祭
熱あげているのに振り向いてもくれぬ
片方の乳房を見舞う蘭の花
雨続き熱いお茶まで注ぎこぼす
高金利うまい話にまだ凝りず

大阪市　本間満津子

そば殻枕の小さなバネに明日がある
また瘤をつくって柱に叱られる
甘い点貰い傷つくこともある
エアメール金釘流のアチラ文字
贋物は整いすぎて見破られ

大阪市　神夏磯道子

蟻の列恐いと思う焦りの日
交替の若さへ少し妬み持つ
ビタミンA背負ってうなぎいばってる
献立の喜び季節の生野菜
眠れないのが恐いから考えぬ

宇部市　平田実男

自己主張しすぎいつもと違う酔い
使い道ないへそくりを淋しく見
恐ろしいことを付添い考える
手話楽し指がいろはにほへと
正夢のそれから枕恐くなる

和歌山市　内芝登志代

がむしゃらに生きる女の優しい瞳
待つ人がいるから雨もいとわない
偶然を楽しむふたりのコップ酒
制帽をふって息子の鹿島だち
不況風負けん気だけでは生きられぬ

寝屋川市　稲葉冬葉

旅の夜は笑いころげていた浴衣
食卓の花へ戯言並べても
ひとまずは合槌打ってからのこと
再会に北窓少し開けておく
手綱捌きがぎこちない道中記

京都市　山本規不風

夏休みの女に隙があり過ぎる

色事が噂にならぬ守り神
知恵比べ負けて三面記事の種
平均寿命延びて生きねばならぬわい
お中元の品に注文する驕り

米子市　林　瑞枝

自分史をめくれば船に灯がともる
安息の部屋にコインの落ちる音
風はピンクで多感な耳を持っている
チャルメラが流れ太宰を読んでいる
すり鉢を上がると一面花ばたけ

島根県　錦織文子

灯を消してから先に逝く話など
ストレスを何処へ捨てよう白い壁
二階また冷戦らしい風の向き
そして朝まな板やさしい音で鳴り
ライバルも老いたり仏心抱きつづけ

米子市　林　荒介

ふる里は流れる雲の向う側
逆縁の流れ小さな仏たち
雨三日洗濯物と濡れている
案山子でも二本の腕を持っている
灯を消せば銀河の果を往く列車

米子市　菅井とも子

一冊の名簿に母娘名を連らね
宍道湖の蜆が今日も震えてる
誠実な父でバランス崩せない
助かった知らせに受話器ふるえ出す
実年の寂しさ趣味に逃げている

米子市　田中亜弥

腹の児がVのサインを出している
かごめの鬼よ明るいうちにお帰りよ
南風あすの約束わすれるな
島つづきみんな縁者という顔で
笑い声わたしの声で目が覚める

米子市　野坂なみ

快い震動今日の棟上げよ
源流を確かめたくて川上る
塩壺を満たすと母の季がめぐる
特急に乗ったばかりに降りられぬ
アンバランスになって手叩く鬼がいる

米子市　政岡日枝子

数々の神に祈って今日がある
花骸昔の夢は語るまい
少年の自転車脇目などふらぬ
過去帳に叱られるから働こう
人なみの言葉がいちばんいいらしい

名古屋市　越村枯梢

鍋底を磨いて嫁は見直され
屋上の鳥居に脱サラ告げて去り
花束贈呈父の涙は幾山河

履歴書に汚職の文字が抜けている
ドヤ街に飼われる犬は素直すぎ

唐津市　田口虹汀

良禽が集う茂みの豊かさに
盲点を突いた三文判の事故
生き抜こう共に白髪を染め合うて
二代目を継ぐ六十の錨綱
終戦譜明治の父を鬼にする

富田林市　藤田泰子

しっかりと握っていた筈だった砂
返信を期待しすぎていた奈落
路郎の忌職業主婦を宣言す
とび越えて行けと恩師の見えぬ鞭
からくりは見せてはならぬ人形使い

境港市　細木歳栄

死ぬほどに愛した色でカンナ炎ゆ
他所の花ばかり綺麗に見せる鬼
満ち足りた心雨さえ快し
うたかたの愛だと星がまたたけり
逆立ちをしてもあなたに届かない

八尾市　宮崎シマ子

ネクタイの模様がずれて罪一つ
合い印つけて味方にひきつける
梅雨見舞入れるポストも雨に濡れ
街につくと灰色になる海の風

極楽の極にも楽にも木が目立ち
茶柱が二本も立った日の迷い
どの駅のホームも夏冬身にこたえ
ハネムーンみんなお嫁の貯金から
成田着少うし不倫の日焼けして
定退のまだ婚礼が三つある

兵庫県　中田白李

見通しの甘さに泣いた開票日
先頭でないと走らぬ出たがり屋
反省もせずに飲んでる反省会
野暮でこそ校長無事に勤め上げ
抜け殻の親父が好きな枯れすすき

浜田市　中川幸一

餌に寄る雑魚の不満は釣り上げぬ
童心満々落書電車に乗る夫婦
自画自賛天狗の鼻が曲り出す
水中花水の情けに飽和する
梅雨の鬱自問自答を繰り返す

出雲市　園山多賀子

あみだに被る帽子おんなを泣かせてる
白黒の帽子のきつい自己主張
帽子ふかく被って哀しみに耐える
絶交状と知らずに待ってた月見草
歳月の矢よあの人の胸を射よ

出雲市　石倉芙佐子

尼崎市　春城年代

鳩時計たまにきのうをもう一度
ほろ酔いを真似てる月の影ぼうし
酔うほどに心はしゃんと哀しけれ
ひとりの私夫婦のわたし交わらず
アイカバーしても頭脳に灯がともる

尼崎市　春城武庫坊

達筆の手紙に返事持てあまし
空梅雨に旅行案内の頁繰る
返信に美女の切手が貼ってある
鎧師の心の底にある平和
出迎えの傘が本屋で漫画読み

松原市　佐藤藤子

思い詰めるとますます深いおとしあな
ねずみ花火に足を掬われそうになる
リクルートスーツに合す髪を切る
約束の墓参にかえる夏帽子
スランプに金魚掬いもおもしろし

富田林市　田形美緒

茗荷食べ記憶消したい夏の傷
駄菓子屋が消えていじめが幅きかす
銭湯が消えて人情薄くなる
帰りにはいづもやへ寄る墓詣り
切なくて毛生え薬を買いにゆく

豊中市　田中正坊

ループタイむかし参謀だった人
平均寿命誰も保証はしてくれぬ
鉄棒が重たくなった鬼の老い

故白岩文衛君句碑建立

喜びと哀しみ亡友の句碑が建ち
ありし日の君のよう句碑どっしりと

西宮市　西口いわゑ

利口にも馬鹿にもなれず輪をはずれ
盛装で過去はなぞめく揚羽蝶
でこぼこの道も歩いて来た夫婦
紫にうずめた雨の菖蒲園
好い事が続き振り向くのがこわい

川西市　氏林洋敏

一票の重みを軽く行使する
美しく老いても孤独という試錬
参観日息子の欠伸見てしまい
電池切れまでは律儀な腕時計
マイホーム担保に銀行とおつきあい

大和高田市　岸本豊平次

花に合う葉があり人に友があり
無精でも作れますよと苗をくれ
庭の木を梯子の高さで止めておき
冷やしあめ一口飲んで遠花火
クリームを塗るのが化粧だった母

姫路市　人見翠記

信濃路の旅

梅雨空や確率聞いて旅に出る
栗強飯杞柳の篭の味うれし（小布施にて）
旅まくら川瀬の音か五月雨か（藤井荘にて）
露天風呂心も緑身もみどり

赤穂御崎にて

明けやらぬ海に出てゆくポンポン船　箕面市　坪田紅葉

梅雨晴間信州の温泉につきました
温泉はよしすえ膳の二三日
おとずれた野尻湖畔にきく民話
お湯の中名古屋言葉と大阪弁
旅がえり三日おくれの手紙読む　大阪市　長谷川春蘭

風で回るただそれだけの生涯で
主義主張いやな路線へ矢を向ける
断ち切れぬ絆母です娘です
短針を追われどうしの靴すべり
つまずいた石に老化を教えられ　西宮市　奥田みつ子

終戦忌南瓜の花が咲いている
梅雨空のつばめお前も残業か
港町帽子あみだに通り過ぎ
女過去に生き男過去を捨てる
自問自答白い雨足見つめつつ　松原市　小池しげお

私立大学先ず麻雀をマスターし
幼稚園泣いたらお利口さんになり
俺の票も西川きよしは取り過ぎる
生ビール職場がおもろておもろうて
年金を老眼鏡で計算し　和歌山市　神平狂虎

人は今ひとを静かに想うなり
愛を下さい本屋の前で叫びたい
笛の絵を描くと心が海になる
夕霧に紛れて旅に出てみよう
喉も心も渇いてしまう日の訣れ　和歌山市　後藤正子

母の病名街に氾濫して悲し
母想うばかりに嘘を幾つもつく
入院はいや何んでも食べる母になり
誤診であればあればとふとん干す
この子この娘と母にはまだ子供　高知県　松岡三吉

庖丁研ぐ妻に反抗などしない
朝市へ素顔のまんま買いにゆく
ガマロの一円玉は母のもの
膝小僧じっと見ていたのは男
家計簿をつけるときっと揉めるだろ　岡山県　荻野鮫虎狼

禅寺へ社運かたむくのが一人
下積みが済めば今日から粗大ゴミ
毛虫にも馬鹿にされてる庭いじり
雨漏りの音は四分の三拍子
定年の背中に淡い陽が当る

姫路市　丁　坪　サワ子

年金の羽根が軽くて翔び回る
私小説書けば涙のあとばかり
外見にはどう映ろうと夫婦です
六十路から大学院と長寿国
老醜を孫には見せぬ気の配り

尼崎市　西　村　かすみ

十字架を胸に祈った事がない
常連へふっと女将の愚痴が出る
別れの手少し汗ばむ帰り道
定退の男に非常口がない
足並の中で謀反を考える

兵庫県　藤　後　実　男

イヤリングしてたこ焼を食べている
ツッパリが一人になった紙袋
年金のなさけ知ってる小銭入れ
円高がすべり台より落ちてくる
建増しの部屋姥捨て山となる怖さ

今治市　矢　野　佳　雲

悪友という名で男信じられ
上司には水火辞せずと言うてある
回り舞台くるり嬉しいことに遇い
ぶっきら棒男善意とはにかみと
恩返し出来ず葬儀に行っただけ

寝屋川市　堀　江　光　子

折込みを見くらべて行く土用丑
青春の一齣いまも革手帖
とき二羽になった記事読む梅雨の朝
美しい夢見つくしてばらの散る

壺阪寺　観音へ花の香りの道しるべ

柳井市　弘　津　柳　慶

夫ただ馬鹿野郎で締めくくり
ガニ股で車内販売の娘が通り
寝台車睡れぬままに妻のこと
風向きのままに並木はなびいてい

倉吉市　奥　谷　弘　朗

古稀祝妻と二人で京の旅
感謝する気持一家を丸くする
ちっぽけな善意明るい記事になり
飛込めば蛙に似合う波が立ち

東大阪市　森　下　愛　論

母さん寝たのと秘密打ち明ける
会議室出てから女よく喋り
腹立てた嫁の食欲すさまじい

ウンウンとうなずいていて妥協せず

高槻市　辻　白渓子

言論の自由に黙否という弱味
あんたには弱いと手の内まで見せず
歩いてる夢しか見ない車椅子
世辞だけで泳ぐ出世はたかが知れ

鳥取県　清水一保

愛という嵐に貴方耐えますか
哲学の中よりユーモア拾ったろ
唯一回の人生それでも自殺する
柏手の嫌いな神には挙手をする

岸和田市　福浦勝晴

地下の豆秋先生に捧ぐ（一句）

ふるさとの星の滴で酔いが醒め
一国のあるじを批判するコップ
電子機器便利な世とはいいながら
官能の森でむさぼる花の蕊

岡山県　直原七面山

夫婦とは鴨と葱
二号持つ祖父は喜寿
富士を見て飲むビール
恋のドラマを織る二人

東大阪市　斉藤三十四

五平餅赤いタスキにすすめられ
鮎竿に今日の流れの色をほめ
象牙パイプ煙草の味をはなさない
パートで美人やねーと言われたの

桜井市　河合茂雄

笑うのも何日ぶりか老夫婦
見て欲しい見て欲しくない新世帯
追われても蛍は灯をつけて逃げ
手離したジョーカーへ口づけしたくなる

島根県　堀江芳子

平穏へピエロは一人だけでいい
点字板わたしの痛み知っていた
夢のなかでも離さない夫の掌よ
足枷の絆夫婦であたためる

米子市　石垣花子

切り捨てて鋏は後悔ばかりする
亀の子に故郷の絵が消えて行く
降りやめばもう父の手に傘がない
鍵掛けて机味方にしてしまう

米子市　青戸田鶴

雨しきりあじさいだけが満ちている
飾るだけ飾って寒い貌になる
なにもかも腹におさめて胃が痛む
イランからの便りふるえがとまらない

米子市　寺沢みど里

サーカス小屋出て北風も受け入れる
決意した筆の穂先が震えている

泰山木のその名に恥じぬたたずまい
隠れん坊にほとほと飽きた梅雨の山　米子市　澤田千春

詩のせた船もやがては風に逢う
震えてた北の窓にも花便り
故郷の海にやがては帰る船
こみ上がる想いを月に話したい　米子市　茂理高代

おどおどと何を聞いたか耳飾り
裏切りに慣れて棘もつ夏あざみ
母として何時も心に受皿を
泣くだけは蟬だけにして病む孫に　橿原市　岩井本蔭棒

目の前でタバコ喫うてる仕掛人
団欒の灯りに暮れる向う岸
新妻も波止場の雨も泣く赴任
見せるよに消した元値が笑ってる　今治市　越智一水

酔言に耐えてホステス骨を抜き
冷静になれと庭石力づけ
金魚屋の金魚買わない子が囲み
日盛りをよそに蜥蜴の派手な恋　大阪市　藤田頂留子

牽制球私も苦手といっておく
欲しい惜しい言ってるうちは大丈夫
下手やとは言わずあんじょうやりなはれ
相槌をうてば長所をならべたて　大阪市　鈴木節子

夏祭りはたちに還る藍ゆかた
写経して心配ごとに遠くいる
母の愛スプーンぐらいで計れない
イエスノー電話待つ間の雨はげし　鳥取県　森田布堂

梅雨冷えに妻と一と日の灸をすえ
チャンネルを回すと上手な卵焼き
肩書も書いて花輪が贈られる
嘘を聞く耳にぶらぶらイヤリング　岸和田市　原さよ子

我の強い自分ひとりを持て余す
梅雨晴れ間いっぱい干して気も晴れる
嫁さんにうまく使われ家平和
長寿国私もそろそろ仲間入り　和歌山市　若宮武雄

神さまは賽銭箱を拝むかも
はったりはよせと呟く父の墓
太陽の存在拒んではならぬ
記念金貨持ちたいわけが見当らぬ　寝屋川市　柴田英壬子

具体性ない夢だけど磨き抜く
オパールの花芯陽まわりデビューする

器量よい茄子に出会って頬ゆるむ
満員車廻りは他処の夫達　寝屋川市　宮尾あいき

おしゃれして気取って出たのに俄雨
いやな事みんな忘れて沙羅の花
オールドミスのわびしさ残り咲きの藤
鈴なりに今食べ頃の他家のびわ　和歌山市　堀端三男

最高のポーズだるまに目を入れる
背伸びした発言足元掬われる
旅疲れ癒すわが家の香の物
里に向く足の軽さに歳はない　奈良市　森田カズエ

笛吹けど踊らぬ妻のいる安堵
ほどほどになんて便利な言葉かな
お中元バーゲンセール誰の案
立食パーティーちらりとマナーみせただけ　寝屋川市　江口度

紫陽花の前で約束などしない
沙羅双樹祇園祭りはとこしえに
ざくろ咲く息子は今日も帰らない
くちなしの花の終りが恋しくて　松原市　北野久子

救急車舅と同じ事故現場
おとなしくなれば御迎えかと思い
孫育て済めば舅をあてがわれ
心まで老けたくはなしイヤリング　大阪市　坂口公子

タイムトンネルころげて笑うた頃に逢う
転ばせてさあさあ起こしてあげましょう
寝ころんで雲を見ている悩んでる
突いてくる妻の図星へへこたれる　宝塚市　丸山よし津

風鈴へお世辞上手な朝の風
一票が欲しい電話にガスを止め
横糸を織る母が居て灯がぬくい
戦争も歴史も漫画で読む世代　高石市　浅野房子

雑草に追われて暮れる夏の庭
むし暑さ窓をあけると猫がくる
旗色が悪くなったらボケた振り
熟年は時々とまり木ほしくなる　大阪市　大塚節子

信濃路の林檎頬染めたるも青き実も
人は人吾楽しまん老いの坂
マスコミに乗せられて来た秘境の湯
庖丁式俎の鯉今日はスター　鳥取市　森田熊生

バカ笑いして誤解した穴うめる
ランドセル一度帰ったことをつげ

言い訳を受けてる方も見栄を張り
本心を知ってる涙なら強い　唐津市　浜本久仁於

畦道の下から白い手と握手
孫ほどの医者に老化をいたわられ
妻といる昼間が長い花鋏
瞑想を壊すとなりの咳ひとつ　唐津市　浜本義美

南瓜蔓拗ねて隣の庭で伸び
灯を消せばだんだん猫の眼らしゅうなり
虫干しの積りで羽織る絽の羽織
円高不況かかわりなしに寺の布施　鳥取県　林露杖

知るもんか片目だるまの独り言
七夕や息子の嫁がきまらない
燃えもせずストレス溜ることもなし
神経痛宥めすかして田草とる　岡山市　川端柳子

傾けてみようポットにまだ温み
失礼をしましたあなたが奥様で
母さんを探す大声家がゆれ
自分を一番叱る猛烈腹が立ち　神戸市　仲どんたく

住みにくいジャパンよトキの死コアラの死
爪弾きに更けて明治の雨となる

とまり木で日づけを変える小糠雨
ワンパターン今日も暮れ行く老夫婦　高知県　赤川菊野

オーダーを着てもやっぱり同じ顔
半分は亡夫に聞かす独り言
開票のニュース横目に手内職
落人のルーツ誇りに千枚田　東大阪市　崎山美子

絵心をそそるあじさい寺の雨
気まぐれな男の影が気にかかる
鮎横目に行ったり来たり市場篭
女傘さしかけられたにわか雨　弘前市　田中叶

妻と母の重さに耐えている社宅
へっこんだ缶というべき妻無口
そっとしておくが一番よい夫婦
縄跳びのコツでいつもの小言聞く　浜田市　佐々木裕

コップ酒あおる男が意地を欠く
親の愛いつも求めるクレヨン画
鈴付けにやった男が持ち帰る
指折って親に会う日をまた数え　岡山市　井上柳五郎

実年のこんな筈ではとの懐疑
また電話票の依頼へ立たされる

おとなりの叱言も聞え梅雨晴れ間
夕餉話題庭のくちなし咲きそめる　岡山市　行吉照路

鬼が棲む地図に男の血が燃えて
兵隊の酒は下士官らしい声
死ぬときの書庫の整理がまだ出来ぬ
世渡りの手品の種が切れかかり　岡山県　岩道博友

立ち読みの隣の肱が邪魔をする
再就職今度の腰掛小さくなり
お喋りをして来たらしく質問す
逃げ道へ小さな義理の熨斗袋　西条市　片上明水

追い抜いてからの目安が甘くなる
半歩ずつ退けば笑って済む話
親の汗じっと見ていた子の瞳
酔うほどに父が親爺の顔になる　笠岡市　松本忠三

新品の靴で退職ご挨拶
惜しまれた餞の辞を信じよう
毎日が日曜であり落ち着かぬ
これからは婦唱夫随で行ってやろ　守口市　野呂右近

売約済の札見て急にほしくなる
壜にさえある撫で肩と怒り肩
歳ですと言い切る医者にすがられず
血圧におびえて暮す塩加減　羽曳野市　田中隆二

仰山な本に囲まれ世にうとし
雨三日妻は多弁になってくる
のし袋義理と見栄とがからみあい
飲みほしたグラスに悔いがまだ残る　羽曳野市　佐野白水

一ヵ年先の計画へ今日生きん
檀家寺の墓地に空き地がある話
三人三様総理の器に小さ過ぎ
無党派の夫婦一票ずつ各党へ　貝塚市　行天千代

幼な子のしぐさは母の其のままに
絹ずれと言う言葉有り長廊下
夜明けがたなつかし人の夢を見る
これからは人生峠下りなり　鳥取県　新家完司

目が合うと好きになるので目を伏せる
六月の雨がお米になってゆく
奉書紙の白かしこみて筆をとる
泳げないわたしは砂の城つくる　鳥取県　土橋蛍

当らなくても愛の矢をひきしぼる
繰越金がない八月がやってくる

健康の自信過剰がセロリ噛む
働かないと貧乏ゆすりの癖がでる　島根県　岸本輝水

年金でフト貧乏を忘れかけ
お土産に土産が返る里の春
三面鏡裏番組が映ってる
外泊の電話が宿も決めており　島根県　松本文子

泣く事も忘れて生きた一周忌
訃報聞くみんな仏になれる筈
亡夫と居てもう背かれることもない
すっきり明るく書けないものか我が日記　交野市　山本テルミ

底ぬけに明るいうちの豆御飯
足の指やっぱり親子似ています
ゴキブリが出て喧嘩は小休止
夕御飯息子のビールあてにして　島根県　石田清泉

竹に乗ることも忘れた土踏まず
新車だから神様も聞いてくれ
空箱の未練やたらに積み重ね
ライバルに白髪の数で負けていず　島根県　松本はるみ

一太刀を返すかわりの花を買う
半袖が秋の気配をつかまえる

脱ぎすてられた靴のいびつな息づかい
脳味噌の怒りなだめた夏帽子　吹田市　茂見よ志子

糠漬に時間計った茄子の色
妻の知恵借りてゴルフの賞揃え
雲流る由布嶽を背に朝の駅（南九州旅行）
日南の水平線に立ちつくす（　〃　）　羽咋市　三宅ろ亭

旧盆は一族郎党馳せ参じ
旧盆は江戸弁能登弁大阪弁
よいとこへ来たとカメラマンに仕立て
帰省隊戻って裏に鳳仙花　和歌山市　坂部紀久子

反省と余韻昨日のプロを繰る
寝間で聞く雨は過去を連れて来る
恙無い朝へ糠味噌掻き回す
早よう嫁を貰えと遅いめしを盛る　和歌山市　福井桂香

アイスクリーム提げ美しき博多帯
香水もつけて出かける夏帽子
イニシャルをなぞる指先燃えるのに
満潮へ上げる帆がない小企業　高槻市　竹内花代子

二人いて二人無口にある孤独
入会の声が上ずる自己紹介

ソックスを重ねばきして老母の梅雨
冷めんときつね私と老母の昼　尼崎市　角野かず子

飲めそうな顔であとからついて行く
美辞麗句あたためている種子袋
本当はさびしがり屋のサングラス
先祖から伝わるものがない平和　姫路市　大原葉香

性急になったナー年とったナー
和服着て妻は女を取り戻し
宝くじ買おうか矢張り止めとこう
ヌード写真六十男の部屋に貼る　大阪市　中西兼治郎

伊勢えびは伊勢だけに居る訳でなし
検札に車掌の足の位置はプロ
痴漢など心配要らぬ年齢になり
均等法女も七人敵が出来　岡山県　二宗吟平

同門の中でもせめぐテリトリー
珍客の電話法話を抜けて出る
背の子をあやしてあげて満員車

白岩文衛さん句碑除幕

君が代の岩へ心の紋生きる
やさしいと選んだ妻に叱られる　大阪市　寺井東雲

鉛筆を削る手付きでリンゴむき
恥らいがあってピンクのネグリジェ
ふところで手を握り合う市が立ち　諫早市　原田メイシュン

両方をたててやりたい投票場
端金ままよパチンコ屋へ走り
俺よりも保険会社を頼りにし　倉敷市　藤井春日

よく勤めよく飲み喜寿となりました
仔猫抱く女に出会う散歩道
神仏の御利益さえも金次第　守口市　羽原静歩

掌を合わす仏間に浄土の風が吹き
自分のライバルは自分と悟りきり
やせてくる浄土に近くやせてくる　和泉市　西岡洛酔

ストレスをすかっと夏の稲光り
エプロンをはずしてからの神頼み
真夏日のハンカチ男の匂い過ぎ　仙台市　川村映輝

スタミナの素は老妻の料理から
好奇心旺盛ボケが近よらず
一区切り栞を入れて深呼吸　七尾市　松高秀峰

部屋中の壁へ若さが貼ってあり

野仏に近いお顔の人も来る
血圧を盾に二次会逃げて来る
神戸市　山口美穂

自画像に私の心嗤われる
過ぎし恋思い出させる夾竹桃
円高でチリ紙交換の不愛想
岸和田市　清野こう

下駄箱の隅に未練の男下駄
遠い日の人くちなしの香に想う
捨て切れぬ亡父の名残りの釣道具
岸和田市　古野ひで

建前と本音の間で揺れて生き
苦労した話はよそう愚痴になる
願い事あるので石段気にならず
岸和田市　島崎冨志子

いい話ばかりで親娘の電話きれ
減点の恐さにかぶるヘルメット
崖くずれ遺体の母の胸で生き
岸和田市　芳地狸村

留守番を嫁にまかして夫婦旅
倒産の噂をまいている他人
知らぬ間に恩師のくせを真似ている
芦屋市　竹中綾珠

当選も落選も涙の選挙なり
大阪は太閤さんが好ききよし票

梅雨晴れ間布団も心も靴も干す
鳥取市　広本文子

思い余りおんな一途に飯を炊く
梅雨冷えに責められる事ひとつ秘め
別れきて蛇口いっぱい水を出す
鳥取県　森山盛桜

人類の頭脳を氷河期が嗤う
本性は昼の鏡にだけ写る
主の座から広がって来た喜劇
鳥取県　羽津川公乃

さえずって森林浴の仲間入り
還暦のファイト私は恋をする
ウツの日は入道雲に励まされ
町田市　竹内紫錆

老友が同好図書はこう借りる
縁談に若者が書く丸い文字
毎週の落語に寡婦の三十年（亡母とラジオ）
西宮市　野呂鵜汀

人間万事金で買えない老いがある
夫婦ではないから肘をツネられる
服の袖妻離れまいとして摑み
神戸市　山片紀雄

ウエストを仕立て直してぼやく秋
大国のはざまにうかぶ平和国
説明が言い訳めいた喋りすぎ

波長合う友と相部屋木曽の宿　姫路市　松浦輝月

あの人の本音を聞いてうろこ落ち
葬儀用写真は之と子に頼む　川西市　松本ただし

諦めのあといらだちの雲動く
人情の薄い厚いの自己弁護
どうにでも取れる言葉の裏のうら　倉敷市　小幡里風

爺ちゃんの微熱茶呑み友がふえ
さわやかにおむつが乾く梅も漬け
魅せられて花一枝の出来心　島根県　藤原鈴江

生きのびただそれだけのことなれど
佗しさよ唇に紅さす夢の中
縺れ糸ただうろうろと日が過ぎる　島根県　北川民子

明日は明日ワイングラスに虹が立つ
秋の風二人居てさえ佗しくて
雨蛙鳴くなわたしは雨女　島根県　城角鶏生

ローマ字の一字が抜けたパスポート
疑いをもたぬ女の眼がまぶし
換気扇やたら匂いをまき散らし　福岡県　横地雅風

眼中にないなど下手な負け惜しみ
目下とも部下とも言わず職場友
眼界を見下ろすのが好き山に行く　和歌山市　牛尾緑良

診察券今日一日を棒にふる
はやらない医者で将棋の腕を持つ
付添いも無口に診察室を出る　和歌山県　寺田裕美

ビワ酒の色鮮やかに熟れてくる
自立する女の年齢は聞かぬもの
首を振りながら扇風機に聞かれ　和歌山市　玉井豊太

錆となる女を連れる放浪記
催促に芝居を打ったなと思い
縁談に昔気質の本を提げ　寝屋川市　平松かすみ

お話が合うてなるほどB型で
呼び捨てにされて落着く伯母の家
焼きいかの味を教えた日本海　大阪市　坂本仙吉郎

武蔵野の面影もある深大寺
夜行船丸亀城の灯が一つ
壺坂に仏足石の数多し　大阪市　吐田公一

若い娘と飲んだ楽しい夜の短か

定退のやっと自由がまた悩み
潮騒の響く苫屋が好きな母
大阪市　北山悟郎

戦傷が人後に落ちてなるものか
年金は八方破れの暮し向き
何か一つもの足らんで居る老いの坂
大阪市　松尾柳右子

真ん中の子が出世するビル谷間
母の過去聞きたがる齢になり
疑ったばかりに寒い夜となり
大阪市　板東倫子

子供より親と教師に要る躾
一応は予算をたてた慰安会
カラオケの天狗くたびれ宴終る
大阪市　渡部さと美

ゴキブリへ立ち向かうなり母となり
忍耐は数えとくもの蓮の花
鬼千匹可愛いわが娘であったとて
出雲市　板垣夢酔

献血はあの人のかも血が騒ぐ
アバンチュール忘れた頃に付けが来る
たわむれる仔猫が蟹に鋏まれる
出雲市　吉岡きみえ

蛍火を追うてやさしくなる女
ふるさとはゆっくりさせる風が吹く
糸通す穴にも風はたむろする
堺市　柿花紀美女

子も父に近づいて来た処世術
ロボットも新旧が有り追越され
限界と思いたくなし明日がある
豊中市　上田登志実

倦怠期今朝も機嫌が悪いよう
医者に行けお灸に行けと言うばかり
雨の降る朝のラッシュの憂うつさ
尼崎市　奥山美智子

伊勢志摩を訪れて

夫婦岩つかず離れず綱を張る
心得たアシカの芸にほだされる
赤福をみんなが提げて旅終る
河内長野市　井上喜酔

故郷の虜になって母は老い
独りでは歩き切れない夫婦坂
公園の朝が楽しい鳩の私語
羽曳野市　中村優

土用波吾は海の子忘れない
感性が豊かでクシャミ嗤い合う
御用聞き吾が家のように戸を開ける
富田林市　松本今日子

待ってみるそんな気持になる港
縞模様描いて鳥羽の海は雨

次々と顔ぶれ代って行くロビー　富田林市　片岡智恵子

盃洗に愚痴を沈めて生きる女
デカイ誤算ホールインワンやってのけ
筆の味墨の香りが蘇り　米子市　光井玲子

ひまわりも忘れはしないきのこ雲
雲の果てひばりは何を見てきたの
ロボットにまだ渡されぬ編針よ　高知県　小澤幸泉

ボーナスにいくつつけたい羽の数
梅酒飲むうれし悲しい味を飲む
サッカー少年父の届かぬ顔になり　高知県　曽我部裕

まだ魅力あるよと妻に言うてやる
蟬しぐれ昨日のように思う過去
座ぶとんの厚さに負けてなるものか　岡山県　小林妻子

世渡りは魚釣りもありパチンコも
大ジョッキ一気に干してから話す
慕われて慕うて亡夫と棲む景色　豊中市　奥田満女

男らしいお方に見えて無精髭
極楽は満員まだまだ生きられる　大阪市　古川美津枝

朝顔もすがる支柱の好き嫌い
見舞着も女心へ気をくばり　米子市　金山夕子

高い山低い山でも生きられる
ご近所と比較がなくて肩凝らぬ　大阪市　塩田新一郎

竹かいな筍かいな五月尽
熊野灘日付を越えた波が来る　寝屋川市　岸野あやめ

勾玉をパワーシャベルが掘り出した
翔ぶことも知らぬ女房の指の節　倉吉市　淡路ゆり子

恵方の海に手放す父母の船
少年の視点はいつも跳ぶ構え　大阪市　町田達子

御都合ではフィクションと言うドラマ
袋菓子に時の流れを知る仏　和歌山市　山川克子

その時はその時なりの絵を描こう
辻褄を合わす余計な一言に　鳥取県　さえきやえ

札束の心が読めて手が出ない
左遷地で陽の目見ているかたつむり　富田林市　新開千代女

父も子も小遣い値上げ頼んでる

自選集

梅雨末期霧笛が島を眠らせず
身を震わせ己を責めるけしの花
仙人掌と話が出来る自閉の子
肩書を捨てて止り木ふさわしい
風鈴が暑中見舞を出せと言う

月原宵明

七十の坂ひらめきも鈍くなる
体調もまあまあ齢とあきらめる
入院はしたことがない老いの自負
若い気でいる足元を危ながり
適当にお茶を濁して世に馴れる

金井文秋

梅雨明けを待つためいきに草伸びて
海辺にテトラポットがペンを執る
均等法どこか間のびの風の道
筋書は古いがやっぱり生きていた
孔孟の嘆き選挙の低次元

尼緑之助

四季の花咲かせて私の小さい幸
当選に日焼けた顔の目が濡れる
みちのくの民話いっぱい旅便り
さからわず流れてみるも老い楽し
明日を信ずるそれが私の信心です

藤村〆女

サファイアは矢車草の青の濃さ
安産の無事がうれしい娘親
又来てね二歳の孫が愛らしい
お中元の義理お歳暮で精算し
かかり子の病　長寿をあわてさせ

川口弘生

結び目がとけないままに人恋し
愛ひとすじ較べあう何もなし
女ひとり勉強中を口にする
うしろゆび自信に満ちた肩になる
天の窓妥協をしたい日もあろう

正本水客

さよならの余韻が小指から伝う
選挙戦のどかな村を二分する
意表つく顔ぶれ裏の裏をかく
ロボットのおもちゃ孤独な子に育ち
窓際の机夏陽が直射する

小林由多香

どちらにも話題が無うて月を賞め
左遷地の人が同情してくれる
地図にない道で拾った百円貨
旅プランいっぱいためて秋になる
行き過ぎた汗を拭き拭き訪れる

黒川紫香

古い傘だが濡れる日もある妻がいる
若い樹が育つうれしい父の森
千切り絵の笑顔で音のない娘
小さい皿だから正直だけのせる
鼻鐶の以来小牛は人嫌い

市川鈴魚

風或る日魔性となって火をあおる
手ぶらでも敷居が高くない仲です
安心と背中合せにある不安
落ちこぼれですと自伝に書き添える
穴があっても入らぬ奴が一人

本田恵二朗

日々楽し言い切ることはやめにする
言い訳の悩みをかばう妻が居る
孫だけが物識りだとは言ってくれ
逆らえばやはり心の隅に傷
自信ありげな言い種に騙される

児島与呂志

核軍縮ゲームジュースを繰返し
睡蓮の一つ一つに霊が乗る
竹伸びる節目節目で考えて
皿を割るならなんぼでも売っている
極楽はこの世にあって酔うている

工藤甲吉

集金へ待たさず帰さず留守をせず
静養中人間さまにある得技
昔ならす巻きにされる恋をする
添乳する寝姿やっと母となり
字引引き出してやっぱり父の勝

大矢十郎

古本屋拾い歩いて懐古趣味
陳腐など思わぬ詩語は誰も好き
雨しとど脳裡に滲みる師の句集
奉仕したのにのにのにと陰湿な
甘い辛いはあなたの味覚ご随意に

野村太茂津

西の辻北へ大阪間誤つかせ
首輪してもらって犬の誇らしげ
翔ぶ女しかと見えたは影法師
観光の端にことこと水ぐるま
のまれぬと言い効くと言う小湧き水

長野文庫

睾丸まで抜かれて木から落ちた猿
今席を蹴ったら俺の負けになる
嘘つきが笑いこらえている不気味
死と背中合わせの友に励まされ
助手席の犬まで何んとこましゃくれ

山内静水

飼主に似て吠えない犬に吠える犬
平和つづいて男に化粧品がある
実年の化粧しっとり若返る
ロボットも働き過ぎ円高はつづく
バランスがくずれたらし倦怠期

藤井明朗

鮮やかに人恋う愁い花は濡れ
刻濡らす佇む女へ銀の雨
米の飯山盛りにして飢えを知る
受け止める両手に思いやり重く
仏心に触れて懺悔の灯がゆれる

水粉千翁

兄弟でこうまで違う好き嫌い
当番の相手は虫の好かぬ人
男にしてやって下さいとは選挙
ハイハイハイ半分ほども解ってぬ
つまずいた石が私にかえらせた

米澤暁明

早朝に来た仲人のよい返事
子が五人老いのひとりへよりつかず
貫一お宮の名残りの松へ月が出る
かみなりは頭上神様ほとけ様
七月だ梅雨の晴間の海開き

高橋操子

舵のない船を発たせている枕
雨なのに水平線に灯が見える
入道雲の峰へのぼってゆく父か
上げ潮に私の船が間に合わぬ
風向きにこだわる船と昏れてゆく

八木千代

京都辺りで辻褄が合っている
昼寝して兎の気持よくわかる
お向いのおじいさんにも灸据えて
扇風機少し疲れをためている
友ひとり住むマンションの戸が重し

小出智子

—同人吟—

秀句鑑賞

—前月号から

八木千代

戻り梅雨というのか、いくら降っても梅雨明けともならず、何度も雷鳴や稲光りで区切りをつける様子をしながらの雨の日、人間と同じで天上にもふんぎりがつかないほどいろいろの事情があるのだなあと、何につけ川柳のみかたになってしまうこの頃です。

それも恋のけだるさに似て夏の風邪

小出智子

措辞が巧みですんなりと作者のおもいにひきこまれてしまいます。微熱にほてる手足と肺のあたりの息苦しさなど、そのけだるさに全身を甘やかしてしまう夏の風邪。真冬のそれほどのつらさも覚悟もなくて哀しいけだるい夏の風邪。句姿もきれいです。

約束を破る理由がおもしろい

西山幸

どの句にも女ひとりの生きるつらさを纏綿と綴られている幸さんの作品のなかで少し異質なこの句が私は好き。きっちりした理由でなくても約束を破られながらも何となく納得してしまう。おもしろいのは自分自身のこころ模様でしょう。

しまったと蛇は思っているのです

田中叶

なんでもない作品のようですが、とても通りすぎはできません。蛇は心の投影で人間の悪のほうの極として使われているようです。自分の心に掌を当ててみると蛇の正直なひとりごとも聞こえてきます。軽い言いかたなのに手応えがあるということは、私も蛇を飼っている一人なのでしょうか。

寿命から逆算をして妥協する

樫谷寿馬

残り時間をいつも正視しているから妥協もできる寿馬さんの、その非常にこだわりながらの妥協のしかたがなんとも面白くて人間らしくて戯画を見せられたようで、大笑いしてそのあと哀しくなりました。

自画自賛きついジョークだなと思う

安平次弘道

痛烈な一句です。そう思って見まわせば、きついジョークの帽子を被りたがる人のなんと多いことか。と書きながらも私自身のジョークも点検せねばとあわてさせられます。

雨の降るほうへ旅して母帰る

小島蘭幸

雨が降るという単純な現象に、母が旅してその雨の中へ帰って行くという淡々とした抒事がどれほど深い情けであるかと、川柳とはこんなに心にとどくものかと。母を帰らせる子の心情もその子を置いて旅立つ母のおもいも、この雨の句は平明な詠みかたであって、読むものをその作品の中の影像にひきこんでしまいます。

海の有る場所を男は明かさない

神平狂虎

海とはどのような流れも行き着くところ、心の奥底のいちばん深いところと解釈していいでしょうか。それなら男でなくてもと思ってみたりしましたが、女なら湖と書くでしょうから、やっぱり動かない男です。

「酒は風より淋しい言葉持っていた」にも海は見えてきます。

同じようなネクタイばかり買うてくる

都倉求芽

この心理に共感の拍手です。せっかく新しく買いかえるのにね。逃げようとしても逃げきれぬこの世のさだめと、オーバーに笑って諦めましょうか

幸せへかけたはしごの揺れること

田形美緒

はしごは願望でしょう。もともと実体のない幸せへかける梯子のゆれは止ってはくれない。それでも掛けずにはいられないほど大事な幸せだからみんな必死なのです。

結び目が外れておりる縄電車

片上明水

気に入った壺がないのでまだ死ねぬ

新家完司

縄の結び目も、気に入った壺もどちらも作者の生死観の深さだと思うと、最もさびしいところをさらっと書いてあるだけに、しみじみ心に響きます。教えられます。

川柳太平記（100）

川柳の群像

河野春三

東野大八

明治35年3月10日大阪市生れ。父河野左武郎、母欽の間の三男六女の次男（長兄、姉、妹二人は若くして死亡）四歳の折、父の郷里堺に一家を挙げ移住。大正8年堺中学卒業後大阪市の住友銀行に入社。17歳。

大正12年大阪外語英語部受験に失敗し、大阪市北浜の大日本火災㈱入社。21歳。ふとしたことから大阪日日柳壇麻生路郎選および大阪今日新聞柳壇岸本水府選に投句。これがそもそも川柳との因縁のはじまり。翌年春、水府選の特選となり、水府から春魚と柳号を貰い、番傘茶話会に入り番傘に打ち込む。

大正14年水府が勤める堺市の福助足袋㈱へ水府の世話で入社。広告文案係となる。

大正15年津山市農業塚田喜太郎の末娘加津と結婚。やがて堺の柳人らと堺川柳会を結成堺市に始めて川柳会を開く。水府・文久参加。

昭和2年（25歳）川柳に革新川柳の存在することを知る。日車、半文銭、路郎らに私淑。三要素川柳に疑問をもちはじめ、生活に根ざした人間性諷詠を新しい川柳の基盤とすることに自己開眼。番傘を脱退、本名春三に還り麻生路郎を訪い「川柳雑誌」に投句をはじめ同誌の月評会メンバーに加わる。翌年5月林田馬行のすすめで、川柳使命会同人となる。使命会は昭和4年アンソロジー「雑音に生く」を発行。使命会を解散、昭和5年馬行と塚崎松郎と三人で「川柳時代」を発刊準備中、意見合わず中止、このため川柳活動は中止す。

昭和6年福助足袋を重役と衝突して退職。自営にふみ切り新古書籍商を営む。

「私の性格が融通の利かない、世渡りに向かない人間であったので、サラリーマン生活は全然ダメ。而もそれが不思議にも封建性の強い住友銀行と福助足袋というのだから勤まるわけがなく、両者とも上役と大ゲンカしてやめてしまった。（中略）将来は文学者になるつもりで中学卒業前に、早稲田の文科に入ると申出たら父に大喝され、そんならおれが学資を作って早稲田へ入るわいと高言したが、銀行ではその学資貯金どころか、忽ち同志を糾合して文芸誌「嫩草」を出し、自ら編集発行人となって、私は主として短歌を発表したが、大阪の本屋へ出したら大変よく売れた」

「水府さんには、川柳では番傘へ入れて貰い、生活上では福助足袋へ高給で入れて貰い公私ともにお世話になったのであるが、性格も対照的で、どうしてもついていけず、水府さんに楯つく結果となり申訳なく、その後も岸本広告研究所にも招いて貰ったが、ここでもケンカ別れで半歳ともたなかった」

昭和19年（42歳）太平洋戦争下だが、堺中学時代の先輩、安西冬衛の世話で堺市役所に入り、堺市史の記録作製に当る。翌20年大阪市につづき7月堺市大空襲、老父を伴い着のみ

着のままで妻の郷里津山市に辿りつく。津山市市民課の職につくが、八月終戦の声をきいたばかりの9月17日津山市の宮川氾濫して大洪水となり春三家も軒下までつかる。同月市役所を辞め、堺市に戻り焦土一条通りに友人と「永山文庫」という古書店を経営す。翌21年父老衰のため死去。昭和21年(45歳)林田馬行らバラックへ来訪、川柳復活をすすめる。

「このバラックで「私」を発行（月刊ガリ版）したのは昭和23年で、この誌に

水栓のもるる焼野を故郷とす　春三

の句はこの単身自炊時代の句で、生活吟詠というべきか。この小屋に泥棒に二回も入られ「入っても盗るものがない、錠などかけるな」と警察でその泥棒に叱られ謝った。

父の死后　転々として落ちてゆく　路郎

この句は今も私の書斎にある短冊で、全くその通りで、父を津山で失ってから、ヤミ屋をやっても何をしても芽が出ず、転々と職を替え、転々として堕ちていった」

昭和23年5月大阪市鶴橋で古本屋を経営したが、翌年2月廃業、トヨタ出版㈱に入り、絵本、漫画の編集に当る。10月に家族を呼びよせ生活も落ちつきが出たが、昭和25年好調の「私」を解散、亀井勝次郎と二人誌「人間派」発行、短詩無性の説を発表する。

昭和26年(49歳)商用で上京、松本芳味を訪い二人で中村富二を訪う。帰途信州に立寄り石曽根民郎、小宮山雅登に会う。二月トヨタ出版退社。独力絵本の出版を企画し失敗。完全失職。関西大学新聞科在籍の長男を辞めさせ、苦難の最低生活に陥り、貴重なる蒐集した川柳本を売り米塩に換える。11月友人の世話で天六ビル管工事業米弘商会の会計となり「人間派」を同人雑誌で再編することにするが、二ヵ月で失職し「人間派」も御破算となる。

以上は「川柳ジャーナル」(昭47刊)の春三古希祝いのための「河野春三特集」号誌上における「私の履歴書」「河野春三年譜」＝いずれも春三執筆＝の要約である。波乱万丈、戦争や自然の試練をかぶりながら、人生のどん底をはいずり回った人間の腥惨なまでの人間記録がそこにある。年譜は、このあと死去するまでの三十余年がそこに書き加えられるわけであるが、紙幅が及ばないのが残念である。前記の〝私の履歴書〟に付された題名は「少数者のみち」で、その末章で春三はこう記している。

「私の川柳革新の姿勢と実践については拙著「現代川柳への理解」に一応詳説したので触れない。(略)ただいえることは、私が正真正銘の伝統川柳の実作者から出発して、戦前は自己革命による脱皮、その体験の積み重ねの上で、戦後川柳文学運動に邁進したことで近頃の若い作家のように、始めから一応の現代川柳という敷かれたレールの上での創作活動でなかった。随ってその間の啓蒙運動はまさに茨の道であったといってよいし、伝統派からは勿論、部外者からも批難の炎を蒙っただけに、何んとしてでもこの灯を消してもらいたくない。川柳の上でも実生活の上でも敗残の七十年であり常に少数者の道を選んだ悲劇（いや喜劇）のみちだった」

春三はその年譜50年のあと「天馬」(昭31)「現代川柳への理解」(昭35)「無限階段」(昭36)「馬」(昭39)「匹」(昭43)と手がけ「川柳ジャーナル」を誕生させている。「マンネリ嫌いが重って作ってはやめ、やめては作りかえした。おれは衝動買いが好きな質だ」とは筆者が貰った書信にある。昭和59年6月3日没。享年83。「定本春三川柳集」(昭57)他詩集もある。

おれのひつぎはおれがくぎうつ　春三

★次回は「佐藤冬児」

誹風柳多留廿六篇研究（二十七丁）

石田晋一・南　得二・小野真孝
本多正範・石田成佳・大屋六郎
八木敬一・鈴木　黄・多田　光
故岡田　甫

451　**女郎屋へ衣て来るハ旦那寺**

石田晋＝僧の遊廓への出入は禁止されているが、法要のために来る僧は許可された、ために堂々と衣で来る。

南＝賛。

女郎屋へ衣て上る旦那寺　一三九28

という句もあります。

多田＝賛。同僚（僧籍）の師匠筋の人が遊里の檀家へ行ったというような話をしていた。

岡田＝賛。

452　**鍬だこの手で吹殻をおどらせる**

石田晋＝ごつい百姓の手で煙草の吸殻で火をつけているのを、ナントマアという軽蔑の目で見ているという景か。

小野＝賛。軽蔑というより物珍しさではないですか。

本多＝小野氏説でしょう。

手のくぼに吹きがらをして田舎道　宝一〇満1

多田＝賛。家人が子供の頃、家に来ていた職人がこれをやっていたのを感心して見たという話をしている。百姓の手は、

馬喰町ばきり〳〵と手をたたき　三21

というほど厚い。

岡田＝諸説に尽く。

453　**古風なる男ふんとしあごで〆**

石田晋＝諺「褌を締めてかかる」を踏まえているのだろうが、それ以上がはっきりしない。

南＝六尺褌をしめる場合、褌の端をあごでとめてしめます。こうした六尺褌がすたれて、紐付の越中褌を〆るのが一般となり、六尺褌が古風であるというのでしょう

多田＝賛。

岡田＝南氏の通り。小生も子供の頃海水浴の折アゴでしめた。六尺の普通のしめ方です。

越中の起源は秀吉の朝鮮征伐の頃からと記憶しています。六尺フンドシだとしばった部分がゴロゴロし、鎧を着るとどうもうまくない。それで何とか越中守が考案し、家臣に越中フンドシを用いさせた。これが一般に流行したのだと、二年ほど前のさる週刊誌に「岡田甫氏説」として載っている。呵々。

454 **内になひ物てハなしと女房いゝ**

石田晋＝遊女のと同じものが家にあるのに、何でわざわざ金を出してまで、もったいないという女心である。

本多＝賛。

内でしたたかしながらと女房いい　一九ス12

鈴木＝賛。「モノ」は同じだが質が違う。

多田＝いうことなし。

岡田＝モノもちがうが技巧もちがう。

455 **脈を見る鼎なんとか言ハいゝ**

石田晋＝『徒然草』第五十三段、仁和寺の鼎法師の話。

容体を問へば鼎は首をふり　明八桜5

と話せないとの想像句もあるが、脈を見られる鼎法師はどうにか話したのかも知れないという意。

南＝「医師のもとにさし入りて、向ひゐたりけんありさま、さこそ異様なりけめ。物を言ふも、くぐもり声に響きて聞えず……」で、何か言うことは言っているが、唯声の響きだけで、言葉にならないとのこと。

ようだいをいえばかなへのうなづいて　拾五1

多田＝賛。**岡田**＝同。

456 **御意に入ルはづ奥様も柳こし**

石田晋＝普通はお姜のもとに通うはずの殿様が奥様のもとにばかり通う。なるほど、奥様もすばらしく美しいからだ、という一般句の解でよいのではないだろうか。

多田＝奥様の腰は臼という方が多いのに珍しいというところである。

奥様をほっそりとした尻に敷き　明八鶴1

お姜のやうにや奥様もちやがらず　二八11

岡田＝賛。

457 **出合茶屋勿論すきやかゝりも**

石田晋＝数寄屋は茶室風のつくりの意。出合茶屋はもちろん一間で茶室と同じように雪隠などはついていないの意か。

南＝雪隠はあまり関係ないと思います。「勿論すきやかかり」は、勿論好きの意を通わせた数寄屋掛りと思いますが。

小野＝同右。すきもの同士がよってかかる場所だからそれをもじったものでしょう。

多田＝同。

岡田＝数寄屋造りに好きやをふくませてある。

458 **銘のある石親分の門に置**

石田晋＝『川柳風俗志』に「親分などの門前には力石とて持ち上げて力量を試す石を置いてあった」と記し、本句も挙げている。

親分の門にめかたの知れた石　五〇3

多田＝賛。**岡田**＝同。

459 **初の字ハ七十五声ほどのうち**

石田晋＝「初物は七十五日の利かせ」。初物を食うと、七十五日生きのびられるということだが、ここでは単に「初と七十五」を結びつけたもの。

突出しハ七十五日客が来る　二20

新ィ枕七十五日はづかしい　一九28

解は時鳥の初音は七十五声程の内だけというような意。

鈴木＝『学者気質』には、「初物を食へば七十五日生きのばはると申すが、それでは世界中に死ぬる者が一人もござらぬ」ともあります。

多田＝賛。「七十五」は初物の代名詞になっているようだ。

岡田＝賛。

五煙抄

黒川紫香選

佐賀県　寺中三枝子

荷くずれを積みかえ家裁から帰る
木洩れ陽へキラキラキラと蝶の恋
ブーメランエデンの園へ行ったまま
愛の語録打つワープロが冷えてくる
スパイスの効いた助言に救われる

八尾市　高杉千歩

メルヘンのくにへ残した魔女の杖
指話の子の若さとび交う昼電車
雑魚同士お手々つないで祭笛
捨てきれぬ反古にまみれておんなの詩
塩分を控え気弱な老いの箸

今治市　野村京子

八月の海へ人魚の物思い
火のついた恋で迂回は出来ません
タンポポが山の向こうを見たい旅
背信につば広帽子選る女
ちぎり絵で蝶の化身が抜けられず

熊本市　永田俊子

干し蛸の悲しい踊りに目をそらす
深入りをしない相槌打っておく
絶壁が見えぬから幸せかも知れず
あじさいの奥に女がかくす嘘
思い違いを真赤なバラに自嘲する

尼崎市　福田礼子

まっすぐに見たいものあり瞳を洗う
常連になって自分の席がある
気どらない町で大きく息をする
口下手な二人を照らす揚花火
満天の星と帰りは道づれに

藤井寺市　赤木和子

人口増え過ぎて地球も重かろう
太刀打ちはできぬが足は引っ張れる
水も情けも川下へ流れゆく
せつなさはこころ濡らしてゆく小雨
気は持ちようで青い星赤い星

待つうちに切れてしまった赤電話　寝屋川市　太田藍子

嘘ついたばかりにも一つ嘘をつく
勝負師のつもりで今日も穴狙い
一人だけ内輪ではないつまらなさ
お目当てはないこともない廻り道　倉敷市　田辺灸六

金のことになると渦巻く欲の海
一円玉の僕には誰も振り向かぬ
生真面目でユーモアのない篭の鳥
好きだから中途半端にせぬお世話　久留米市　鶴久百万両

終戦の玉音しかと耳朶にある
獅子吼えの男は背なに隙を見せ
夾竹桃咲くと墓参が近くなる
ヒーローを生んで連覇へ意気あがる
十字架の飛礫が怖い日の不倫　長岡京市　木本如洲

結論に迷い階段踏みはずす
深呼吸してから三の矢を放つ
子にのこす絵が余生の部屋にある
仕事場を出ると優しい父である
説得へ舌がもつれて酌ぎこぼす　西宮市　紀市郁栄

タクシーの恐い運転手に出会う
いつかは妻に渡す保険をかけつづけ
クーラーかける仏にことわり言うて
昨日には触れず眩しい下着干す
友の訃へ道連れになる雨もよい　富山市　舟渡杏花

男の胸へ棲んで男を迷わせる
転がされてばかりダルマの死んだ振り
うそ包む絹の風呂敷別に持ち
端した金金庫へ包んで入れる癖
ゴキブリを追う妻の目こわく見る　尼崎市　田中晴子

お祝いを出して口数多くなる
移り香をためらいながら干す布団
盂蘭盆は短いものよまたひとり
消しゴムを丸く使って失語症
ほどほどの知恵を教える猿回し　熊本市　宇野昭代

母に会うただそれだけの里帰り
帰省子の東京べんがちとまぶし
夕焼小焼母子の長いながーい影
内定へどうやらコネが物を言い
アナウンスきれいな声で無表情　熊本県　大川幸子

うまい事表現出来ぬが誠意持つ
花は散る遅咲きだってきっと散る
バラの葉の下を根城にカエル啼く
花火消えひときわ淋し夜がせまる

濁流のこわさを語る川やなぎ　高槻市　笠嶋恵美子

見送りの列がと切れて風さむし
造花にも欲しい可憐な花ことば
蟻の列右へ右へと歩かされ
八起き目の藁だ離してなるものか
満天の星に恋して眠られぬ　高槻市　河瀬芳子

胸に棲む女へ鍵をかけて逢う
缶蹴りのうまい貴男に逢いました
福耳の夫に私を賭けたのに
ゴミ箱のような胃袋持ってはる
魚屋で四万十の蟹買うて飼う　名古屋市　藤井高子

泡立ててシャボン老醜消せるなら
パソコンに明日の老いを聞いてみる
照準がずれて母さん撃たれてる
さしさわりない語に渦を逃がれ出る
あやしげな儲け話が風に飛ぶ　岡山県　山本玉恵

雨の音に紛らし母の長電話
愛情の深さだけ不安も深うなり
誇り持てば身にくやしさも知る涙
待ち合す直射日光うけながら
トゲ一つかくした素顔見失う　岡山県　黒住美穂子

花びらもわたしもさだめの風に揺れ
野の花を束ねて心定まりぬ
ふる里の余生の歩幅にあるゆとり
肥りたいやせたい夫婦馬が合い
哀しい日心の乱れ知る文鳥　岡山県　矢内寿恵子

女紋今日からひとりの悲をたたむ
百の業百の懺悔や百叩き
歳月の流れに失うことばかり
祖母ちゃんのラッパ届かぬ双生児
雲低う垂れる背伸びをしてみたし　和歌山市　桜井千秀

解放感求めて血縁遠くする
体験談私をみじめにするばかり
掘った穴埋める土のない恐さ
図書館に馴染みが揃う秋日和
包丁の切れ味はずむ秋野菜　吹田市　井上照子

種無しのぶどうのルーツ考える
社長室重荷を詰める黒カバン
からくりを知らず人形ものを言う
身におぼえあって相談すぐに乗る
路傍の石ふとかえりみる長い坂　尼崎市　森安夢之助

迷うたからこんな処へ来てしまった
知ってる癖なにも言わない影法師

金持が貧乏ゆすりをする平和
昼めしを三バイ喰って飛んで行った
みの虫も事情があってぶらさがる

京都市　木村たけし

よい記憶悪い記憶の地図がある
通天閣路地を曲れば目刺焼く
折鶴を千枚折ってから叛く
この街の屋根を憶えていた燕
梅雨の蝶藪の高さに不満もつ

堺市　桜沢あか里

ところてん梅雨の晴れ間の彩となる
定刻のバスを待つ間の顔馴染み
字足らずを埋めるやさしい送りがな
年金のくらし亡夫が生きつづけ

尼崎市　丹下玉子

喪の家に夏蝶舞うてなぐさめる
機嫌よい亡嫁の姿が胸に棲む
百ヵ日涙も涸れて焼香す
星屑が海に沈んで貝と戯れる

尼崎市　山田保蔵

北の島悲しい戦友の墓がある
スーパーでメモを拡げるおとうさん
市場カゴロースも入れる給料日
説明もせずに虫歯削りだす

大阪市　上田柳影

誘われぬ訳を鏡に問うて見る
ベテランが一番先に出社する
新鮮な茄子を供える一と七日
何に不足ないのに神経性胃炎

羽曳野市　吉川寿美

人生模索出口ないまま黄昏る
有為転変今日も無策の靴をはく
思い上りの風でとばした夏帽子
折づるに一夜千夜の願いごと

竹原市　信本博子

薬品と尿の匂に浮く命
夢二の絵蛍飛ばしてみたくなり
器具六つ付けて命の灯はともり
白いベッド百枚目の紙オムツ

鳥取県　田村きみ子

小石ころころ裸足の俺をわらってる
OLの笑顔に弱い男たち
ストレスが溜ると砂丘まで出かけ
ファッションの秋です街へ出てみよう

大阪市　堀いくの

しあわせと思う雑踏の中に居て
雨の音ぽつんと一人で聞いている
転任地どの辺かしら地図を読み
訪う人もなくて昼寝が長くなり

東予市　小山悠泉

トーストがはねて出勤せかされる
生き残る笑顔もみ手も小商い

火の紛かぶる覚悟は出来ている辞表
産地直売主婦の心が揺さぶられ　高松市　竹川憲一

瓢箪の個性お尻を天に向け
石段の数を忘れた罐ジュース
カラオケに行く日の妻は行き届き
幼稚園の列から孫のVサイン　高槻市　川島諷云児

ライバルの後手に廻って臍を噛む
なんとなく男が寄れば飲む話
反応が怖くて意見口籠る
風渡る十勝平野は視野無限（北海道日高にて）　熊本県　高野宵草

赤札にもうなるだろう夏がゆく
最低の顔に撮れてる免許証
樟脳の香を着た老母の歩に合わす
パーティーの夢もふくらむ泡立て器　京都市　松川芳子

梅雨晴間団地の布団無遠慮に
皿を割る音にはさとい女の耳
強がりは口先だけの老いの意地
ライバルの笑顔に負けている闘志　大津市　安田志津

来る筈のない人を恋う星月夜
欠席へ満場一致の役が来る
ベランダで小さく咲いた花が散る

雑巾に妬心縫いこむ雨の午後　兵庫県　脇田米朝

温室の苺で嘘によく染まり
虫も殺さぬ顔でユーモアたっぷりで
笑顔よしのママと熱燗酌んでいる
若返りしてはる腰が曲り掛け　竹原市　石原淑子

ゲジゲジの眉も個性派美人です
鈴成りのキウイを間引く勇気要り
照りつける日射しの好きな少年で
単身赴任家族旅行で埋め合わす　唐津市　浜本ちよ

ねぎ坊主堂に入ったる貌でいる
経を読む僧の姿は堂に入り
英才の児は二葉より枠に入れ
鷹揚で夫の浮気も知らぬ幸　熊本市　黒田緑

手に馴染む櫛に頭も馴らされる
定年の歳を過ぎても小商人
逃げ水に乗って幸せまたはなれ
世の隅に小さな我を見つけたり　守口市　森川まさお

小心な蛙威張って空見上げ
包帯をしてる男がよくしゃべり
ゴキブリを殺し興奮する男
ビヤガーデン飲めない奴は星を見る

川柳に憑かれて梅雨も気にならぬ　静岡市　渥美弧舟
梅雨晴れ間孫とショパンの曲を弾く
ああ師の訃涙こぼれて立ちつくす
渋滞の空夕焼けて富士眩し

へそくりを手提金庫へ閉じ込める　静岡市　永倉僕川
贅沢な猫だと自慢そうに言う
自分史へたまには嘘も書いて置き
意地張り兎角世間が住みにくい

バランスをとった家計の膳につく　西宮市　松本一郎
生きいきと実年朝の靴を履く
ライバルに趣味が同じの妻がいる
もの忘れすすみ世間をまるく生き

わらび餅さげて日影を小走りに　守口市　結城君子
長雨に保険約款読みなおす
水ぎわで廻れ右をするおんな
雷が嫌いな犬と仲がよい

待ちぼうけ雨までしとしと降ってきた　松江市　吉田笑子
雨続き洗濯物の下で寝る
待つことに馴れた女の影ぼうし
来る来ない来ると信じて花ひらく

両手に掬う水が自由にこぼれ落ち　尼崎市　鈴木良征
欲求不満の顔が洗面器にうつる
赤によし青にもよしと奈良の宿
総理の毛針にかかって悔いを残す鮎

酔わすだけ酔わして本音聞く積り　熊本市　北川一進
言訳は持病のせいにする安堵
ポーズ撮る孫も一人前の顔
背を向けた女へ未練たちきれず

夜なべして祭り浴衣を間に合わせ　青森県　荒田つる
無理の利く若さ深夜の稼ぎだか
晩年を思うゆとりのない暮らし
いささかの事をうわさに村すずめ

こげつきの鍋をみがいたシンデレラ　出雲市　河原恵美子
雨女雨がさ忘れウツギ咲く
朝モヤに少しきどった森の精
清らかな心のままで受けとめる

花言葉知らず花束誤解され　新発田市　上鈴木春枝
病む友の細い手指は見ずにおく
常連となった本屋で余生いま
電話器に見抜かれていた嘘ひとつ

暗い夜母さんの唄思い出す
老眼をもつれた糸にからかわれ
あれやこれ作り畠とお友達
充実の中で仏の顔になる

鳥取県　西川和子

軽口にポトリ本音がころげ落ち
瓜漬けの出来る女房にやっとなり
もう来ない人を待ってる曲り角
何事もなかったような青い空

岡山市　中嶋千恵子

半ソデを寒がらせてる食品部
夫に似た人で三度も振り返り
通知表双生児それぞれに誉めてやり
幸福な雨は小芋の葉の中へ

竹原市　岩本笑子

クリームを舐めれば子等と合う歩調
啼く頃と待てば蛙のみがまえる
夢の様に霧に浮んだ観覧車
雷雨のあと梅雨正直にあがりそう

吹田市　栗谷春子

ポケットにテレホンカードがチャンス待つ
バラ園の散歩は少うし濡れたまま
トイレにもやさしい花が語りかけ
露天風呂名残りの月は山の端に（黒部峡にて）

貝塚市　池田寿美子

一夜漬け音で食べてる塩加減
身に余る余生ためらう花鋏
七十になって嬉しい文が来る
王様へしがみついてる泣きぼくろ

徳島県　宮武まつ女

野仏に聞くとトンボが首傾げ
氷にラムネが寝ている村祭
禅道場で逢うてから迷い出し
バス停でまだかまだかの首がのび

尼崎市　吉永伊三郎

サングラスいろいろ変えている不調
使用法くどくど読んで使えない
炎天の蟻は帽子を持ってない
母ちゃんは留守父ちゃんは昼寝です

愛媛県　八塚三五島

祈る手が十で足りない数え唄
言い切った悔いをしずめる夜が永い
嘘が嘘生んで転がる負けいくさ
振り向くとそこに小さな花が咲き

兵庫県　東浦砥代

お隣が急に挨拶してくれぬ
満天の星に見られて露天風呂
中年の団体派手にいるロビー
直線を歩いた父の佗び住居

豊中市　小畑よし子

手際良く料理する娘の左利き　静岡市　澤田きん

父の日へ無心に洗う里の墓

手造りの篭に亡夫の好きな百合　米子市　小村てい子

苛立ちのふえる祈りにまた一里

露草のつゆのなさけを真に受けて

火を点けてみたいと思う流れ雲　堺市　宮本かりん

しゃべらない婿が頼もし夕餉時

一泊に話の花が咲く姉妹

ユニークな百合が咲き出す私の画　米子市　足立由美子

血圧が上がらぬ程度がんばろう

どしゃぶりに負けまいピアノ強く弾く

ターゲット決めた背中にある自信　広島県　田村新造

彼岸花いずれは入る墓洗う

本陣と呼ばれた宿で古めかし

かち割りの氷も解けて熱戦譜　尼崎市　的場十四郎

風鈴が涼しさのせる夏の窓

水玉を着こなす女が好きになり

海鳴りを旅の窓辺で聞いている　西宮市　秋元てる

雨の日も心の窓は明けておく

或る日ふと過去を消したい面を買う

冷奴故郷の水を恋しがり　鳥取県　土橋はるお

勝つ方に二枚の舌が行きたがる

学歴はないが炎天下には強い

上り口で押し問答に負けている　大阪市　亀井円女

ぬるま湯が好きで首までつかってる

呵々大笑の嫁さん我家の宝物

おいしいことを芯から言うてくれる嫁　寝屋川市　井上すみれ

古ぼけた鏡私を見つめてる

ヘルメットまぶしく新車恋も乗せ

源氏物語読み終えた午後のけだるさ　堺市　山本半銭

ペン習字やめてワープロ入門書

締め切りのないます目追う母のペン

ハンサムな候補に握手求められ　唐津市　浜本治幸

空缶も流れに沿うて川下る

浮動票タレント候補食い散らす

酒タバコ飲まぬ男で嫌われる　鳥取県　福田あや子

神様の内緒話を聞いた湖

断った後で悔いてるいい話
雨傘をずらせて終るラブシーン
寝屋川市　宮崎菜月

歳月を教えてくれるほたる道
母の齢まで生きたいと母が言う
ハマゴウの綱引き見てる夏トンボ
八尾市　松下蕉露

処方箋錠剤出すに薬剤師
間違えて掛けた電話に澄んだ声
ナイスショット掛声にある下心
泉南市　坂根流水

湯上りの夜のお星はまた奇麗
涼み台出して明治と笑われる
比例制じたばたしても下位ランク
広島市　流奈美子

咲きほこるバラを見詰めて失語症
頬紅のいらぬ若さがよく笑い
ワープロのように庇をたたく雨
唐津市　相葉あき

人の目にふれよと隅の花が咲き
ほんのりと輝き見せて喜寿に居る
筋書の余白に紅い花をさし
十和田市　阿部進

生活がこの頃派手で勘ぐられ
祝い酒支持者でないが飲んでいる
当てつけに隣の嫁をほめている
八尾市　椎尾公子

フライパン腕におぼえのオムライス
一城の城主になりて日々多忙
欠席の返事を出している孤独
島根県　森山英子

母さんのパートで塾へ行かせられ
サボテンと思えぬ程の花が咲き
つばめ来て二人の話に幅ができ
旭川市　朝倉大柏

忘れたい過去ばかり積む白い雲
元の字をつけてまで名刺持ち歩き
甘言にたやすく開くチューリップ
和歌山県　森三枝子

円高はどうあれ子供食べ盛り
パパ用の小型テレビが淋しそう
折りたたみ傘で色気のない別れ
鳥取県　津村八重子

祭笛生きてるような獅子に逢う
失意の日ただあてもなし人を待つ
只今とご苦労さんで馬が合い
鳥取県　太田幸枝

母の日の花はリボンに抱かれてる
有頂天のオンナ図星のわなを敷く
月光へスダレを上げて一人酔い

合格でやっと消えます肩の凝り　尼崎市　尾宮弘治

消しゴムが悪くて消えぬ子の漫画

裁縫の代りに英語の出来る嫁　大洲市　横田放人

安いから好きと豆腐で飲みはじめ

廃校を真赤に染めて夕焼ける

課長にも苦手があったかずら橋　出雲市　小玉満江

旅五日女は毎日服を替え

あぶら照り水子地蔵に缶ジュース

ひっそりとゲートボールの恋進む　大阪市　島路太郎

化粧した顔をハワイで焼いてくる

湯の町の乳色に夜の明けてくる

打明ける恋はやっぱり標準語　広島市　望月はるひこ

市役所の栞は納税カレンダー

連れ添うて癖をのみ込むパン焼器

堂々と来てスパイするいやらしさ　高石市　宮田純一

北斗七星の下の大ジョッキ

生ビール鹿児島弁が飲んでいる

生ビールもう二軒目を決めている　和歌山県　田中隆積

阪神地区を唱う

園田駅近くでギターを持つ雀

六甲で三重出の友とケーキ喰い

館長の英語に泣いた立聖館　弘前市　真喜内實

老夫婦だけが残った里帰り

ネクタイが下駄履きで来るいい仲間

うぐいすに慰められる旅疲れ　堺市　矢倉五月

ボーナスを待っていたよに雨が漏り

早咲きも遅咲きもある三姉妹

にわか雨夫婦げんかを中断し　岡山県　後安ふさえ

帰る孤児心に祖国だきしめて

喜寿の宴孫がずらりと十七人

玄関の花も萎れて妻も病み　高槻市　津田スミ子

死神に居留守を使って母達者

まんが本読んで気分をかえてみる

土用は鰻いらぬと夫念を押し　青森県　福士トキ

方言が物怖じさせる旅の空

天井がわたしの愚痴を聞いてくれ

梅雨晴の太陽の顔こわれそう　鳥取市　若林一止

句読点代りの鐘で経を読み
産声を聞いて廊下で父となる
犬も食わぬ喧嘩にパトカーまでも来る
大阪市　川原章久

花道も引幕もなく肩叩き
三婆が揃う我が家の姦しさ
医者変えてチョッピリ飲める酒煙草
岡山県　池田半仙

婦人会観光バスで缶ビール
旅なればこそ久しぶり桑いちご
幼な名で呼ぶ友と逢う里の駅
尼崎市　小熊江美

駅前でマイクが神を説いている
月蝕を見てて宇宙の夢の中
ポストから町内会が変ります
高槻市　芦田静江

嫁が来て線の太さに救われる
ダイバーの海の青さに血の赤さ
束の間の蛙戸惑う朝ぐもり
尼崎市　佐藤美代子

給食で箸もつことも教えられ
素敵なネクタイにあらぬ返事する
サバサバと離婚を語る人ふしぎ
青森県　波　ただお

魚魚(じょじょ)祭りじょじょも海中で躍り出し
地平線に留めておきたい夕陽哉
捨て切れぬ古びた本が棚の上
静岡市　青柳金吾

ふと思うおこげの御飯を食べたいと
甘いのも辛いのも好き唄は下手
受話器はバーのマダムで狼狽える
大阪市　横山為子

着せ替えのマネキン裸で立っている
大股も小股もゴール歩く会
欲に目がくらみ観音まぶし過ぎ
岡山県　千原理恵

師を偲ぶ句会に白百合楚々とゆれ
父母と暮して見たい月世界
心ならずも楢山行きを考える
尼崎市　木下義嗣

帰る道ポストの前で酔いがさめ
見合席喋らぬ二人汗をふき
菖蒲池花を咲かせる清い水
今治市　月原つくし

寄り添うて主張は曲げぬカスミ草
謎一つ残し友情遠ざかる
王手王手善人持駒続かない
鳥取県　久野野草

専農で生きて夜明けの風に合い
高らかなラッパで進み義手で生き

しくじりをお茶でにごして座を丸め　今治市　渡邊伊津志

湯殿まで這い這いで来る子に困り
息をしただけで自動ドア開き
組織には染まり切れない大きな子　大阪市　工藤陽子

梅宮で子授け願うまたげ石
家のぐち散歩しながら持ってくる
外出の嫌いな母が行く選挙　岡山県　福原悦子

白岩先生句碑（二句）

御先祖の大樹も映える句碑除幕
師の温み句碑をめぐりて百合かおり
虹を見るいつか妥協の夢を持つ　豊中市　一瀬福一

泥舟に乗せたい奴が立候補
家裁までけんかの種をもってゆく
飾る程不似合の妻が出来あがる　八尾市　鷲見章

選挙戦湖畔の町に来た総理
故郷に螢が消えたニュータウン
夏みかんサイパンの没兵の墓　山口県　高崎雀声

豪邸の裏川汚れよくよどみ
吊皮で隣のあくびもらいうけ
遮断機がおりて忘れ物思い出し　藤井寺市　菊地繁男

身のほどを知っているから出しゃばらぬ
俄雨好意の傘を悔やまれる
あれほどに泣いたと思えぬ朝の顔　大阪市　井上白峰

定退で意地を捨てたが欲捨てず
吾が金で買って気兼ねの酒煙草
塾へ行く子は学校で息を抜く　益田市　里本たかし

いさこうた妻がすすめる散歩に出
運転席に坐りセールス靴を脱ぐ
病院には行かず癌の噂を聞く　長岡京市　山田葉子

赤ちょうちんなつかしい人を引き合わせ
同じ目の高さで競い合う親子
鴨川もさかまき濁り梅雨明ける　京都市　小林英子

ねぐらなき老犬かばう温い町
ツインビル雲の帽子と洒落た梅雨
稀少価値大正びとはロマン好き　唐津市　筒井朴竜

日本語の乱れはラジオから流れ
低俗な歌謡が邦語汚してる
早苗田の猛威はジャンボ田螺（たにし）どん

アメリカへ行った娘を偲び（二句）

風船になって飛びたい娘の空へ　大阪市　吐田純子

また会える夢を託して娘と別れ

海越えて届いたフルーツ娘の匂い　島根県　菅田かつ子

娘入院（二句）

病院のスリッパ外が見たかろう

また昏れるベッドに伏した娘のそばで

面接に父のセビロを借りて行く　岡山県　江口有一郎

倖せを思う仕事の一区ぎり

実現は遠いが夢のあるくらし

仏前の愚痴は祖先も喜ばず　米子市　木村富美子

花が終ると蝶の墓場が忙しい

張りかえて明るい部屋のあるゆとり

朝の日を一人じめする明けがらす　高槻市　笠松高子

うっかりと喋らされてる聞き上手

四季の花咲かせふたりで居る安堵

日曜日お金の話はよしましょう　新潟県　高野不二

欲出した再就職で狂って来

年金で猫の餌買うのが日課

誕生日電話をかけて喜ばせ　茨木市　井上盛雄

言い切れば背筋もしゃんとする一句

枝豆とビールは夏の風物詩

一日の疲れ湯舟で泳がせる　豊中市　辻川慶子

沙羅の花苔のみどりに落花する

横道へ歩けば強い風あたり

仕来たりをちゃんと心得蟻の列　藤井寺市　福元みのる

野球ファン金の卵がひきつける

お互いに女目と目で年はかる

孝行を中国孤児に教えられ　米子市　大田みさと

上り目が下り目よりも威張ってる

湯上りの老妻ちょっぴり女です

うた声が枯れて旅路も終り告げ　大阪市　桝本露児

魚屋も株式会社社長なり

観光地本家元祖に総本家

こげ飯の味が恋しい炊飯器　岡山県　後安江山

丸い鼻丸いお顔で可愛い女房

表彰状紙の重さがしみる夜

押花に遠き日還る日記帳

下積みは下積みなりの誇り持つ　鳥取県　乾　喜与志

懇親会みな一城のあるじだな

青すだれ風鈴の音に眠くなり　京都市　森川春子

走馬燈お伽話は美しい

豆御飯好きでおかずに手をつけず　茨木市　堀良江

最初から尻尾見せてる人の好さ

頭越し山鉾の先見て帰る　和歌山市　森敏子

義理堅い人の返書がとどかない

太陽へクレーンきらきら伸びていく　大阪市　今西静子

はみ出して子がぬれているママの傘

盆踊り気甲斐もなく輪に入る　岡山県　松本元江

肩組んで語り合いたい星月夜

影法師追えば出て来る亡夫の影　吹田市　西岡豊

酒ついで恋のチャレンジする鼓動

囁きがカラオケの音に弾かれる　兵庫県　北川とみ子

ちょっぴりと辛味もきかす姑の声

絵解きするゲームに孫の知恵を借る

リハビリへまいまい虫の小さな輪　鳥取県　乾隆風

さりげなく子供は夏の絵をめくる　岡山県　牧野秀香

過疎の駅誰が来るのか宵待草

白百合に似通う女の白い足袋　桜井市　前山美恵子

幸せの続きが見たいメロドラマ

友達をさがして歩く色めがね　兵庫県　奥野テル

花束を浮かして哀し揺れる海

美しい嘘を見舞の花に添え　兵庫県　森脇和子

戸じまりをふと思い出す曲り角

さわやかな風が運んで来た噂　西宮市　飯森泰世

学校の隣に枇杷が鈴なりで

南瓜を炊いて下さる人がある　堺市　小西小雪

カラフルな服が行き交う港街

ロケットのように聳えるツインビル　岡山県　富坂志重

プクプクと金魚の愚痴が浮いている

次々に不足並べる立話　唐津市　上田花代

八月の広島に寒い夏が来る
ボーナス記事斜めに読んでサンマ焼く
田辺市　染道佳明

花の水替えて今朝が動き出す
燃えつきてみたい男に妻子ある
静岡市　安本孝平

老夫婦頼るは金と神仏
手を打てば鳩と女中が寄って来る
愛媛県　石手武

飴舐めて残りの仕事片付ける
しあわせな演技をしとく里帰り
唐津市　入江喜久夫

鏡台を拭ってみても皺は皺
あの店は五円高いとよりつかず
和歌山県　北山凡太

湯加減をせずに這入れる二番風呂
あと一本吸えば禁煙する積り
島根県　喜島ノブ

孫連れて嫁が持参のかしわ餅
幸せを願って今朝も熱いお茶
弘前市　斎藤劦

金魚草の傍に金魚を埋めて来た
宿帳に弘前と書き親しまれ
岡山県　伏見すみれ

農一筋真直歩いた父の道
頬にあるホクロでうけたトバッチリ
出雲市　竹治ちかし

健康の幸を見舞いに行って知り
世が世ならと気休めを言う友が居る
大阪市　冨岡温子

沿道へカルガモ一家笑誘う
泣いた顔みせぬてらいの歌がある
愛媛県　西山えつ美

テトラポット無造作そうに置いてみえ
お化粧をきらった娘へも紅をさす
大阪市　渡部トキワ

お年でも踊る姿の愛らしさ
税額に溜息の出る封筒が
寝屋川市　立床晴風

安堵とは私に背く影を見ず
曲尺の狂いが起きた出来損ね
西宮市　上嶋ふさ子

風紋に足あと残し旅終る
ダイエット気にしながらもちょっと手が
大阪市　神保千鶴男

酒好きの亡父の墓前に酒そそぐ
孫にひかれてアニメ見に行く
島根県　園山世似

鯛が付きやっと気づいた誕生日
丹精の豆がご飯の中で待ち

妻と逢う心斎橋で虹を見る　羽曳野市　麻野幽玄

カラオケのマイク一人でなら歌え　堺市　江辺天鳳

桃色に染めた指先すき透り
高灯籠港になくて町に立つ（住吉の高灯籠）　川西市　田中喜俊

横着な父は何でも母にさせ
菜園の真赤なトマト明日誰に　米子市　門脇晶子

日本の悪魔となったきのこ雲
雲海に目かくしされたお日さまだ　富田林市　大澤三四子

心にもないこと首相言っている
肩書きが消えてしまえばただの人　唐津市　山口高明

祖母の背に隠れて土産だけは取り
短か夜を泣いて独りの子守歌　河内長野市　植村喜代

一人っ子嫁ぐ先まで一人っ子
もう破裂しそうに百合蕾む　泉佐野市　大工静子

紫でアカパンサスというお花
清潔な病院に蟻二匹　岡山県　戸田種子

天気図を見てから夫婦旅仕度
孫笑顔祖母も笑顔で丸く生き　兵庫県　円増貞子

わざと足よろけあなたに寄りかかり
疑問なぞ持たぬ働き蜂の夫である　今治市　山田宝保

遠雷は光った後を耳で待ち
添えた手へ癖が逆らう書道塾　吹田市　山田里子

ごきげんさん遠い電話は秋田弁
痛くない歯まで抜くというカルテ　唐津市　福島紀一

紫陽花はやっぱり梅雨の風物詩
旺盛な孫の食欲目を細め　泉佐野市　真崎浪速子

お任せをします返事の無責任
負うた子に教えられつつ来る夜店　出雲市　小白金房子

年金で贈る孫の三輪車
長雨に野菜より分け出荷する　河内長野市　大西文次

気楽そうに見えて気楽でない余生
たこ焼の店今日からはかき氷　愛媛県　藤原無想

才女かしまし男黙って語らない

酔うているろれつは本音みんな吐き　橿原市　西本保夫

ただ生きるそれがめでたい事にされ
辻つまがどうしても合わぬ待ちぼうけ　倉吉市　田中八太朗

合槌が先に来るから話し止め
市長より暑中見舞見もしない　高知市　北川竹萌

朝疾くに犬のお皿へ来る雀
梅雨末期晴れず湿りの部屋に厭き　鳴門市　八木芳水

待つ人が居るご馳走を考える
水加減ただ計量器頼る僕　八戸市　島田昭治

忙しい蟻の動きに似てた僕
誠実が頭の悪さをカバーする　大阪市　堀口欣一

ふるさとで北前船を待つこころ
人生は長いと思う夜行バス　呉市　岡田寿美礼

大和より息子のはずむ声うれし
何もかも気楽がご馳走親子です　岡山県　杉本伊久栄

妻子ある人とは知らず好意よせ
何の政見聞いてもなるほど票迷い　奈良県　和田萬里

庭の草引きたいけれどいとおしく
早朝に木魚のひびき夢破る　静岡市　丹羽定次

紅一点口の軽いこと酔っている
受付で待つ間が長い大病院　米子市　宮本佳女男

犬連れの女房の散歩にみる平和
飽食に蝕まれてく長寿国　呉市　蔵重成人

大器晩成信じぬ妻となりはてる
好きという言葉を波に奪われる　島根県　小田川智重子

バーベキューやはり炭火で食べるもの
角度かえ眺めてください床のつぼ　和歌山県　山田久子

静かな夜銚子二本のさし向い
丁重に断られたので持ち帰り　島根県　岩田三和

児が泣いているらし乳房うずき出す
にわとりと寝起き一緒に元気な子　大阪市　宮下とし

それぞれが福祉唱えて票を得る
若夫婦かわるがわるに小猫抱く　岡山県　平田たけよ

朝顔に話しかけてるジョロの水
老いの夢育ててくれる孫三人　八尾市　向井しづ子

割ばしが出ればなめくじ影ひそめ
同日選挙はよいけど票迷う　大阪市　平井露芳

土下座までして先生と呼ばれたい
ゴキブリの秘密兵器は飛んで見せ　和歌山市　三谷周三

原発の破壊で夏の暑さ開く
薄物で五体の透ける夏楽し　新宮市　船越正

ネコイヌも歯から弱って来る時代
世界地図新聞大でもレンズ要り　大阪市　喜多佐津乃

夜の蜘蛛そっと戸外に出してやる
医者の手借りて揃うた歯が並ぶ　大阪市　高森文子

趣向変えあの手この手のボーナス期
あじさいの向うで真夏覗き見し　大阪市　朝田晃世

雲海を通り抜けるとお釜みえ（蔵王）
十和田湖は数々歴史青にする　大阪市　松岡久留美

笹の葉に水玉ころぶ雨上り　豊中市　額田明吉

干した傘鞄に戻す梅雨の朝
土用丑祭囃子と鰻のあじ　熊本県　立道善太郎

お土産は買わぬと決めてフルムーン
向日葵が戸惑うている曇り空　広島市　花田繁子

選挙戦盆と祭が一度に来
酔った人ハイハイハイとあしらわれ　大阪市　野村八重

会釈され四五軒行って思い出し
父の汗にじむ柱の此の住居　奈良県　山村有佳

病上り梅雨の合間の投票所
一度しかささぬ形見の日和傘

◆ジュニアの部

目覚ましは小鳥の声と母の声　いわき市　新井朋子（中一）

きりの中幻想の中鳥が舞う　いわき市　新井晶子（小三）

たんざくにわたしのねがいぜんぶかく
おかあさんあいものいってかえらない

61年度

路郎賞
川柳塔賞

候補作品中間発表

自 61年5月号
至 61年8月号

路郎賞候補作品

野村太茂津

終着駅　雪は私にばかり降る　岩本雀踊子
弔いの鉦を迂闊に七拍子　土居　耕花
こんにゃくの馬鹿正直は生れつき　谷垣　史好
揺れたくて枝は優しい風を待つ　松原　寿子
その昔むかしに嫉妬して女　堀江　芳子
他人の地図ばかり歩いている疲れ　石川侃流洞
鍵のない箱の仕掛けに気がつかぬ　坂口　公子
不用意な言葉を捨てる水たまり　後藤　正子
騙されに行くのに妻の目を盗む　久保　正敏
霊柩車きっと美人が乗っている　松川　杜的
弁当に無理な愛情詰めてある　樫谷　寿馬
豊かさの自由におぼれまいとする　奥山美智子
亡くなったらこうかと覚悟夫の留守　宮崎シマ子
アンケート浮気したいに丸をつけ　高橋千万子
人形よ時には相槌うって欲し　越村　枯梢

正本水客

父がいて少うし早い夕ご飯　小島　蘭幸
起重機の夢は地球を持ち上げる　矢野　佳雲
花ごよみ母はだんだん足弱に　谷垣　史好
ひれ伏した天狗の鼻が高すぎる　寺沢みどり
だんだんに気の毒になり疎遠がち　松高　秀峰
不器用に生きればもっと楽なのに　高杉　鬼遊
捨て難いものばかりある小引出し　本間満津子
知らぬこと多し花の名も草の名も　増田　次章
男だったら男だったらと米洗う　松岡　三吉
風呂敷へ米を包むと円くなり　片上　明水
五十九歳これから川へ洗濯に　小出　智子
緑が好き雑草にも水を遣る　松川　杜的
定職のない叔父さんの肩車　田中　叶
他所の灯が明るいなどと言わぬこと　川端　柳子
視覚から少しはずしてある梯子　松本今日子

黒川紫香

犬が仔を産んだ話で夕焼ける　安藤寿美子
ポケットの掌には合鍵もっている　中原みさ子
真夜中に鉛筆一本尖らせる　光井　玲子
留守番とさとった夫のさびしい眼　堀江　光子
ためらう母を一番前に座らせる　後藤　正子

とことこと従いていったらお手洗　川端　柳子
次女の背が伸びて長女の服を買う　久保　正敏
ゴボ天を揚げるリズムは腰でとり　谷垣　史好
谺して山は悩みを吐くところ　林　瑞枝
満ち足りた人形指はしゃぶらない　菅井とも子
人間の思案へ星のいさぎよし　西口いわゑ
外科だから切れば終りときかされる　増田　次章
聞かせとこ九官鳥が喋るから　高橋千万子
陽にとろとろ猫もおんなじ眼で眠る　西村　早苗
別室に案内されて落ちつけず　崎山　美子

西田　柳宏子

我が子とも知らず種牛すれ違い　矢野　佳雲
げんこつの痛さが判る子に育て　森田　熊生
心足る日なり丁寧にバター塗る　岩田　美代
雑魚になる父にも小さな意地がある　岩本雀踊子
点滴の中に叱言が混ぜてある　土居　耕花
休み癖ついてしまった艶ぶきん　福本　英子
キリストはワイン牧師さまは酒　奥田　満女
不器用に生きればもっと楽なのに　高杉　鬼遊
好きずきに生きて近道まわり道　藤田頂留子
有頂天になってどんぐり転げ過ぎ　遠山　可住
陽のあたる場所には出ないカタツムリ　嘉数兆代賀
だまし船母は何度も乗ってやる　丸山よし津
蟹たてに歩く日煙草止めるだろ　江口　度
不機嫌な日オムレツを厚く焼く　佐藤　藤子
裏切りの話はしない手話仲間　辻　白渓子

橘高　薫風

弔いの鉦を迂闊に七拍子　土居　耕花
六月や隣の鯉に負けたまま　高杉　鬼遊
禅寺を禅寺にする石の道　松川　杜的
褒め合うてまだ友達になりきれぬ　本間満津子
諍いも一つのゲーム老夫婦　宮崎シマ子
遠足が乗り込んで来て陽の匂い　大塚　節子
反対も同じミカンの皮をむき　時末　一灯
これこそはロマン人体解剖図　谷垣　史好
内需拡大風呂の蓋なと替えましょか　安藤寿美子
落語家の禿げているのも芸のうち　遠山　可住
しまったと蛇は思っているのです　田中　叶
均等法我が家は二十五周年　柳楽　鶴丸
幼な児に扇子ひろげる難しさ　中西兼治郎
負けそうで腹一杯のめしを食う　田中　隆二
本心が出るまで鉛筆を削る　森山　盛桜

川柳塔賞候補作品

板尾　岳人

弱い者同士が乗った泥の舟　児玉　歌子
糸尻を結び損ねた針の悔い　宇野　昭代
逆らえぬ流れに鬼女の面が浮く　寺中三枝子
いつになく傷まけしている紙の鶴　吉川　寿美
風の街寒い噂がついて来る　清水　康恵
弾めない訳は明かさず手毬うた　高杉　千歩
幕切れの良さで始まる第二章　笠嶋恵美子
仕返しは伏せて女の爪を研ぐ　東浦　砥代
木の芽和えしばらく母に会っていず　福田　礼子
鶴の瞑想或は人より深からん　永田　俊子
阿倍野区や川柳塔社どのあたり　森山　英子
翔ぶことを赦して呉れぬ薬指　河瀬　芳子
寡黙なる大樹の下の思いやり　桜沢あかり
暖かくなると良い絵が見たくなり　森川まさお

高杉　鬼遊

鶴の瞑想或は人より深からん　永田　俊子
爪切っただけで体が軽くなる　福士　トキ
樹から落ちても猿は猿だと主張する　藤井　高子
六尺の高さに母は背負われる　太田　幸枝

冥府にも友達の輪の二つ三つ　高杉　千歩
敵に塩天地無用の函に入れ　吉川　寿美
妻が呼ぶ声理実に引き戻す　高野　宵草
心配をしないでくれと置き手紙　小畑よし子
頑張ってみたが限度の笹の雪　相葉　あき
足らざるは互いに認め老夫婦　松本　一郎
男ども油断めさるな妻のスト　野瀬　昌子
転ぶこと多くて起きることに馴れ　桜井　千秀
いい年をしてと笑われそうな夢　麻野　幽玄
何時来ても特別防犯期間中　福元みのる
気にしてぬようで気になる人の恋　野村　八重

小出智子

動物園キリンの首に見下され　小山　悠泉
百選の名水あって春の客　米倉　彩女
行商の老婆に桜美しい　秋田　茂
寝たきりに今年も帰って来た燕　鷲見　章
砂に水しみ込むような安堵感　片岡智恵子
鶴の瞑想或は人より深からん　永田　俊子
教わったようには抜けぬ鮎の骨　桝本　露児
定退のどの服着てもみな軽い　八塚三五島
出稼ぎが帰り白鳥落ち着かず　斉藤　劦
玄関へうぬぼれ鏡掛けておく　佐藤美代子
何時来ても特別防犯期間中　福元みのる
父の日がこそばかゆくて酒に酔い　青柳　金吾
いい年をして笑われそうな夢　麻野　幽玄

タンポポの綿毛好い日に旅立ちぬ　山本　玉恵
まんまるい月に愚痴など話せない　松川　芳子

谷垣史好

王朝の崩れる音をしかと聴く　河瀬　芳子
いい話聞いて来たのは向う岸　清水　康恵
春はここから鎮魂のサクラ舞う　鶴久百万両
寡黙なる大樹の下の思いやり　桜沢あか里
敵に塩　天地無用の函に入れ　吉川　寿美
逆らえぬ流れに鬼女の面が浮く　寺中三枝子
背広着た人は公園通るだけ　森川まさお
本当に困った顔が行く夜道　立床　晴風
タンポポの綿毛好い日に旅立ちぬ　山本　玉恵
パフォーマンスそして私は石となる　桜井　千秀
鶴の瞑想或は人より深からん　永田　俊子
お互いに風景となる老夫婦　桝本　露児
無雑作にビルは夕陽を切って捨て　渡辺伊津志
少年の旅に保護色消えている　蔵重　成人
樹から落ちても猿は猿だと主張する　藤井　高子

河内天笑

心細い親にだんだんなりそうな　高杉　千歩
ねぎらいが上手になった妻の箸　福田　礼子
背ボタン一寸甘えた声を出す　大川　幸子
爪切っただけで体が軽くなる　福士　トキ
他人の傷聞いて痛みをやわらげる　朝倉　大柏
何かある娘にビール酌いでやり　渡辺伊津志
嫁が来てサラダオイルの減る早さ　矢倉　五月
あきらめが少し混った夫婦の和　東浦　砥代
こだわっているのは私ひとりの絵　清水　康恵
おしゃべりが近所を汚染して廻る　鶴久百万両
男女同権パパにお乳は出ませぬが　乾　喜与志
本物のドラマを照らすお月さん　宮崎　菜月
力にはなれぬが愚痴は聞いてやり　桜沢あか里
あまりにも正直すぎる鏡だな　神崎あいこ
がむしゃらに動き悲しみふっ切ろう　安田　志津

川柳塔柳箋

一冊　二百円

送料　二百四十円

—水煙抄—

秀句鑑賞

—前月号から—

小砂白汀

皆さんの苦心の作を秀れた選者が公正な目で抽出された中から秀句をと言われると取捨は苦業である。みな取り上げたいが紙幅が許さぬ。そこで極力独断と偏見を避け、且つ同工異曲を排除したつもりだが、割愛した作品多く、許されよ。

鶴の瞑想或は人より深からん
永田俊子

一本足でじっと立っている鶴を瞑想と断じた目は非凡。この人の今後を注目したい。

本心がわかれば腰を抜かすだろ
田中晴子

一見男性の作品かと思わせるほどの迫力がある。人間と人間、本心をぶつけ合っては絆さえも千切れるおそれがある。適当にクッションを入れてこそ和が保てる筈である。

靴脱げば素直な僕になる砂場
高野宵草

過保護、過干渉、放任と三つの型があるようで、いずれも子育ての原点を忘れている。温い目で見守りながら思いきり山野を跳ね廻らせる。これで人間らしい人間に成長するのだが、いつからか忘れ散々な世になった。

野次馬だってうっとり見とれる時がある
桜井千秀

ミイラ取りがミイラになった、この句を見てふっとこの言葉を思い出した。

4Bで七月の橋書きあげる
鈴木良征

真夏の光の強さを「4B」が適切に捉えた。「書き」は「描き」であろう。

鼻先に人参走らねばならぬ
赤木和子

ややマンネリ性だが、中曽根選挙を思い出してこの人の確かな目とユーモアを買う。

宙に浮くことし観音さまの顔
森山英子

澄んだ空に慈眼あふれる観音像を見たこの人のセンスの良さが、あたかも仏画のごとき効果をもたらした。

無造作にビルは夕陽を切って捨て
渡部伊津志

ビルの持つ冷たさを適確に捉えましたね。こんな物を全部撤去すると美しい日本が帰ってくるのだが。

人々の影を綺麗にしたい月
真喜内実

月が見せる人間のシルエット、人間とは何と端正で、この世に悪人など居ないと見せる。

赤裸々な街をみている朝の月
福田礼子

前句とは全く逆の月で、何も彼もさらけ出しては実もフタも無い。少し霧のベールで包んでもらいたいのが人情だ。

産卵の亀見る人も涙ぐみ
森川まさお

亀の母性本能はあるいは人間以上かも知れぬ。子孫を残すイトナミはまことに崇高で、遠い荒海を越えて最適の場所を求めて苦闘するのであろう。神の給う業であろう。

髭落しメロンのような顔になり
菅田かつ子

この人の句には巧まずして人を笑いに誘うものがあるが、締りの無い顔にしてメロン化された本人にしてみれば笑いごとではない。

薬漬け特効薬は呉れません
八木芳水

そんな薬を出せば医者はあがったりである。近ごろの医療のあり方を痛烈に批判したところ。この作者ただ者ではないかも。

この他どうしても捨てがたい句を次に、

天気予報当りすぎても腹が立ち
小西小雪

豆煮えるまでの留守番頼まれる
斉藤劦

いってらっしゃい掌を振ってから独り
吉田笑子

待つ恋で女の画布は白いまま
野村京子

水清く住んで水中花も独り
藤井高子

親の無い子供と遊ぶ風車
信本博子

愛染帖

橘高薫風選

米子市　八木千代
やがて白だけが濃くなるわたしの絵
境界線をじっと守っている一樹

大阪市　西森花村
現代に生きて学僧眼鏡掛け
玩具箱寝足りた顔のお人形

寝屋川市　江口度
予報雨蛇口を水が迸る
服を買うカレーライスの甘い日に

大阪市　小出智子
母がいて朝の茶粥が口に合い
今にして子が膝にいた頃がよし

笠岡市　木山遠二
寝たきり千日猫を相手の日が続く
真青な空を証拠に梅雨明ける

青森市　工藤甲吉
長生きは北前船へ手を合わせ
どうしても貸してくれない黄金虫

守口市　森川まさお
留守番をしてると腹がへってくる
コーヒーを飲むのにズボン穿き変える

吹田市　後藤火鳥
楢山の心に居ます老母悲し
梅雨寒に風邪熱蛙囃し立つ

堺市　高橋千万子
敗色の事務所居づらくなるダルマ
有るふりも無いふりもして日々のどか

羽曳野市　吉川寿美
コレクトロール煮っころがしを恋しがる
雑兵は雑兵なりに打つ太鼓

河内長野市　植村喜代
嫁ぐというのにまだほしい縫ぐるみ
指の爪まで似てるってはずかしい

広島市　望月はるひこ
エコノミックアニマル育てるいじめです
虹を見た殻を残して死ぬる貝

倉吉市　奥谷弘朗
人並の嘘では首相には成れぬ
家建てて男終身刑につく

尼崎市　西村かすみ

鳥取県　土橋蛍
恋煩いか船酔いか知りません

高知県　松岡三吉
凡人でしょうかトイレで考える

唐津市　浜本義美
灯を消して雨の雫が胸に沁み

島根県　堀江正朗
手に触れて聞いて僕には僕の彩

島根県　堀江芳子
雑談へ夕餉夕餉と打つ時計

米子市　菅井とも子
バランスが崩れて来そう肩を組む

寝屋川市　岸野あやめ
妻老いて見合写真がまだ残り

島根県　小砂白汀
円高へトロイの木馬走らさん

和歌山市　玉井豊太
段違い平行棒の母に付く

米子市　青戸田鶴
笑い過ぎて散ってしまったばらの花

兵庫県　東浦砥代
おぼろ月嘘が真実めいてくる

尼崎市　春城武庫坊
胡粉には抗する赤も青もなし

寝屋川市　堀江光子
暇潰し勿体なくも写経する

高石市　宮田純一
ただひとり酒きらうのがいた先祖

唐津市　山口高明
醜聞と書かれる程に名は成さず

豊中市　奥田満女
治らない病気へ払う治療代

西宮市　奥田みつ子
友が逝く二日程してから地震

和歌山市　森敏子
たちばさみおどろおどろが消えるなら

大阪市　塩田新一郎
権力だニーチェ本音をたたきつけ

唐津市　仁部四郎
選挙カー団地で下駄を探してる

長岡京市　木本如洲
煙草の輪男になれと言うている

唐津市　浜本ちよ

ストライクゾーン広げて見合いする　益田市　里本たかし
満開のマーガレットと猫眠る　伊丹市　樫谷寿馬
歩行器よ今に逆行するだろう　岸和田市　古野ひで
梅雨に倦む心を癒す香を炷き　和歌山市　福本英子
脱け殻に心残して飛び立てぬ　今治市　月原つくし
指切りをさせてつないだ縄電車　和歌山市　後藤正子
花活けて鏡みがいている泪　和歌山市　西山幸
絵扇の風のこころが見えますか　川西市　野村静雄
成功を神に祈っている科学　小松市　小森靖江
小さい目の奥に炎をためている　米子市　沢田千春
濁流も海でやがては光りだす　岡山県　矢内寿恵子
紫がとても似合いの仏様　和歌山市　坂部紀久子
土砂降りの蛇の目の中のプライバシー　弘前市　波多野五楽庵
鍵かけてなんと阿漕なお寺さん　富田林市　岩田美代
ロボットもそのうちきっと鬱になる　岡山県　土居耕花
童貞と処女と味ないフルムーン　吹田市　栗谷春子
洗濯機音してる間の小休止　高知県　曽我部裕
責任感しばらく妻が待たされる　倉敷市　藤井春日
御仏に声無し浄土住みよいか　今治市　月原宵明
文章に牙をむく人情の人　羽咋市　三宅ろ亭
水撒いて優しい夏にして過す　八戸市　島田昭治
懸命を自負して酔うたころ恋し　弘前市　真喜内實
みの虫は蓑の世界で昼寝する　守口市　結城君子
梅雨さなか園児の歌う道を選り　鳥取県　林露杖
珠のない妻の指輪に想うこと　米子市　金山夕子
派手すぎて胸の飾りが重くなる　京都市　森川春子
借金を返せぬ訳もおしはかる　藤井寺市　福元稔
聖戦と呼びたい教科書を作る　和歌山市　神平狂虎
論陣を張ってはみたが酒が切れ　唐津市　久保正敏
終りからページをめくっている期待　和泉市　西岡洛酔
働き蜂背広の裏が褪せて居る　静岡市　渥美弧舟
五線紙に短詩溢れて五月雨るる　広島県　田村新造
晩節を通したいもの背筋張る　和歌山市　桜井千秀
善人ぶると目尻の皺がよく目立ち　高槻市　川島諷云児
退職はしても男にあるノルマ　唐津市　松高多駄子
放埒の雨に女の濡れてゆく　米子市　光井玲子
ひまわりに主役とられた夏のバラ　新発田市　上鈴木春枝
言い訳はスラスラと出る妻の口　愛媛県　高見沢建介
わが庭の桔梗手向けん雲の峰　茨木市　堀良江
母の膝幾つになってもなつかしい　尼崎市　春城年代
それはそれ小さな旅に出て来よう　和泉市　岡井やすお
欲欲と大人社会を見る子供　岡山市　川端柳子
プールからさえずり小鳥達の夏　岡山県　松本元江
師を悼む雨しきりなり句碑除幕　宝塚市　丸山よし津
スペインへ明日発つと言う高いびき　笠岡市　松本忠三
貸すほうが貧乏ゆすりしています　大阪市　川口弘生
病む身には夜の白む事素晴らしい

盆休み静かな街もたまによい　豊中市　上田登志実

サーカスのクラリネットの金と銀　西宮市　草刈堕駄

笑いの声はブロック塀を越えて出る　米子市　政岡日枝子

欠落のページに父がいたようだ　鳥取県　新家完司

葬式の値踏み他人だから出来る　唐津市　相葉あき

土佐に来て四万十川の鮎を追う　箕面市　椎江清芳

茂みから流石別府という煙　唐津市　田口虹汀

裸婦像の胸に激しき男梅雨　唐津市　原野常善

天神の巫女も装う燕子花　唐津市　筒井朴竜

見舞着も女心へ気をくばり　大阪市　古川美津枝

ひとときを一弦琴と沙羅双樹　豊中市　辻川慶子

沙羅の花昔を語る梅雨のあと　高石市　浅野房子

肝冷やすはなし間違い電話にて　平田市　久家代仕男

気分転換時どき喧嘩しています　大阪市　上江洌勝子

中流と決めて周囲と比べない　西宮市　松本一郎

香りしてくるよカレーのコマーシャル　佐賀県　寺中三枝子

心盛る器がもしも売れてたら　米子市　茂理高代

倅から父と母とを較べられ　浜田市　佐々木裕

くちなしの香りの中の初対面　名古屋市　藤井高子

天分の後れを塾は背負い過ぎ　大阪府　縣外郎

盆がきて桔梗一輪人を恋う　愛媛県　藤原無想

鏡さんわたしピンクが似合うかな　倉吉市　田中亜弥

ドングリが揃ってパズル解けぬまま　広島市　流奈美子

どしゃ降りに手持無沙汰な蜘蛛の糸　愛媛県　石手武

人形はどれもきれいでつまらない　和歌山市　山川克子

出席の立場バッジを替えてゆく　岡山県　岩道博友

ぼく一人なんだよ蛙とんでこい　羽曳野市　田中隆二

来ぬ人へ不安は渦を巻きはじめ　岡山県　山本玉恵

後五年平均年齢伸びたとて　寝屋川市　宮尾あいき

夢トンネル抜けて激しい雨に遇い　和歌山市　松原寿子

傾いた西日へ誰も見てるだけ　大阪市　渡部さと美

天皇に送るあやめは航空便　弘前市　斎藤劦

病室で白足袋を穿くお人柄　和歌山市　山口三千子

減塩を気遣いながら旅の膳　大阪市　井上白峰

叩かれて人の心がよめてくる　奈良市　森田カズエ

丸ビルの灯に迎えられ旅終る　堺市　山本半銭

六十になってもお転婆変らない　堺市　桜沢あか里

添加物漬けにされても長く生き　唐津市　上田花代

＊

投句先　〒560　豊中市中桜塚三丁目13—15　**橘高薫風**宛（ハガキに3句）

NHK川柳募集

課題　「月」　選者　**橘高薫風**

締切　**9月10日**

（ハガキに三句以内）

投句先　大阪市東区馬場町3—43NHK　大阪放送局〝さわやか広場〟係

発表　9月28日（日）ラジオ第一放送　午前11時5分から

英訳句——著者との話題

竹内紫錆

一

川柳作家の皆さんには二十代、三十代の子息がおられよう。親子とも、学生時代から英語の勉強にかなりの時間を投入したものの、単語も文法も忘れてしまい、実年のころは外来語（カタカナ）を使うだけになり、顧みて効率の低い学習だった——と痛感しておられるのではあるまいか。

父親と同じ経過をたどる子息のほかに、少しは自信があって早めに翻訳にたずさわる人もある。しかし一面、雑学がないため適語が浮ばず、とかくくどい逐語訳になり、引き緊まった文章を書くことに縁のない頭脳ができあがる。これは原稿料（字数で払う）とも関係があるようだ。

それと共通する点だが、若者達の作文力の低下も目につく。手紙を書かず電話で話す習慣がつき、卒業論文が指導者の加筆でやっとまとまる、といった年代で作文の練習は終りとなる。職場に入れば仕事は対話で進められコノ、アレと指して用を足すから、たまに書きものをしても、それが一本立ちにならない。上役も「早くナニしてくれ」という始末だ。また、電話は相手の言葉や二人の予備知識に助けられて進行する。留守番電話のとき、ドギマギしないで即席に作文するように、用件や主張を洩れなく述べる機会がふえるとよいかも知れない。

そこへゆくと、川柳作家はよい習慣を身につけている。十七音の句を仕立てるつど、候補語を思い浮べ、組立てを考える。散文で五十字、百字文の説明をすることもできる。つまり、作句者の頭の中には豊富な類語辞典が出来てゆく。もちろん文章は無駄がない。

自力で言える（書ける）語句を表現語彙または発表語彙といい、聞いた（読んだ）ときにわかる語句を理解語彙とか受容語彙という。前者は後者の何分の一かである。

「連想ゲーム」では、ヒントを貰ってから五秒か十秒後に、題の周辺の語句を言わねばならないが、我々が書く句や文は、じっくり考えたらよい。一晩たって、短い一語で自分の発想をスパッと言い表せる可能性がある。とにかく、作句は、着想と自力で言い回しを考える習慣の産物である。

二

私は技術翻訳家である。趣味が身を助けることもあるらしく、技師を集めた英語の勉強会で、英訳俳句を十句ないし二十句示し、原句を当てさせる実習をときどきやる。それはあくまでも日本人向けのクイズであって、外国人に日本の文芸のわび・さびを伝えようとするわけではない。引用する英訳句は、在日外国人の労作が多いが、元の句は芭蕉や一茶の作品やことわざの類である。

英訳俳句を示し、英語に自信のある人をたきつけると、興味を寄せるものである。もし父親の作った分かりやすい句を英訳したものを息子に見せたら、肯いて笑ってくれるかもしれない。

俳句を英訳して外国に紹介しようという活動は昔からある。「古池や」の句などは、十通り以上の英訳例があるそうである。

寺田寅彦の『柿の種』の一節に、次の文がある。ウェインライトという学者が英訳した俳句を、俳句のことを何も知らない人間のつもりになって、なるべく英語に忠実に翻訳す

ると、次のような具合になる。「荒海や」の句は、

「大波は巻きつつ寄せる、そして銀河は佐渡島へ横切って延びひろがる」……

といった調子の文章に変る。（以下略）

こういった場合、原作を全く知らない和訳者は、舞台が日本と察しがついても、はなはだ心許ない思いがするはずである。しかし、もし話相手がいて、ポピュラーでない俳句にふれてゆき、その英訳から作品の「概念」をつかんでもらうことができれば有用である。遠回りでも、「翻訳の作業」をやってみたいという心理が若者にはある。最後に納得するものがあるとよいのである。

次表の最初の六つは有名な英訳俳句の例である。

英訳句（俳句・川柳）

1. When I speak
   My lips feel cold——
   The autumn wind !

2. Gathering as it goes
   All the of June' how swiftly
   The Mogami flows !

3. To the eye, green leaves,
   The mountain cuckoo,
   The first bonito.

4. Being my own,
   The snow on my bamboo hat
   Feels light.

5. The spring sea ;
   Gently rising and falling
   The whole day long.

6. Do not kill the fly :
   See how it wrings its hands ;
   See how it wrings its feet !

7. When you want to show devotion,
   Your parents are no more.

8. To snap about here
   Is the nature of lotus roots.

9. Holding a baby,
   It is easy
   To talk to a man.

10. After it began to rain
    In earnest,
    Coming out of the shelter.

11. She ties her sash
    And her hips come alive.

12. Even while asleep, the fan
    Is waved by a parent's love.

13. Poverty also,
    In excess, ——
    And they laugh together.

14. All her beautiful fingers dance,
    Handling the hot *sake*.

15. Children are the children of the wind,
    The children of heaven,
    The children of the earth.

16. At that time,
    Women
    Were so obedient !

17. While half-tipsy,
    Everybody
    Has a known face.

18. The song of the moon ;
    Holding the child,
    The mother is glad-weary.

19. With the beaujiful burden on his back,
The horse's face
Is long and tender.

20. With the bell of the hawker,
The city day
Closes.

〔注〕
3. bonito カツオ　6. wring ねじる
8. lotus ハス　10. earnest（名詞）本気, in～ 本格的に（雨が降る, など）
17. tipsy ほろよいの　18. weary 疲れた　19. tender 穏かな, 優しい
20. hawker 呼び売り商人

〔英訳者〕2. D. Britton　7,8,11,12,16 撫尾清明, A. J. Crocket　その他は R. H. Blythの諸氏。

原　句

1 物いへばくちびる寒し秋の風　芭　蕉
2 さみだれを集めて早し最上川　〃
3 目には青葉山ほととぎす初がつを　素　堂
4 我が雪と思へば軽し笠の上　其　角
5 春の海ひねもすのたりのたり哉　蕪　村
6 やれ打つな蠅が手をすり足をする　一　茶
7 孝行のしたい時には親はなし　古川柳
8 れんこんはここらを折れと生れつき　〃
9 子を抱けば思にものが言ひやすし　〃
10 本降りになって出てゆく雨宿り　〃
11 腰帯をしめると腰は生きて来る　古川柳
12 寝ていても団扇のうごく親心　〃
13 貧しさも余りの果ては笑ひ合ひ　雄子郎
14 美しい指みな動く酒のかん　水　府
15 子供は風の子　天の子　地の子　三太郎
16 その頃の女はいふがま、になり　路　郎
17 ほろ酔いの中は話せる顔ばかり　久良岐
18 月の唄母は嬉しく子に疲れ　飴ン坊
19 美しい荷物に馬のかほ長し　春　雨
20 呼び売りの鈴で都会の日は暮れる　尺　一

三

俳句と比べると、川柳の英訳例は大変少ない。戦前、京城大学教授だった英国人のブライス（R.H.Blyth,1898—1964）は、俳句・川柳両方の英訳を手がけ、著書に SENRYU（北星堂書店、昭和二十四年刊）がある。日本語の原句と、三行に記した英訳と、英文解説がある。最近では、佐賀市の撫尾清明氏が外国人（クロケット氏）と組んで「番傘」の作品を中心にした英訳句を二行ずつに掲載した書物がある。また、故阿部佐保蘭氏の英訳川柳入りの句文集もあって、私もその情熱に打たれたことがある。

外国人は、単純明快な句を取り上げるであろうし、日本に長く滞在すれば川柳を詠む庶民心理がのみこめるということもあろう。表のうち十四句はブライス訳であるが、終りの六句は、氏が入手した色紙の句が元になっていて、それなりに苦心の表現をしたことだろう。一般に、含蓄の深い句が分かるキャリアと、英語の詩が作れるキャリアとか、同一の頭の中で育つ確率は大変小さい。私のような科学技術分野の欧文だけに慣れた人間には、文芸作品の英訳は無理である。

寅彦の逆翻訳の話と似たことだが、誰かが英訳した随筆を、別人に和訳させるとどうなるだろうか。普通の翻訳者がやると大抵長くなる。『天声人語』の英訳文が書物になっているが、それを若者に訳させると、グラグラしてくる。七百字の原文が再翻訳で一千字にもなる。翻訳者の悪いくせは、てにをはを有効に使わず「において」「によって」「に対して」といった、好みの文句がやたらに出て、短くする努力をしないことだ。そういう「ロぐせ語」が聴き手の耳につくようだと、そういう話し手は大抵作句不適任者である。適切な句語を平素使う人は、対談をしているときも、つぎつぎと簡潔な言葉が口をついて出る。

英語の短文や詩を日本語に訳させる実習のさい、訳させっぱなしにするのではなく、引き緊まった日本語に感心するところまで指導する必要がある。

■中国吟行の旅への誘い〈余録〉

ジンギスカンは源義経か

東野大八

このほど、洪水で水没した古本の山の底からひょっこりと一冊の珍本が姿を現わした。

小谷部全一郎著「満州と源九郎義経」（昭和八年厚生閣版）というのである。有難いことにこの本の間に部厚い封書まである。満洲時代の新聞社の同僚だった親友Hが、二むかしも前に、私宛に送ってきてくれた、尾羽打ち枯らした古本なのである。私は欣喜雀躍して、この古本と古書簡をむさぼり読んだことである。そしてこの一冊の古本をめぐる半世紀もむかしの、満州新京における懐しい故事をまざまざと思い浮かべたことである。

昭和八年この本が出版された時点で、関東軍四課（満州民生工作担当）は、新聞記者会見を開き、この本を中心に「ジンギスカンは義経也」のPR特集をやれというのだ。どうもこの話の影には、旧満州国の大ボスで鳴らした甘粕泰彦がいたらしい。

この珍本にはさまったHの書簡によると、成吉思汗は義経か、というテーマですでに大正14年に一騒ぎがもち上っていたのである。

「成吉思汗は源義経也」（富山房刊）が出たのは大正十三年である。著者は小谷部全一郎という前記古本と同じ人物である。この本が出版されると同時に、小田部は華族会館に清和源氏系の華族たちを集め講演を行い、それが東京日日新聞紙上に「義経はジンギスカン、弁慶お供に蒙古入り」のタイトルで大きく報道されたとある。

この一件につき、権威ある日本歴史の雑誌「中央史壇」は、大正十四年二月号で「成吉思汗は義経に非ず」という臨時増刊を出した。その否定する人々の顔ぶれは金田一京助、笹川臨風、三宅雪嶺など十余人の錚々たる顔ぶれである。それに対して小谷部は、中央公論などに長文の反駁文を出している。

小谷部全一郎とは何者か、彼はドクター・オブ・フィロソフィーの学位をもち、長くアイヌ教育に献身した人物で、ユーカラに残ったアイヌ伝説の説話からヒントを得たものとみられていると、金田一は述べている。

この山谷部説を強力に支持した筆頭は大川周明（終戦時のA級戦犯）と甘粕たちの右翼の大物たちであった。彼等にすれば、小谷部説を支持したのは、満蒙独立を背景とした大陸教化政策の好資料とする意図が明らかだ。右の「満州と源九郎義経」は、満州国建国を記念して溥儀皇帝にまで贈呈している。

いずれにしても、そうした思い出の珍本が、私の書棚から出現したわけで、私の欣喜雀躍ぶりもおわかりのことと思う。

前置が長くなったが、右の珍本（約二百頁）の中味をダイジェストするとこうである。

源義経は藤原泰衡に攻められ文治五年（一

一八九）四月三十日衣川で妻子とともに自害して果てた。（註・成吉思汗一一六二―一二二七）

泰衡は義経の首を黒漆塗りの首桶に酒漬けにして鎌倉に送った。首実験に当ったのは和田義盛と梶原景時。しかしこの首は自刎してから四十日も経っていて、季節は六月（旧暦）しかも首は焼け首、ひどく壊爛腐敗しているので検首も定かならず「然らば義経は、偽り死して遁れ去りしか。今に至るも義経を崇奉し祀りて之を神とせり。蓋しその故あらんか」（大日本史）

実はこの義経の首は杉目太郎行信という影武者のもので、宮城県栗原郡金成町の江浦藻山信楽寺に「源祖義経神霊見替杉目行信碑」という碑があるという。延宝期の「可足記」に「行信が首、九郎判官の身替りにて鎌倉見参に入候」という古文書文献もある。

伝承によると藤原秀衡は、義経自決の一年半前に、病床で錦の袋に収めた遺書二通を義経と泰衡に渡している。泰衡は義経討伐の宣旨や院宣をうけながら腰を上げなかった。そして年余もたってやっと五百騎の軍を起し義経を討った。一服盛れば事は終ったのに、なぜ彼は軍を起したか。佐々木勝三の著書によると、泰衡は父秀衡の遺書により、義経と図り偽兵を起し、影武者の首を〝焼け首〟として鎌倉へ送った。暑中輸送の首は、まともでも四十日の道中では腐爛しよう。

また〝弁慶の立往生〟で世にきこえた武蔵坊弁慶の討死は、七つ道具を背負ったわら人形であったという。

東北の各地には、義経・弁慶ゆかりの伝承や遺蹟が至るところにある。義経主従の蝦夷入りのコースはこれらを辿ると、いくらでもそのルートが浮かび上ってくるが、その最も有力なポイントは、宮古市の西北にある黒森山とされている。

宮古周辺には義経関連の事蹟の多いことで有名で、判官の甲冑を収めた判官稲荷など、祀堂は五ヵ所を数え、弁慶が三年三ヵ月荒行をしたという古蹟もある。宮古市田鎖の領主佐々木義高は、静御前と義経の子だとある。

義経主従が蝦夷地で腰を落ちつけたのは、ユーカラの故郷平取（沙流川流域）とされている。平取アイヌは、倭人の同化政策に早くから同調し、松前藩のモデルケースとされている。さてこの地と大陸渡航説だが、ここには数え切れぬほどのドラマ的説話が蝦夷地一円にわたって流布されている。

江戸時代には、東北では「御曹子島渡り」の浄瑠璃類が多いが、享保期には馬場玄隆の「義経勲功記」加藤謙斎の「鎌倉実記」新井白石の「蝦夷志」があるが、これらは挙って義経の「入金説」がテーマである。

入金説の根拠となった「金史別本」（沢田源内著）によると、義経は蝦夷地から金（中国）にわたり、金王朝に仕え範車大将軍となったとある。金朝は成吉思汗に滅ぼされた中国王朝だが、義経ジンギスカン説はこの辺がややこしいところだ。

森助左衛門の「国学忘貝」によると義経清祖説が登場する。清の乾隆帝はみずから「朕が姓は源、義経の裔、その先は清和に通ず、故に清国と号す」といわれたそうな。甚だ珍説といわざるを得ないが、要するに江戸時代からこの種の文献は、ほじくれば際限がなかったらしい。このことは江戸庶民の〝判官びいき〟から出たものといえる。大正・昭和を騒がした成吉思汗は義経説も帰するところこの〝判官びいき〟の現代版である。

兄様は苦なし御舎弟九郎性　タル66

柳樽でも義経をざん言した梶原景時と頼朝の句はほとんどがボロクソである。

第1回　川柳塔勉強会　　里　小　路

7月4日、伊勢鳥羽答志島も梅雨季には珍しい爽やかな日和に恵まれ、遠く東野大八先生のご参加もあり、総勢三十名、会場サンビーチ鳥羽へ。

島巡り、いるか島見物、昼食後の勉強会とスケジュールは武庫坊さんの手際が冴え、宿題作句四時締切で開会された。

先ず紫香氏の和やかなお話に続いて大八先生の講話、「川柳塔の新しいお役に立てば」のテーマで「先ず平安川柳のあのバイタリティに富んだ会を望む」、「今の川柳は扇風機のプロペラのようなもの」、「結社は安治川の団平船の砂利みたいに集まって、年間十万から作句されているが何処へ行っている」から始まり「川柳の世界はどうなっている」、「川柳誌をなぜか読む気がしない」、「人間恍惚になろうとも、苦しいこと、楽しいことはいつまでも残っている筈」。

また井上ひさし・好子夫妻の話に触れ、演歌「矢切の渡し」の歌詞の一節を被露称賛。

「俳句はジャングルのようにと言う好子さん」俳句には女の道と男の道があるが、川柳にも同じ「飽くことなき人生を寝取られた、寝取ったと、一生を終る女は幸せだ」、「人間ドラマはそこにある」、「自分と自分との対話」、「自分との戦い」勇気を出していい作句をと、次

わかまつ創刊百号記念合同句集
「あすなろ」第II集出版

第15回 北陸小松川柳大会

とき　**昭和61年9月28日**(日)10時開場
ところ　小松市公会堂第一集会室
　　小松市小馬出町

句集鑑賞　奥　美瓜露氏
宿題　「鈕」　岩本雀踊子選
　「明日」　酒井　路也選
　「しばる」　谷口　洋月選
　「独り」　松岡　緑朗選
　「無心」　開発　秋酔選
　「数字」　吉田　秀哉選
席題　当日3題
　各額2句　締切＝宿題11時30分
　席題12時　欠席投句拝辞
会費　一、五〇〇円
　(昼食・発表誌呈)

主催　こまつ川柳社

から次へと喝破された。

また昔大阪へ行ったら塊人さん参りをしたこと、あの超人カール・ルイスが百mを疾走する時、ゴール手前八十mのところでかならず笑うという話、最後は昔先生の中国北京駐在時代、阪急の小林一三氏にまつわる十日間程のエピソード等、硬軟にわたっての約四十分間、一つひとつに意義ある何故かを語られ一同絶妙の話術に酔う。

続いて宿題選。披講に先立ち、笛生氏のD51から始まり、機関士としての苦労話等、国鉄の今昔物語に別世界を教えられ、次に薫風氏の、あいりん地区アウトローの姿を詠まれた魚住満潮氏、西川晃氏の名句四十数句のコピーを各人に配られ、一句一句に就て寸評を交えての披露があり深い感銘をうける。

以上有意義な勉強会に、予定の夕食時間も三十分遅延する。

宴会も最中に薫風氏出題の漢字の書取りゲーム等も折込まれ、あとは例によって例の如く延々十時まで、最後はホテル従業員までが唖然とする、ご存知天笑さんの唄を最後に、紫香氏発声の川柳塔万歳でめでたくお開きとなった。

二日目昼食後あいにくの雨の中、二見が浦から伊勢神宮参拝。玉砂利もしっとりと、昨年来た埃っぽい参道と異なり、降りもよきかなと、珍しく人かげまばらな宇治橋をあとに意義深い第一回勉強会を締めくくった。

一同、第二回第三回を約束し和気あいあい川柳人集いのよさを存分に味わい、小雨の終着駅で全員元気に散会した。

最後に今回の勉強会に終始お世話下さった柳友松本今日子さんに心からお礼申し上げます。

〈一人一句〉

上野からはじまる東京千一夜　大八
倖せの女は爪を丸く切る　千万子
したたかな縞のお尻の女郎くも　福一
千手観音お手千本に満ちる慈悲　笛生
七十八足の爪まで手がのびず　天鳳
お梅どんで通した頃の縞木綿　小路
立候補千載一遇土下座式　よ志子
縞の合羽が花束受ける村芝居　武庫坊
緑一色一色の中に千の彩　てる
弟の学資を送り爪を切る　紫香
それからは縞のネクタイ憎うなり　いわる
千人の心空しい針の詩　惜春
爪染めて今日を占う雨が降る　栄
枯れてゆくいのちを思う縞がすり　正坊
満員電車働き蜂の千の顎　はつ絵
アメリカの旗に不気味な縞がある　寿馬
千差万別私の小鳥見失う　今日子
赤い爪観音様に手を合わせ　薫風
縞柄が粋に見えます大正琴　文子
千載一遇愛の台詞を覚えねば　鬼遊
爪に星何かいいことありそうに　冬葉
まだ若く体の縞が取れてない　東雲
千人針千の想いで糸結ぶ　笑女
苗木植え終って山の縞模様　規不風
マニキュアをしたらころっと気が変り　智子

（抜粋・鬼遊）

◇

川柳塔社常任理事会（8月1日）

出席者＝栞・薫風・紫香・形水・太茂津・敏柳宏子・文秋・萬的・鬼遊・凡九郎・雀踊子・岳人・天笑・笛生・寿馬・小路・智子・杜的・白渓子・正坊・史好

〈議題並に報告事項〉

▽中国吟行の旅につき正坊氏より報告あり。観光地が一部追加された。

▽薫風編集長が第四句集「愛染」を川柳塔社発行にて出版する。

▽釣遊光（姫路市）山本玉恵（岡山県）両氏の同人推薦了承。

■**9月**の常任理事会は**1日**（月）

初歩教室

題 ― 封筒 ―

阿萬萬的

今時電話で何事も片付いてしまう時代。
「封筒」なんて課題を出した話が悪いのかも知れないが……古い句が多かったですね。
では若い句から、

封筒に癖のある文字胸さわぎ　房子
（癖のある彼の封書に胸さわぐ）
封筒に一途な想い読み取られ　寿子
甘い甘い言葉ばかりの封筒が　金吾
（甘い言葉ばかりのレターへ口づける）
ギャルからの封筒マンガ文字でくる　奈美子
封筒へくちづけをしてギャルは出し　やすお
（ファンレター口づけをして封をする）
恋も恨みも律義につれてくる封筒　緑良
封筒へ触れた小指にある余熱　寿子
封筒が苛立ちしてる恋心　陽子
（絵封筒に恋の苛立ち見透かされ）
花言葉匂わす丈で足る封筒　たかし
下五〝足る封筒〟は〝足るレター〟にしては
読取機少女の封筒彩で読む　八重子
待ちかねた封筒別のとこであけ　悦子
開封に人目気にする絵封筒　白峰
ライバルの人に封筒拾われて　市雄
お手製の封筒で来るこれも愛　新造
手作りの封筒夢を載せて来る　博子
だが封筒には愚痴も一杯詰っていました。
自己嫌悪友への封書長く書き　方子
封筒の厚みに愚痴が詰めてある　静子
（きれいなきれいな封筒で来たうらみごと）
封筒に女の愚痴が詰めてある　陽子
雨しとど愚痴も入れてる角封筒　博子
（雨しとど愚痴も詰めてる絵封筒）
封筒の糊が貼れない別れ文　温子
封筒に愚痴一杯を詰めてくる　芳水
（愚痴つめて封書で送る北の旅）
封筒はポストに落ちた悔いはない　房子
だが絵封筒にもこんなのが詰っていた。
メルヘンの絵封筒来て無心文　達子
（女子大生無心も絵封筒に書き）
親展の文字そっと開ければ金送れ　志重
電文のような二行を封筒へ　周三
（電文のような手紙で金送れ）
そして就職すれば…
新入社員封筒片手に街を行く　隆積
社印の封筒持てば信用され　繁男
（社の封筒持てば信用されそうで）
はしご酒社の封筒を置き忘れ　よし津
㊙です封筒偉く見えてくる　久子
（三次会で㊙の封筒忘れて来）
社の便箋社の封筒で断られ　たかし
（社用封筒他人行儀な便り来る）
現金の封筒ボーナス出た便り　吟平
封筒の中味拝んで仏壇へ　悦子
（始めてのボーナス封のまま供え）
横文字の封に留学詰めて来る　豊太
（留学生のメールちょっぴり母を恋い）
さて結婚ともなると灰にするものも…
昇華した夢の封筒灰にする　喜代志
束にした封筒焼いて嫁に行き　兼治郎
煙りゆく封筒の束虹を消え　カネ
今は倖せの絶頂かも。
姪よりの佳き便りらし鶴の封　俊子
しあわせな便り写真と封筒に　慶子
（エアーメールに倖せあふれそうな旅）
だが男には浮気ほどでなくても　すみれ
検閲も済んだ封筒の女文字　達子
封筒の謎達筆な女文字　純子
封筒に裏書きのない女文字　吟平
封筒の文字は女の勘で知り　てる
封筒の裏チラッと見てから渡す
（封筒の裏をチラッと見て渡し）
封筒は男名前で便りする　姿洋
（社の封筒男名前でする便り）
封筒にもいろいろ。
デパートの封筒に埋まる郵便受　市雄
封筒にカタログ一杯ダイレクト　勝美
封筒の封も切らずにくず籠へ　ツヤ子
ダイレクト封も切らずにポイと捨て　新造
封筒を一見中味まで判り　やすお
封筒の中味はたわいないポルノ　姿洋

選挙戦知らぬ人から暑中見舞　実男
（選挙戦知らぬ人から封書が来）
こっそりと封筒渡す選挙戦　春枝
だが迷い子の封筒もあるらしく、
転居先不明と付箋のある封書　たゞし
ワープロの封筒宛名誤字だらけ　明吉
急ぐのに切手足らぬと舞い戻り　周三
違反金とられて貰う招待状　里子
そして
封筒で来るのは税金ばかりなり　昭治
故郷の風封筒に詰めてある　喜与志
（同窓会案内故郷の風も詰めてある）
封筒のハガキに決断迫られる　保夫
返信用封筒思案させに来る　芳水
（返信用封筒も入れ寄附のこと）
極上の封筒中味は寺の寄附
だがこんな封筒を受け取ってはねえ。
菓子折りと封筒が来るバーの付け　章久
別室で出された封筒受け取れず　はるお
封筒の中身知ってる袖の下　繁男
（封筒の中身が知ってる社の落目）
母の便りは、ひつこい位有難いものです。
追伸は封筒裏に書いておく　新造
封筒をも一度はがす母追加　吟平
（封筒はがして追伸を書く母ごころ）
封筒へ我が子に愛を書き送る　ふさ子
封筒へこっそり入れる母の情　千代女
故郷の母の便りは茶封筒　弧舟
（茶封筒ながらなつかし母の文字）
こんどはお孫さん。
封筒と一緒に行きたし孫のそば　ツヤ子
（孫へ書く封書仲々はかどらず）
ニコニコの幼い便り絵封筒　てる
孫娘始めて便り封筒に　ふさ子
（絵封筒も可愛く孫の初たより）
女はいつになっても夢を持つものらしく
絵封筒まだ妻にある少女趣味　静子
封筒に齢を忘れて花を描く　円女
ひとときを少女に還す絵封筒　寿子
引き出しに封筒ねむる過去の夢　静江
（女の劫かも封筒きっちりためている）
文字乱れ老いを見すました封筒に　カネ
（封筒の文字に老いの乱れを見透され）
ここで一寸目先を変えて、こんな封筒も
封筒にちょっぴりくれた五色豆　章久
メロディが鳴る封筒へ書く想い　里子
（バースデーにメロディが鳴る封書が来）
封筒に古都税入れる志納金　白峰
新封筒に次男が暮す権利証　豊太
種の名を印し封筒しまい込み　久子
種の名を書いた封筒亡母の文字　奈美子
封筒貼り金の値打ちが良くわかり　東雲
診断書病名知りたい封筒あかず　喜代子
（診断書キッチリ封して渡される）
家裁から子を片親にする封筒　兼治郎
封筒の中味に運が左右され　久留美
北風に届く断絶の子の便り　静子
封筒でお米が届く世に変り　実男
封筒にするとお志ケチられる　保夫
連名の角封筒へ果す義理　春枝
手作り封筒の句もありました。
手作りの封筒和紙の草木染　太郎
達筆の封筒に少しプライド秘め　寿美子
（達筆の封筒プライドも秘めてあり）
あとのない友へ毎日書く便り　円女
病む友の手作り封筒美しく　俊子
（手作り封筒病む友の指ふと思う）
だがお返事は書きにくいものらしく
ラブレターポストの前で迷い出し　信子
OKと書いたが封筒出していぬ　はるお
封筒は書いたが返事電話にし　明吉
（封筒は書いたが電話にする返事）
最後はお年寄りの句で
絶筆の兄の封書も色褪せて　金吾
亡妹に来た封筒のよそよそし　方子
封筒が減多に来ない暮し向き　昭治
封筒も色褪せてきた遠花火　慶子
思いがけぬ名を封筒の裏に見る　よし津
ときめきの封筒まって草を引く　静江
色褪せた封筒昔を語り出し　久子
封筒に詰めた情熱風化する　サワ子

◇

題「**冗談**」　**9月10日締切**（11月号発表）
ハガキに5句以内
「屋根」　10月10日締切（12月号発表）
宛先　〒598　泉佐野市中庄一〇八一—九九　阿萬萬的

波

森井菁居選

四面楚歌都会の波は高過ぎる　洛　酔
波の外に立って冷たい目で見られ　義　雄
波風を立てずに妻が我慢する　新　造
円高の波飽食の軒叩く　三五島
逆風の波越え夫婦をとり戻し　美穂子
波に乗る時の男は振り向かぬ　河瀬芳子
母の川波がまあるい石にする　雀踊子
海女の肌波が生い立ちしゃべり出す　森脇和子
越えてゆく波が男の貌にする　寿　美
円高の波には波の詩がない　成　人
大波小波経て金婚の波静か　美　子
人波をわけて祭の人となる　晃　世
波巧く交して政治家生き延びる　雅　風
春の雨波の鼓動を消して行く　伊津志
人間の馬鹿さを笑う波の私語　テルミ
波の音までも優しい故里の海　ちかし
どんとどんと波乗り越えた大漁旗　どんたく
波に乗る友へひとこと釘をさす　旭　恒
世の波を遠く見下す丘に立つ　有一郎
波のないところへ波を立てる人　節　子
土用波うねりに秋の風が吹く　勝　美
金持ちの日本へ嫉妬の波が寄せ　ただし
若人とたわむれ波も楽しそう　本蔭棒
荒波へ小舟は小舟なりの知恵　克　子
パスポートハワイの波を夢にみる　静　子
宿の夜は子守歌なる波の音　博　子
円高の波を乗り切るプロジェクト　木　魚
今さらに見直す母の防波堤　枯　梢
人波に揉まれて生きる定期券　正　敏
女盛りの毬がはずんで波に乗る　三枝子
小波のたくらみ明日をどう替える　玉　恵
荒波をいくたび超えた夫婦船　諷云児
真実は波の向こうに見え隠れ　雄　々
荒波をのり越え母の住む港　軒太楼
波静かテトラポットの私語を聞く　多賀子
一石を投じ波紋に賭けてみる　裕
嵐呼ぶ波を知ってる浜育ち　春　日
佳
目高でも目高に似合う波を立て　弘　朗
大波小波夕陽が沈むわらべ唄　米　朝
波に乗り所得隠しを考える　素身郎
波風を立てぬ姑の丸い椅子　たず子
本物の波を知らない宝船　清　芳
人
泳げないから波打際の蟹になる　蛍
地
波を待つ静かな海のサーフィン　保　夫
天
波のある日はままならぬ水スマシ　佳　雲
軸
青春譜拾うあたりに波が欲し

輝く

狭間希久志選

輝いた過去を失うスキャンダル　保　夫
いぶし銀ぐらい輝く父の笛　雄　々
タダイマの声輝いた二重マル　重　人
ほんのりと輝き見せて喜寿に居る　あ　き
澄みきった瞳の輝きに信じきる　豊
輝きにいつわりがあるネオン街　白渓子
落ち込んで見ると輝く友ばかり　千　秀
じわじわと輝き増してくる女　狸　村
金銀に波が輝く月の瀬戸　悠　泉
禿げも亦魅力テカテカ輝いて　七面山
欲のない妻に輝く母子手帖　カズエ
元議員輝くバッジを恋しがり　奈美子
金屏風輝き添える四海波　森脇和子
入賞に輝く結果生む努力　綾　珠
輝ける優勝感涙頬ぬらす　軒太楼
口よりも輝くバッジがものを言い　ちかし
お迎えの母の姿に輝く目　一　郎
孤児の瞳に富士なお高く輝けり　智恵子
輝いた女にもある座りだこ　克　枝
目を入れたとたんにダルマ輝いた　八太朗
くたびれた靴に輝く棒グラフ　優
W選かがやく勝利に影の人　ふさ子

優勝に輝くナインの瞳が濡れる　義美
輝やいた顔定退の父に見る　洛酔
完走のテープ輝く汗の顔　一進
輝やける夜景貧しい灯もまじり　正敏
日々平和過ぎて輝く過去偲ぶ　与呂志
芸一筋叙勲輝く舞扇　市朗
輝きが幽玄を描く薪能　どんたく
ライバルの瞳の輝きは何だろう　芳子
輝ける叙勲内助が無言なり　砥代
孤児の目に輝く星が一つある　可住
全身が輝く表彰台の母子　里風
磨いても輝くことない父の椅子　サワ子
輝ける勲残して戦友は逝き　喜久夫
手鏡に輝く夢を盛る少女　三枝子
棚田植え老農汗の笑顔輝り　朴竜
佳
新風に輝く顔の紺スーツ　章久
輝いた栄誉賛える額の数ろ　亭
輝きはダイヤに負けぬ父の汗　緑良
輝ける瞳にやる気見せているちよ
恍惚に武勲輝く過去がある　本蔭棒
人
指切りの輝く瞳裏切れぬ　文平
地
除幕式輝く今日の未亡人　木魚
天
肉親が判り輝く孤児の顔　右近
軸
花道の輝き知らぬ父の指

筋書

中西　兼治郎　選

ハプニング何時も筋書狂わせる　輝月
押しつける筋書だから子が背き　京子
筋書のない台本の中で老い　久仁於
筋書が少し崩れた手内職　砥代
筋書を書き替えながら登る坂　文平
筋書が突然狂う日の恐怖　元江
筋書にない石ころについ転ぶ　博子
筋書が狂って爪に火をともし　可住
筋書通り男が握った導火線　寿美
筋書の終り静かに幕が降り　泰世
筋書を勝手に替える廻り椅子　ちよ
非の打ち所無い筋書に落し穴　七面山
あきたらぬ筋書又も朱を入れる　重人
筋書がはずれて未来図書きなおす　有一郎
筋書の通りにゃ這わぬ藤の蔓　虹汀
筋書に無いアドリブが活きている　芳子
筋書のないドラマです甲子園　昭治
生涯を賭けた筋書ペダル踏む　実男
筋書の裏に生きてる妻の知恵　市朗
年金で生活す筋書練りに練り　カズエ
成績が上って筋書かき替える　道子
筋書を書き替え書き替え生きて行く　右近
悪事への筋書汚銭身を穢す　朴竜
筋書はハッピーエンドとなる童話　三吉
初めから出来てた筋書騙し船　紀子
筋書の通りに動く蟻となり　どんたく
筋書を脇で支えている内助　代仕男
筋書が進まず達磨の目が乾く　高子
筋書がどこか狂った暮し向き　ふさ子
筋書の通りに女なっていき　しげお
筋書に乗れずに帰る故郷の空　知恵子
三浪が親の筋書ぐらつかせ　木魚
気がつけば夫婦の筋書ずれている　悦子
筋書をかえても理解出来る仲　美穂子
仕合せへドラマの筋書廻り道　明水
愛無限母に筋書などはない　寿恵子
素直さが筋書通り道を生き　与呂志
佳
弁慶の筋書うまく安宅抜け　やすお
筋書を大きく変える子が戻り　克枝
筋書のとおりにいかぬから野球　素身郎
激論の裏で筋書ほくそ笑み　本蔭棒
筋書のない人生の舟を漕ぐ　義美
人
原点で読む筋書へ寒くなる　雄々
地
自叙伝に筋書少し飾るペン　正敏
天
筋書を辿れば母の背に戻る　米朝
軸
筋書へ人生泣いたり笑ったり

柳界展望

集録・板尾岳人

★第一回国民文化祭
川柳大会ご案内
日・11月30日（日）13時
所・日本青年館（東京都新宿区霞ヶ丘一五）
国電信濃町又は千駄ヶ谷下車　①入選発表②入選作品紹介③授賞式④記念講演
〈川柳作品募集要項〉
作品＝未発表作品に限る
題と選者　各題二句
「最　初」　渡辺　蓮夫選
「父　」　尾藤　三柳選
「円　満」　野村　圭佑選
「人　形」　磯野いさむ選
「進　む」　西尾　栞選
応募料＝千円　郵便小為替を作品に同封のこと
応募方法＝二百字詰原稿用紙（B5判）又はタテ形便箋を使用し一枚に一題二句楷書で書き無記名。住所・雅号・本名・年齢・性別・職業・電話番号は応募用封筒に記入。
応募先・〒356埼玉県上福岡郵便局私書箱24号　文化庁国民文化祭川柳大会事務局
締切り　9月30日
賞・文部大臣奨励賞・東京都知事賞、国民文化川柳大会賞
主催・文化庁、東京都
国民文化祭文芸部門実行委員会

一貫清水
武蔵は里を
ふり返り
白岩文衛

白岩文衛さんの第二句碑が宮本武蔵生誕の地に近い峠に建った。
一貫清水は、昔、殿様が美味の水を賞して銭一貫を与えたことから出来た地名。

★第16回誌上全国川柳大会
課題「木」
選者＝斉藤大雄・渡辺蓮夫・脇屋川柳・須田尚美・去来川巨城・田口麦彦・関水華
句数・二句　新作未発表
用紙縦18cm、横35cmの白紙に一句一枚ごとに句を書き二句一組として、同一句を7組提出（句箋は無記名のこと、封筒に〒番号、住所、出句者名を明記）
7人選につき各組とも同一句のこと
投句料・千円

★川柳を考える日の会
初代川柳忌
日・9月23日（祝）京都駅正面9時集合
行先＝石山寺・義仲寺
会場＝義仲寺
宿題＝落人・ほとり
各3句
席題＝当日雑感　6句
会費三千円（昼食費とも）
主催・川柳新京都社

★61年度文化祭大会並びに第21回川柳文化賞授賞式
日・11月3日AM11時
所・日本橋公会堂
雑詠一句、文化祭参加作品として投句者、出席者共、締切り・10月20日
発表・川柳「路」新年号
投句先〒250小田原市鴨宮三七二―三
川柳路吟社誌上大会係

★川柳を考える日の会
初代川柳忌
日・9月23日（祝）京都駅正面9時集合
行先＝石山寺・義仲寺
会場＝義仲寺
宿題＝落人・ほとり
各3句
席題＝当日雑感　6句
会費三千円（昼食費とも）
主催・川柳新京都社

★61年度文化祭大会並びに第21回川柳文化賞授賞式
日・11月3日AM11時
所・日本橋公会堂
雑詠一句、文化祭参加作品として投句者、出席者共、通じて一句（旧作可）
宿題（第一部）出席者
久しぶり・火山・問う・乗る・造花・予防・それから
席題3題及び特別課題あり
（第二部）投句者
旅　先　箱守　五柳選
焦げる　内山　舞将選
地　球　千島　一平選
客　島崎　咲子選
会　長　須田　尚美選
反　対　加茂　如水選
矢　面　佐藤　正紘選
各題3句・各題毎にハガキ大別紙のこと
投句料　千円
締切り9月30日
賞・合点30位まで呈
〒350　川越市南台三丁目二―三八　堀口北斗方・文化祭川柳大会宛
主催＝川柳人協会

★七谷虹棧橋句集
噴煙叢書第一集
七谷虹棧橋氏は噴煙吟社同人で吟社の発展の功労者であり吟社の事業の一環として、虹棧橋句集を噴煙叢書第一集として発行された。文庫判、一〇五頁、五百円
著者住所〒862熊本市京塚本町53—12
作品抄
太陽を掴もうとして藪の草／良妻を持つ倖せは茶がうまい／地卵はやはり身につく穀の色

▽お便り及び消息△
■4月10日より神戸に事務所を持つ編集工房　円（えん）の発足です。よきスタッフも集まってくれました。清新な意欲を注いでまいりたいと存じております。
〒651神戸市中央区熊内町7—4—15メゾン橋本301号
電078—二三一—五一三七
（時実　新子）
■長い間温かい御交誼を賜り、川柳を通じて多くの皆様に支えられながら短かくとも楽しい生活でした事を感謝しております。
（白岩美智子）
■雨の大原です。明日は武蔵になろうと思っています
（林　荒介）
■一昨年の中国と亡文衛氏を偲びつつ武蔵のくにに来て居ます。
（樫谷　寿馬）
■信州の山田温泉、幻想的な藤井荘で一同大よろこびです。
（西尾　栞）
■中国へは行きたいと思えども……余りに遠し…せめて一夜新しいサンダルはいて、きままな旅を……
（三井　酔夢）
■角野かず子さん（同人）のご長男、善明氏（横浜市在住）が去る四月二十一日読売新聞社の小型ジェット機墜落事故のため、死亡されました。合掌。
■潰瘍のため胃の3/4を切取られました。胃がなくなっても生きていられる人が多くいることに驚いています
大山と金氏
（鬼遊報）

新同人紹介

山本玉恵
—耕花・〆女・紫香推薦

釣遊光
—水客・客遊子・輝月・とし推薦

『日本川柳秀句集』刊行のお知らせ

今回の秀句集第三集は、従来の個人応募句に加えて、全国各地柳社からの推薦句、日本川柳人名鑑に収められた句から、それぞれ三名ずつ選者によって選出された秀句百句を、「日本川柳秀句集第三集」として刊行します。
また、秀句百句の候補になった約三千句の句集を秀句集とは別に「日本川柳推薦句集」として刊行します。

発　行　昭和62年2月予定
締　切　昭和61年9月末日
参加料　個人参加料三千円（秀句集・推薦句集各一冊呈）
柳社参加料二千円（秀句集のみ十冊呈）
応募作品　昭和58年12月以降の作品、既発表未発表を問わず
選　者　個人応募句＝渡辺蓮夫・西尾栞・磯野いさむ。柳社推薦句＝山田良行・神田仙之助・田中好啓。川柳名鑑句＝奥田白虎・橘高薫風・永田帆船・広瀬反省。

◇参加用紙ご入用の方は左記へ
〒542　大阪市南区谷町7—1—39　新谷町第二ビル
日本川柳協会　事業部

同居あれこれ

栗谷春子

この春やっとのことで大阪へ転勤となり帰って来た長男一家と同居、十数年間の二人ぐらしに終止符を打つことになった。

のんびりした大阪弁と気ままな放題に暮してきた私達の周囲が俄然めまぐるしい江戸っ子に取り囲まれて何とも居心地がいいとは言えなくなってしまった。

小学四年と二年の孫は、私達の話すことばがよく解らぬらしくひと言で通じたことはない。向うからの言葉は、とても早口でなじめないアクセント、それに関東特有のいつも討論しているようなひびき、こちらの心証を害することしきりである。

お互いにシラーッとした空気で、まいったまいった、という感じで、これから先、一家族として交わって行くにはかなりの努力と根気が――と思った。

或る日のこと、この子達のお父さんの小さい頃のエピソードを二つ三つ話してやった。

思いがけぬ反響があって子供達は目を輝かせて寄ってくる。

「ネ、ネ、それから?」「もっと話して!」。

次の日は戦争の頃の耐乏生活の話をするとこれまた異常な興味を示して来た。又目を輝かせて。

けれどそれは今の自分達の生活に優越を感じているようにも思われた。

そのうちに一番上の中学二年になる美穂が私の思いついたままメモした川柳の出来たてのようなのを持ち出して、声を出して読んだりしてからかう。

少しは興味があるのか新聞の川柳欄も先に見て教えてくれたりする。意味わかる?と聞いても「わかんなーい。」である。

この間国語の教科書にも川柳が載っているというので早速見せてもらった。

芭蕉翁ぼちゃんと言うと立ちとまり
清盛の医者は裸で脈をとり
これ小判たった一晩いてくれろ
ねていてもうちわは動く親子かな
浪人は長いものから食いはじめ
本降りになって出て行く雨やどり
逃げしなにおぼえていろは負けた奴
武蔵坊とかく支度に手間がとれ

この頃俳句でも短歌でも習うとすぐ持ってきては作者の名や句の意味をテストするのでカッコいいところを見せるのに私も油断しては居れない。

そんなこんなで私の胸にも明るい兆しが見えはじめた思いである。

例年になく大きな実をつけた今年の無花果をうんと背のびしてちぎってきては、この子達のおやつにそえておく。無花果も二人から七人にふくれ上ったこの家のことを、きっと見て知っているのかもしれないなどと思う。

本社　八月句会

八月七日（木）　午後六時
メンズファッションセンター

ぶり返した暑さの中、遠く九州から川柳塔唐津支部の仁部四郎氏はじめ、大和番傘の古川一高氏、川柳文学から神前朋義、神前阿字友田茶の子、清水斗升、一階八斗酥の諸氏が大挙参加、八十六名の盛会となった。

おはなしは永年、小学校教育に携わってこられた河井庸佑氏が、いま問題になっているいじめの問題について、その背景と対応を語られた。

校内暴力、家庭内暴力は三年位前をピークとして減っているが、かわりに登場したのがいじめと、性的非行、登校拒否。陰湿化、悪質化が最近の特徴で、いわば見える非行から見えない非行へ移ってきたという。

いじめられる子どもは、何らかのサインを出しているのだが、それをつかむことが、なかなかむつかしい。対応策としては、子どもへの心くばり、目くばりが大事、子どもの日常をよく観察する以外にないが、基本的にはやはり家庭でのしつけということになるようだ。

呼名賞は北勝美、松原寿子、上田佳秋の三氏。

今月の月間賞は谷垣史好氏が獲得。（S）
（進行—柳宏子）
（受付—はつ絵・いわゑ）
（記録—射月芳・山久・隆二）

出席者—柳影・寿馬・笛生・諷云児・杜的佳秋・紀雄・紫香・一郎・はつ絵・いわゑ・寿美・武庫坊・年代・萬的・雀踊子・英子・春蘭・照子・作二郎・寿美子・千代三・みつ子・花村・重人・柳伸・〆女・朋義・阿字・茶の子・白洋・斗升・水客・白渓子・悦郎・蕉露・勝美・白峰・公一・郁栄・隆二・美智子・正坊・凡九郎・射月芳・狸村・金太・章久・鬼遊・愛論・喜風・三十四・柳宏子・三男・一高・幸・小路・泰子・文秋・四郎・規不風・山久・勝晴・英壬子・白兎・藤子・久子・史好・ただし・美代子・楓楽・冬葉・敏庸佑・あいき・赤木和子・智子・節子・度・吸江・八斗酥・東雲・岳人・頂留子・寿子・一二三

席題「昼寝」　仁部四郎選

花火大会へ昼寝して置く花むしろ　勝美

昼寝でも一人前の寝言言う　武庫坊

いたずらっ子も天使の顔になる昼寝　藤子

昼寝から覚めると孫が消えている　久子

隣への中元昼寝のじゃまをする　敏

連ドラと昼寝を終えた市場籠・人妻のひるね盗み見してるネコ　寿美

昼寝などしてはおれない陽が沈む　金太

昼寝から覚め強盗のニュースなり　悦郎

山小屋の昼寝で小人の夢を見た　はつ絵

病む母の昼寝見ている千羽鶴　萬的

トラックの下で昼寝のスニーカー　正坊

母ちゃんのうちわへ昼寝誘われる　みつ子

昼寝するプランも持って里帰り　雀踊子

お昼寝をブザーで起す洗濯機　白渓子

昼寝より覚めて今度は白昼夢　あいき

闘病の日課の一つ昼寝する　みつ子

徹マンをした日は昼寝などしない　敏

老いてまだ昼寝嫌いな貧乏性　三男

昼寝でもするかお金が借りられた　勝美

昼寝する酒呑童子は襲われる　重人

昼寝する花の鼓動を聞きながら　斗升

昼寝から起きて米屋に電話する　道子

昼寝でも祖母は嫌がる北枕　いわゑ

先生と呼ばれて昼寝起きてくる　杜的

一畳の城で昼寝の老いの春　水客

ひる寝くらいは気を使わずになあ妻よ　狸村

ロボットに真似ができるか昼寝する　寿馬

たとえばの話を昼寝思い出し　はつ絵

昼寝が良いとテレビの医者が言う　水客

昼寝する男の背なに隙がある　杜的

昼寝から覚めて男の腹をきめ　智子

やぶ入りの話に遠慮もない昼寝　一高
夫にはすまぬ昼寝のすまぬ夢　楓楽
下手な芝居が昼寝の背なをすべり落つ　寿子
板一枚の幅で大工が昼寝する　笛生
ひる寝している間に逆転されている　寿子
楽しみは昼寝と書いたアンケート　明義
熟睡の昼寝きっちり夢も見る　白渓子
有給の休暇に昼寝押し込める　四郎

席題「ふえる」　古川一高選

倒産がふえているのに保守が勝ち　敏
くじ付いて暑中見舞がふえました　和子
老化した証拠か口数ふえた妻　萬的
化粧品がふえて男も美しい　いわゑ
カラオケが好きでボトルの数がふえ　照子
友達が増えたふえたと弾む毬　智子
懐の痛む話がふえてくる　章久
たんぽぽのジョークで仲間ふえてゆく　はつ絵
野の花を野に置きゆめがふえてゆく　はつ絵
小賢しく生きてふやしている小金　幸
気を病んでまたふやしてる糖衣錠　幸
暑中お見舞ビールの空瓶だけたまる　笛生
余計なもの許り増えてる更年期　柳宏子
孫一人ふえてわが家も世間並み　朋義
メダカが動くとメダカの影がふえ　雀踊子
朝顔に明日も喜びふえそうな　みつ子
ブティックを三軒買うた着道楽　柳伸
まん中をくり抜いてゆく輪がふえる　白兎
押し入れに母さんの鬱ふえつづけ　藤子
花一輪のテーブルに寄ってくる　白兎
一本の傘にライバルふえてくる　寿子
女ひとり人形ばかりふえている　いわゑ
歯が抜けてふえる貧しいことばかり　郁栄
慶びがふえると涙もろくなる　朋義
田舎へ帰るとマンション増えていた　金太
肩書がふえると味方の矢がささる　雀踊子
その先を言えば悲しみ増してくる　〆女
哀しみが次々ふえてくるこよみ　美智子
日航機事故の悲しい記事がふえる夏　作二郎
収入がふえると美女の夢ばかり　度
受け皿になさけがひとつずつふえる　寿子
妥協案ばかりが増えて秋を待つ　水客
嘘が続いて心の借がふえてくる　幸
腹の立つ話がふえて黙ってる　水客
自分史に消せぬ汚れが増えてくる　楓楽
世の中が平和で占い師がふえる　英子
蟬しぐれ祭りの好きな子がふえる　作二郎
持ち金がかならずふえる本を買う　小路
がらくたがふえてぬかみそ臭くなる　久子
一人がうなずくみんなうなずいている　白兎
新人類との間にふえる疎外感　一高

兼題「雑音」　西出楓楽選

雑音が当分続く夏休み　妻子
アンテナに雑音かかる異動月　新造
外野にいて雑音に慣らされる　芳子
そこそこに雑音があり生きられる　杜的
貯える趣味で雑音気にしない　愛論
雑音が聞こえはじめた負け戦さ　史好
雑音の中に鋭い刺がある　雀踊子
煩悩が雑音までも聞きたがり　英子
雑音をみな閉じこめて雪が降る　吸江
雑音は気にせぬたちと太い眉　三十四
雑音を入れて話題をかえさせる　白渓子
雑音を音の高さで裁く罪　斗升
雑音を避ければ孤独忍び寄る　白峰
頂点に立ち雑音に蓋をする　和子
雑音をあしらい主流派動じない　佳秋
罪びとの胸に雑音なり止まず　寿子
雑音が多い葬列の尻尾　雀踊子
引退の耳雑音が撫でに来る　どんたく
雑音の中でにくまれ口をきく　郁栄
消化せぬ雑音ひとつ胃に溜る　三男
雑音に馴れて女が強くなる　喜風
ささやきが雑音となり四面楚歌　吸江
ひたむきに雑音のなかに埋もれたし　水客

近畿文字放送作品募集

題「虫」　森中恵美子

3句　締切　9月10日

ハガキに明記の上、左記へご投句下さい

〒540　大阪市東区谷町2丁目36
大手前ウサミビル3階
近畿文字放送　川柳係

雑音の聞こえぬ距離に子の世帯　一郎
雑音が耳に入らぬから怖い　金太
雑音もベール着てくる回り椅子　英子
雑音へおりおり傾く鬼の耳　寿
ヘッドホーンから雑音が洩れてくる　白洋
雑音を余白に溜めて聞き流す　寿美子
川も汚れて雑音に馴らされる　一高
雑音の中には好きな音もある　いわゑ
ぜいたくな雑音蟬のシンフォニー　正坊
雑音は明石家さんま喋ってる　史好
雑音に遠く梅を干している　節子
蓮の花あたりで雑音消えていく　度
雑音の公約数が割り切れず　ただし
大阪のくらし雑音生きている　作二郎
雑音を集めてコント書いている　武庫坊
よく匂う香水雑音持って来る　重人
逆風の雑音ばかり乗せてくる　楓楽

兼題「わがまま」　江口度選

入院をして我が儘な父が知れ　耕花
わがままなお札で財布嫌いです　芳子
わがままな胡瓜選んで漬けてます　芳子
わがままな娘とは見えない角隠し　久子
わがままでいつも白旗持っている　武庫坊
わがままな子がひとりぼっちで遊んでる　紫香
一生をわがまま通す父の地図　茶の子
わがままを許さず太陽照りつける　柳伸
めす猫の髭我がままを押し通す　武庫坊
わがままな女背中に隙がある　千代三
わがままなベレーが描くと黒いバラ　勝美
わがままで飛び出したのが家を建て　美智子
わがままな釘を職人うまく打ち　庸佑
わがままは通ると読んだ甘い親　正坊
わがままを言わぬ夫が気にかかり　柳宏子
わがままな蔓は許さぬ花鋏　英子
わがままを泳がせ手綱は離さない　寿馬
平和を祈るふとわがままかと思う　水客
捨て石になるわがままは取っておく　幸
わがままな女消しゴムばかり買う　柳宏子
我がままの鼻折れてから自閉症　久子
わがままな子が一番に馳けつける　柳伸
王様の気まま美人を遠ざける　泰子
他人ならわがまま笑って見ています　重人
わがままな男がシャツを替えている　一高
青竹を踏んでわがまま言いません　幸
わがままを言うとき割れる皿がある　白兎
思うこと少しありわがままを言う　白洋
少し美人で少しわがまま許される　作二郎
わがままな蛍夜店で売っている　佳秋
わがままな老父へ麻酔がきいてくる　水客
仏にも鬼にもわがまま許されぬ　喜風
絵馬堂のわがまま神の耳を抜け　久子
今日ばかりカラスは白で通させず　喜風
信号が長くて腹を立てている　隆二
わがままな男の髭を剃っている　作二郎
わがままが言えて夏風邪ひいている　阿字
わがままな木瓜ぽっつりと夏に咲く　美智子
わがままを通した針がさびている

第33回 八尾市文化祭
市民川柳大会

とき 昭和61年10月10日(祝)正午開場
ところ 八尾市商工会議所3階大ホール
近鉄大阪線八尾駅下車南300m
八尾市役所向い側

題と選者

挨拶　墨作二郎選
正しい　野村太茂津選
眉　平山繁夫選
屋根　森中恵美子選
階段　室田千尋選
親切　西尾栞選

席題当日一題

各題2句　締切午後1時30分
投句だけの方は郵券500円同封、9月25日必着左記へ
〒581(八尾局私書箱第9号)
八尾市清水町1丁目1－6
八尾市立公民館内川柳係

会費 一、○○○円(作品集・鉢植花)
懇親会 三、○○○円
主催　八尾市・八尾市教育委員会
八尾市立公民館
後援　八尾菜の花句会

はぐれ鳩お前はきっとわがままだ　度

兼題「鐘」　塩満　敏選

鐘太鼓真夏を狂う甲子園　市雄
人恋しチャペルの鐘の鳴る波止場　洋敏
早鐘が車券の命あと一周　東雲
観光の目玉はここで鐘を撞き　史好
天王寺お盆が近い鐘の音　智子
晩鐘にカラスお山の子へ急ぐ　あいき
消防車三台続く鐘の音　茶の子
十円で冥土へ行ける鐘をつく　杜的
青い眼に鐘を撞かせているガイド　千代三
亀の池鐘を聞いてた亀の首　萬的
釣り鐘は売られたそうな道成寺　英子
衆生済度国宝の鐘売られ　三十四
鐘融かしてバカな戦争ありました　白洋
御巣鷹の空鎮魂の鐘ひびく　みつ子
韻韻と鐘が重たい原爆忌　重人
家計簿の隅で半鐘鳴っている　智子
琴線に触れて鐘の音鳴りやまず　和子
核汚染神の警鐘きこえぬか　楓楽
半鐘が鳴ると飛出す癖がある　武庫坊
青い地球に誰がための鐘なりつづけ　藤子
逢いにゆく祇園精舎の鐘とゆく　規不風
鐘の音が哲学を持つ訳でなし　水客
ウェディングベル幸せだけと限らない　みつ子
鐘三つ鳴らしたところで目がさめた　柳宏子
鐘連打ここは町内のど自慢　和子
古都の鐘しみじみと聴く鱈料理　芳子
長崎を転がり落ちる鐘の音　金太
朝霧の湖面を渡る三井の鐘　庸佑
晩鐘が今日の倖せ包み込む　白峰
寺の鐘打つのに楽譜などいらぬ　白兎
奈良の鐘みな国宝の音で鳴り　笛生
河童忌に鐘をつくのは誰だろう　作二郎
長崎おくんち鐘が異国の音で鳴る　一二三
鐘をつくゆっくりゆっくり陽が沈む　度
八月の鐘は土からわいてでる　藤子
古都の鐘四季には四季の音がある　雀踊子
たそがれはもっとやさしい奈良の鐘　白洋
大志抱けと時計台の鐘が鳴る　和子
ヒロシマの子がヒロシマの鐘をつく　作二郎
第九条危い警鐘打ちならす　敏

兼題「宇宙」　高杉鬼遊選

瞳から宇宙が見える愛もある　斗升
やる事が山とあろうに宇宙船　柳影
宇宙旅行予約に少し無理な歳　一郎
宇宙時代漫画の方が先を越し　吸江
怖い知恵宇宙に妙なものが飛び　重人
少年と宇宙を結ぶ夏の夜　寿馬
宇宙論野暮な男が聞きたがる　郁栄
悪人の電波がもつれ合う宇宙　小路
宇宙からみる人間の阿呆らしさ　勝美
通天閣をきっと気に入る宇宙人　史好
人間の知恵が宇寅を狭くする　武庫坊
宇宙相手に禅問答をくりかえす　幸
入口も無いが出口もない宇宙　花村
宇宙から帰りみそ汁欲しくなる　重人
宇宙旅行へ梅干し入りのにぎり飯　和子
満員車足組んでいる宇宙人　射月芳
宇宙にも人喰い蜘蛛が居て困る　英壬子
宇宙にもアンテナはある逃避行　泰子
星一つ飛ぶと宇寅は美しい　紫香
宇宙からむかし使者ありかぐや姫　緑良
宇宙みやげは梅田地下でも売ってない　英子
ベランダで宇宙から来た使者と逢う　はつ絵
宇宙から浮世の苦労見て笑い　愛論
天女住む宇宙は青い風が吹く　笛生
観音の千手の先にある宇宙　幸
釈尊の掌にある大宇宙　武庫坊
目を閉じて漂う恋の小宇宙　和子
「ET」を観た少年の瞳が光る　芳子
灸の痕あるかも知れぬ宇宙服　美代子
恋人よ宇宙の果てまで逃げようか　敏
噴水の虹が宇宙を深くする　作二郎
ワイングラス二あつあればいい宇宙　耕花
仏壇の奥から見えて来る宇宙　岳人
宿酔只今宇宙遊泳中　白兎
どっしりと尻より大きなのが宇宙　花村
宇宙塵火宅の人へ降りそそぐ　水客
宇寅広いのにまちがい電話かかってくる　作二郎
曼陀羅の宇宙で鼠が猫を追う　斗升
宇宙から暑中見舞のくるころだ　妻子
病牀六尺そんな宇宙を思いやる　史好
宇宙から明るく見えるのは銀座　鬼遊

（清記・泰子）

老地図壇

締切毎月25日。必ず原稿用紙使用のこと。
作品は雅号も含めて20字まで。
担当・清水健司

東大阪川柳同好会　斉藤三十四報

青信号で渡り切れない我が足よ　綾珠
青空の下では嘘は言われない　曲ん手
懺悔して仰いだ空は青かった
生活の疲れは見せぬ青畳　右近
青い実を食べたがってる男たち　弧舟
ウインクの青に横断急がされ　金太
いらいらを沈める広い海の青　三十四
美しい青い地球にある歪み　文秋
孫と飲むラムネの色は青かった　公一
青空にブランコが揺れ老いが揺れ　春蘭
青い空心の窓も開け放し　晋吾
口にする正義青いなといわれ　勝美
世界平和へ青信号が途切れ勝ち　頂留子
澄みきった河石焼きの鮎の味　柳宏子
鮎の恋堰のりこえて遭いにゆく　喜風
鮎解禁長い長い夜が明ける　度
ボーナスの帰り待ってる鮎の膳　恒明
気まぐれに板塀覗いて叱られる　美子
妖精の眠る森から青くなる　愛論
　　湖風

打吹川柳会　奥谷弘朗報

飽食のハトが平和に群れている　美智子
枕には六法全書が丁度いい　とみお
口重い方の発言信じとき　たつみ
手料理の味に家風がにじみ出る　柳風
信玄袋の母が尋ねる九段坂　柴映
立きゆうで肩を叩いてまた明日　巡歩
宅急便ぬくい香りを詰めてくる　亮二
政局がどう変わろうと老いの身に　佳女
本だけは読んでも汲んでも未だ残り　梅朗
とに角も我が手料理で子が育ち　康子
歳月がしこり流して握手させ　節子
損得を抜きで福祉に身を献げ　英治
子が出来て許すしかない父母でした　高代
酔いが出てやっと迫力出す男　孝美
叱る役父の立場のつらいこと　吉朗
苦労坂耐えて望みの花咲かせ　文子
明日もまた無事を信じて米を研ぐ　みほの
努力した証拠はっきり足の跡　雄々
どう見ても口と腹とが違いそう　弘朗

ささやま茶の実合同句会　脇田米朝報

お地蔵さんに祈りが一つ熟れている　可住
祖母祈る通りに孫も手を合わせ　笑女
家中の祈り集めた岩田帯　こつる
祈る掌の中で家族が生きている　静子
捨て切れぬ言葉が隙間から抜ける　照子
一言を添えて年輪の消す波紋　テル
言葉には出さずのみ込む愚痴の数　正子
重箱で届いた里の味自慢　越山
おふくろの愛がこぼれる故郷の味　米朝
年月が家族支える味を生む　静子
花束を浮かべて海は泣きじゃくる　さかえ

曲折を流して浮いた夫婦舟　エキオ
名案が浮かび即答走るペン　久恵
賢さが抜けず座禅も宙に浮く　法斉
顔色も変えずジョーカー温める　文平
その先は聞かず顔色読んで置く　美代子
顔色のよさへ見舞の客が減り　美智子
七人の敵へ呑み込む顔の色　和子
朝露に稲の言葉を聞いている　可住

にた川柳会　西村早苗報

死神が許してくれた快復期　夢酔
朝顔を今年も妻が植えている　宗光
痩せなけりゃ限界体重ピンとはね　晴月
風鈴が初夏を呼んでる青すだれ　孝華
今日も又カラスが鳴いて噂する　雪子
誰が何度行っても島は返さない　亀甲
空威張り男の真似をした男　幸一
遠景に美しいもの花で置く　裕
噂ひとつ女はきっと身構える　寿美子
雑兵も一度は挑んだ椅子があり　花子
茶飲み友だけとは誰も見てくれず　愚童
晩酌の父の肴になってやる　雀躍子
引き潮へ女の乗せる涙壺　多賀子
毒舌をさらりと受けて座を丸め　弘朗
石段の数かぞえてるジャンケンポン　〆女
無料でも二の矢おそれる主婦の勘　雄々
しじ舟つないだ杭が抜けかかり　登美也
可愛らしい顔で吹き矢をぷっと吹く　景子
週末の誘いを風邪として拒み　早苗

西宮北口川柳会　奥田みつ子報

飼い主には利口ですぐに負ける犬　萬的
嫁はんが少し利口で休ませず　鬼遊

逆境へ負けず磨いた芸の道　笑女
愛情が少し足りない白湯加減　年代
エリートが酸素不足をうったえる　いわゑ
利口ぶる女が忘れたコンパクト　江美
役不足らしいのが居て揉めている　よ志子
主義もなく鍋を磨いてきた月日　はつ絵
本当の利口はあまり喋らない　一郎
メルヘンが不足している子供達　よし津
花嫁の隣に立たせ祖母を撮る　てる
五百円で時計売ってる新世界　しげお
床柱ピカピカ掛軸の虎がほえそうな　千世子
より添うて歩けば楽し茨道　柳影
寝不足の目にくちなしが白すぎる　礼子
なめらかに流れる水が怖くなる　美智子
利口でもないのに塾をやっている　郁栄
利口ぶる彼を素直に信じよう　保歳
どんぐりころころ故郷恋しい散歩道　米朝
何が不足なのか眼の無いだるま　伊三郎
雨だれのつぶやきを聞きレース編む　きよ子
控え目で邪魔にならないように生き　好江
歩いても立っても絵になる玉三郎　正坊
千体の仏で利口もらいたい　紫春
無形国宝磨きぬかれた芸の冴え　隆子
ライバルを意識してから歩が乱れ　園歩
逆らわぬことが利口と悟り切る　白渓子
赤色が不足で夢の絵が描けず　武庫坊
利口だと自分を信じている鸚鵡　芳子
皿磨くノラの勇気がないままに　光代
花の名を一つ覚えた散歩道　かすみ
老いの汗日の出見ながら歩く道　(伊)春子
隠居部屋磨きのかかる床柱　陽露子

落日を背にして歩く島の道　颯云児
喜寿金婚明日を磨く虹が立つ　〆女
靴磨く少年の眼に青い空　杜的
歩くことめっきりへった免許証　静子
魂を忘れぬように鏡拭く　幽香
子へ譲る鍵磨いても磨いても　廉
居留守する僕に電話がよくかかり　半歩
利口の手から洩れる水には味がない　正一
磨いたら光るときめてはいけまへん　凡九郎
逃げ道を捜して女化粧する　歌子
利口より可愛い女がいいという　暢子
愛枯れて女は素顔とり戻す　伊升
日盛りの町でかつての妻と会い　水声
職退いてひたすら磨く古鏡　照子
磨いた娘鬼遠慮せずくれと言う　散歩
人だかり利口な顔は見当たらぬ　眉水
人がみな利口に見える落ち目の日　みち子
俺に似て利口な奴よと目を細め　房子
歩かねば昨日の僕が追ってくる　みつ子
人気あるうちにスターは離婚する　善太郎
雑談の膝が崩せぬ借りがあり　曲ん手
天然の涼を網戸がそっとくれ　文夫
三日目の雨にもあじさい媚びつづけ　千秀
盃の底にほされぬ愚痴があり　俊子
偉いさんやったんですよと言う弔電　百合子
もう他人露骨に値切る手切れ金　良征
長者箸配った人は寝たきりで　枯梢
幼い日夢みた通り運転手　まさお
変わり映えしない診断今日も終え　ノブ
お小言が僕に廻った痴話喧嘩　一進
汗かきが白いハンカチなどを持ち　求芽

佳句地10選（前月号から）

辻　白渓子　選

罰金をとる気白バイやさし過ぎ　しげお
定価表のぞいて夫が背を向ける　昭二
道楽をしただけ味に手きびしい　柳影
負け癖を水平線に嗤われる　雄々
連休に都会のごみも異動する　波留吉
店員が美人で派手目の柄を買う　正坊
黙認のかたちで敬遠されている　雀踊子
屋台店通に気に入る味で売り　文秋
守り札つけて捨て児がすやすやと　登志代
いつからか妻は喪服も揃えてい　白李

マンションで漬物石が捨て切れぬ　文平
思い出の嵩より多いやり残し　春江
売れっ子は妻の不倫を口にせず　勝美
参観日母のセンスを気にし出し　(栗)春子
夏は雲ばかり膨れて絵の具不足する　作二郎
逆境のわたしに降りる駅がない　天樹
湖の岸辺に落ちていた詩集　紫香

川柳サークル卯の花　辻　白渓子報

卵酒飲んでほんのり酔うている　松川芳子
脇役の誇りに白い茹で卵　静江
無精卵抱いて女傑の淋しい夜　佐代子
双子かなあたのしみに割る大卵　享子
ピノキオの世界が好きなゆでたまご　正一
掌の卵よお前はいつかえる　眉水

おつかいの卵はそっと両の掌で　高子
あの時は不手際だったプロポーズ　明代
不手際をかばい合ってる嫁姑　伊三郎
不手際を演じ続けるピエロの瞳　河瀬芳子
ロボットの不手際責は人が負い　里子
不手際で花ムコ未だ現れず　多賀子
不手際が思いもよらぬ事になり　よ志子
不手際をすました顔でカバーする　千枝子
不手際はなかったようなとぼけよう　盛雄
不手際を許してくれるうまい酒　諷云児
不手際な女を庇うことになる　年代
不手際へ二の矢はちゃんと持っている　杜的
ライバルの不手際胸がすっとする　俊作
渋滞へ自転車スイスイ裏通り　求芽
自転車で廻る名医でしたしまれ　〆女

甘栗　正本水客

去年から同居している孫娘のUが、じいちゃん食べよと会社で貰った甘栗の袋をひろげた。ややしばし自然の法則に従って最後の一個が残った。俗に言うエンリョのカタマリというやつである。どうするかと見ているとサッと一個を手に取って皮をむき始めた。さすが現代子とほほえましく見ていると、むき終った一個を私の前に置いて、お休みなさいと二階へ上って行った。

自転車で行く約束が雨になり　スミ子
増えて来て自転車置場遠くなり　種子
自転車で路地の奥迄荷が届き　春風
自転車が一番似合う駐在さん　康子
夕焼けにペダルきしんで母帰る　房子
駅前に自転車捨てたように置き　一郎
少年が力むペダルに風薫る　春蘭
自転車で行けるパートに決めました　とおる
客の荷を載せ自転車を押しながら　紫香
洗いもの初夏の暑さをたたみ込む　実男
人嫌いその場かぎりの風といる　曲ん手
父の日もかみなり程の自信なし　逸
若いから離婚の判もためらわず　暢子
回数券友のお金をひっこませ　花代子
有りふれた土産を選っている根気　白渓子
待ち疲れ傘の雫も絵にならず　秀男
死にたいと言って女は気を晴らす　鼓城
夜店並ぶ螢に闇が戻らない　和友
インク枯れている河童忌の葱坊主　作二郎
掌の中の螢を放しさみしくなる　恵美子
悠々自適机の上に何もなし　水客
六月の雨くちなしは嫁にゆく　鬼遊

川柳ねやがわ　高田博泉報

活躍は惜しい惜しいの運動会　志余悟
田植機の音に歳時記無視される　良三
退屈へ悪友一本提げて来る　広司
日記帖二月過ぎるとメモになり　勇夫
ライオンも昼寝しかないオリの中　さやか
君と行く小径の幅のこころよさ　菜月
活躍は今後に期待されただけ　白渓子
昼の月力試しを致さんか　曲ん手

五百羅漢なかに退屈そうな顔　創吾
梅漬けの講釈ほどに色づかぬ　松庄
知恵の輪はやさしく解けぬ方がよい　杜的
看護婦さん美しく見え退院し　弘生
赤福で昼を済ませた伊勢の旅　勝美
名物へ期待しすぎた味めぐり　藍子
退屈で老妻にちょっかい出してみる　速水
評判の良い子が三面記事にのり　君子
女房の活躍ウツのはじめなり　春子
どや街の評判のよい店大盛りで　とし
たかがうどんを名物にする隠し味　章
評判の医者で半日待たされる　まさお
主義主張貫くための金が要る　あやめ
名物の蟹が少しも出て来ない　かすみ
活躍を始めて便り減った友　光子
志納金仏が使う金でなし　シマ子
主義主張知らないままに鮭上る　静江
スターにも有った退屈忙中閑　一途
活躍を神と仏が見て在わす　晴風
活躍のその後は手抜き許されぬ　冬葉
ウインクのダルマが活躍待っている　てまり
退屈な人に近づく鳩の群　淳朗
活躍をした部下妻よりも可愛い　英壬子
牙とれた虎へ女近寄らぬ　博泉
名物と聞いてもう一度食べに来る　亜成
名物が先に届いて母帰る　亜也子
たくましい草に似合わぬ小さい花　頂留子
自分の舌で評判をたしかめる　天笑
花時計禁煙タイム欲しくなる　度
活躍をしそうな婿を探してる　礫
旅の宿先ず名物に箸をつけ　右近

スナックのママに名物置いていに　亜鈍
ばあちゃんの活躍孫が来る知らせ　敬山
退屈な男が爪も切らないで　鼓城
退屈へ退屈なのがこんにちわ　小路
猫の手も借りたい農家の猫あくび　あいき
ダイアナ妃の評判鏡のわたし見る　眉水
前売も売切れましたという評判　柳宏子
評判の美人に笑顔向けられる　紫香
退屈を持て余してる仏さま　薫風

尼崎尾浜川柳会　**春城武庫坊報**

懐しい菩提寺の鐘聞いて寝る　貞吉
鐘が鳴る花嫁がいる鳩がいる　昌子
鐘の音が心をゆする故郷の朝　いわお
梵鐘は鳴らず歴史を語るだけ　武庫坊
職退いて電話の数が急に減り　弘治
元気かと電話の母の温い声　礼子
条件の一つうしろは振りむかぬ　牧郎
条件は呑むが乾杯などしない　歌子
条件が整い過ぎて気にかかる　文人
一人娘を条件つきで嫁に出し　すみ
傘借りて帰る途中で晴れあがり　中沢
出戻りの姉から借りる首飾り　よしつぐ
出稼ぎを終えて土産に弾む足　十四郎
里帰り予備の袋を持って行く　夢之助
投函をたのまれ帰りに思いつく　江美
日本語も話せぬ孫に英単語　美代
極道をした話からはじめ出し　紫香

尼崎いくしま、尾浜
五周年記念合同句会　**春城年代報**

種牛は今日もいそいそ牛舎出る　よしつぐ
紫を愛しつづけた紙人形　〆女

蒔く種は子に任せよう母の土　弘治
葉桜へ北から届く雪便り　すみ
和の一字大事に守った嫁姑　玉子
天を突く巨木も元は粒の種　いわお
紫の部屋で女になる人形　良征
和解から曲りくねった謎が解け　十四郎
北に棲み誰も恨まぬ雪おろし　鬼遊
まん中に孫座らせている平和　定人
亡母の絵の中でいつもの市が立つ　静夢
種なし西瓜の種を作っている男　幸子
北風に子蛸が踊る島の軒　かね子
アバシリの務所見て北の旅終る　文夫
枇杷の木にびわの実がなる市場道　みつ子
桜前線やっと届いた北の果て　貞子
梅干の種が見ている共白髪　晴子
涅槃図のシャカは静かに北枕　ときお
北で飲みミナミで遊ぶ社用族　みち子
北へ行く男に荷物何もない　紫香
北洋漁業敗戦国ダヨ日本は　凡九郎
北風は知らぬ茶室の飾り壺　夢之助
市役所の無情な時計昼を指す　佳秋
補聴器を外すと和んだ顔になる　武庫坊
北風小僧がすっかり見てた待ちぼうけ　年代
北向きの墓の背中に陽が当り　伊三郎
和やかになろうと思う鬼あざみ　礼子
どの部屋も紫活けて寡婦の城　一郎
ぬくもりを手にのせてみる蚕の市　かず子
主義主張などは持たない種袋　かすみ
もめ事の種を婆さん懲りず蒔き　貞吉
北窓に下着干してる独り者　江美
毛がに売り北の訛りを真似ている　君子

鹿野町みか月川柳会
結成6周年記念大会

日時　**昭和61年9月14日**(日)9時開場
会場　鹿野町農業者トレーニングセンター
鳥取県気高郡鹿野町鹿野
電話0857(84)2131
国鉄浜村駅下車バス15分

お話　西田柳宏子
兼題　「太鼓」　高杉鬼遊選
「駅」　寺尾百合子選
「田舎」　小林由多香選
「狸」　両川洋々選
「情」　八木千代選
黒川紫香選
特別課題「薔薇」
席題　当日発表
各題2句　締切11時
会費　一、五〇〇円(軽食・発表誌呈)
懇親宴　会費一、五〇〇円(9月6日までに投句先へ予約のこと)
★欠席投句＝八百円、9月1日消印まで小為替希望
投句宛先　〒689－04
鳥取県気高郡鹿野町鹿野一二七九
中原諷人方　鹿野町みか月川柳会事務局
電話　0857(84)2100
主催　鹿野町みか月川柳会

リフォームの市でリフォーム思いつき　春子
国境の北と南に血を頒ける　正一
むらさきが好きむらさきに恋をする　牧郎
北山杉みがきみがいて女老い　水声
愚痴の種拾ってくれる母がいる　歌子
絵日記へ育たぬ種が多過ぎる　杜的
和やかなムード五年目の句箋　和友
貸家札噂の種も風化する　颯云児
庭先の北の鬼門に咲く南天　陽露子
父と子の和解と猪口は知っている　白渓子
和解さすつもりで行って揉めてくる　よ志子
北の島悲しい戦友の墓がある　保蔵
手形割る種あかしなどあるものか　郁栄
高すぎた理想の椅子と知る机　静江
市場籠似合う女で翔び損ね　晃美
北向きがどうのとお仏壇がまだ　一掬
和菓子から祖母の童話が歩き出す　いわゑ
競市が終ってもとの波の音　はつ絵
痩せたいと思う平和な絵具皿　作二郎
市場かご扶養家族が一人減り　美智子
迷走台風頭を北に向き変える　美代子

いずも川柳会　竹治ちかし報

最高は望まず裾野草をはむ　草丘
欲張るから最高点へ届かない　勝子
狭くてもわが家遠慮のない生活　弁治郎
最高の味ペコペコの腹にしみ　正朗
最高と思う喜び母の背な　為一郎
最高の出来だ初孫男の子　由郎
最高のコンディションが身のとりえ　翠星
最高の二人へのぞく窓の月　青湖
最高に遊んだあとの手切れ金　きみえ
最高の遺産平和という宝　幸一
最高の言葉一言ありがとう　文子
説教へ涙がしかと答えて居　芳風
おそ過ぎた反省心重くする　慎枝
反省会まずまずビールの栓を抜く　満江
良薬は苦し反省せぬ若さ　鐘堂
礼拝に光る十字のネックレス　孝太郎
迎え子が反省していたあの廊下　智子
反省の陰さえもなくうす笑い　ノブ
反省を強いれば切れる琴の糸　芙佐子
反省をしても二十歳に戻れない　湖楽
獄窓へ浮んで消えて母の顔　肇
懺悔して渡った橋は数限り　桂子
反省の枕はすでに濡れている　美磯
反省の涙は汗にして返し　久栄
その先は言えぬ不安の顔が寄る　まこと
ボランティア寄る辺ない身が掌を合わす　寿美
言い訳を考えながらそっと寄り　元之介
立寄れば今日もなじみが止り木に　篤子
寄り添うて歩けば噂風にのり　夢酔
なにくわぬ顔で寄っては孫を抱き　軒太楼
残り物寄せて二次会派手にやる　房子
寄り添えば片袖濡れてもいとわない　独仙
寄り添うて静かな宿のフルムーン　久代
寄り処を定めてからの蟻の道　嘉寿子
立ち寄れば夜逃げしたらし貸家札　代仕男
歩み寄る妥協の線がやせている　昭二
銀輪が続いて朝もや晴れてくる　知恵子
人情が明治のままで続く店　(園)よし子
続編のない人生老妻といる　寿恵
美しく余白を埋める句を続け　律子

竹原川柳会創立三〇周年
〝竹の里〟合同句集第二集発刊
山内静水古稀
記念川柳大会

日時　昭和61年9月14日(日)9時開場
場所　竹原市竹原町新開　大広苑
お話　西尾　栞・石原伯峯
兼題　「情」　三浦　宏選
「地」　小松原爽介選
「街」　森中恵美子選
「盃」　田中　好啓選
「学」　橘高　薫風選
各題2句・締切12時
特別課題　「友」　山内静水謝選
(特別課題のみ事前投句)

★句集「竹の里」ご希望の方には、二千円でお届けします。

主催　竹原川柳会

続くものないのに席をけった悔い　芳子
バラ色の筈が苦労の続く道　ちかし
迷宮へ続く道あり地蔵立つ　桜水

いじめっ子一人も居ない蟻の列　巡歩
幸せが続く口笛高らかに　圭詩朗
愛憎の輪廻が続く白い道　多賀子
風鈴の鳴り続く家共稼ぎ　久美雄
続けざま二杯に妻が腰上げる　緑之助

川柳塔唐津支部　久保正敏報

愛の渦夜毎彩どるカウンター　邦子
噂する相手が後に立っている　今子
先生の水着眩しい夏キャンプ　久仁於
婚約に血液検査まで要らぬ　高明
石で釘打って轍鮒の急を知り　花代
酔いが出て口説いた客も眠りこけ　旭恒
からませた鉄線屋根の上で咲き　あき
年毎にわさびの効かぬ妻の味　虹汀
ハッとする程の輝き恋女　多駄子
玄海の烏賊漁火は涛に揺れ　朴竜
相客の市会議員は健啖家　四郎
はなのいろみんなきれいにそまってる　七歳かおり
あぜ道を跨ぐ候補の赤い舌　正敏

Y・F・C川柳会　人見翠記報

梅雨晴に西瓜ほうばる昼の通夜　泰州
明けやらぬ海ぽんぽん船のこだまする　翠記
旗色が悪くなったらボケた振り　房子
風鈴へお世辞上手な初夏の風　よし津
涼風に藍匂わせ初夏を着る　豊平次
硝子ごし言葉に出さぬ僕がパパ　節子
露天風呂心の緑風みどり　紅葉

南大阪川柳会　中川滋雀報

縁の下の力に気付かない若気　洋子
十年早いと若気を意見する　恒明
思い出したくない若気の失敗談　智慧子
老いの背に若気が残る花と竜　善信
憶わばや軽い若気の二つ三つ　しんじ
若気から選んだ妻に養われ　綾珠
若気から放浪の果て釜が崎　雅風
マイペースの一生倖せかも知れぬ　柳宏子
フラスコの中の一生も矢張りある　凡九郎
運のよい一生だった花リボン　白兎
一生に一度のハレー見そこなう　春蘭
一生を閂として生きた母　公一
一生を柱時計にきざまれる　悦郎
紫の家紋に一生縛られる　勝美
一生を地方まわりで朽ちた芸　広司
一生のお願いこないだも言うてたな　頂留子
上役も上には上の敵がいる　千里
上役になり上役の苦がわかり　文秋
上役の投げたカーブはよくキレル　重人
責任をとる上役に矢がささる　柳伸
上役が握りつぶしていた正義　雀踊子
上役の天気予報は秘書が呉れ　庸佑
上役の娘で妻の高い鼻　寿美
上役も時には部下の機嫌とる　ハル子
上役の奥さん大阪弁のまま　晴風
先生の背で遠足よく眠り　外吉
遠足を待ってた頃が花だった　智子
遠足に餓鬼大将のよく気付き　久子
貸切りの市電校歌を乗せた過去　弘生
遠足の土産は山のぬるい水　曲ん手
糠づけを教える嫁が来ない過疎　信治
教えても右なら右の石頭　章久
こわい兄さんが教えてくれている穴場　慶三
父ありき無言の教えが重かった　滋雀
歴代の教えを風化させる波　喜風

川柳塔きゃら木　石垣花子報

腹の虫押えさせてる快復期　富枝
なにげない言葉が腹を熱くする　夕子
腹芸が出来る女将で桐が好き　登栄
腹立ちを笑顔で流す春の川　富美子
国会答弁のらのら腹は見せられぬ　なみ
血税を無駄使いとは腹が立つ　朗子
臨月の腹に敬礼したくなる　てい子
椅子一つめぐって腹のさぐりあい　時子
腹見せて眠る子猫は守らねば　より子
雑兵の腹はいつでも鳴っている　花子
受胎告知虹を織り込む腹の帯　日枝子
なにもかも腹におさめて胃が痛む　田鶴
腹底の色がだんだん見えてくる　千春
いつもニコニコ　スポンジの腹が柔らかい　瑞枝
鬱鬱と腹が煮詰まる深い疵　荒介
確実に竹は一節ずつ伸ばす　千代

熊本川柳会　有働芳仙報

夜が来て妥協しているのに気付き　幸子
表情を見てから頼む金のこと　俊子
痩せ我慢これも男の運命です　宵草
バス停が近く煙草がよく売れる　北斉
雑巾が追いかけ廻す孫の足　一進
人間が丸くなる頃欲が消え　芳仙
反目も握手も欲の裏表　丹青
セールスの地声を聞いた捨台詞　昭代
大声で天下を取っている屋台　北斉
ママゴトのママは声までママに似せ　功章

岸和田川柳会　植山武助報

立志伝波止場に置いて来た名残り　浪速子

捨て切れぬ夫の名残りの釣道具　こう
かくれ里季節はずれのひとり旅　寿美子
料理よし秘湯よし女のひとり旅　ゆづる
せせらぎの音へブラリとひとり旅　加代子
ひとり占めにして優越感が挫折する　春栄
いい話ばかりで親娘の電話切れ　冨志子
我の強い自分ひとりを持て余す　さよ子
逆夢を信じて賭けるやせ蛙　一弥
百円を借りて返している夫婦　希久志
達筆の手紙の返事はワープロで　楽天
元気なだけが取得をうらやまれ　武助
あじさいのやさしい愛かも七変化　ひで
国政を空白にして選挙カー　射月芳
紫が濡れて絵になる菖蒲園　狸村
父の日のボタンが欠けた父のシャツ　白光子
あじさい寺の雨は旅愁を掻き立てる　甘平
百合の香にむせて開ければ外は雨　操子

聴障川柳　稲田豊作報

一を得て足る人十を足りぬ人　豊作
野菜作り一畝が老いの楽園地　承平
一番の大事神から離れない　鉄火
一本の絵筆七彩光らせる　峯生
明け方の夢が一日気にかかる　和江
主婦群れる卵一円安いから　たみ
一歩退くことも身につけ六十路坂　三香
一年生背なでカバンが踊ってる　健太郎
思春期はいちいち聞くなと煩さがり　文吉
見た顔だ誰でしたっけ一礼す　みつる
一人子と川と寝たのがなつかしい　一晄
耳遠く一番前へ招かれる　行江
記憶ひとつ置き忘れてる春暦　八恵子

川柳化粧櫓　植村客遊子報

昼食の妻をとりこにするドラマ　岳詩
淋しさに吹く口笛の音が出ぬ　大鷹
古里の新芽珍味として届き　越山
苦労した学歴子供にはつける　秋月
四百円でひと月健康保証され　葉香
笹百合の匂いへ怒り消えている　紅月
掛軸を替えて夫婦で春を待ち　礎石
節穴をじっと見つめる罪と罰　実男
節穴の視線が胸に突き刺さる　白季
父の日の下手な言いわけ聞いてやる　悲子
気に召したパーマへ夫がケチをつけ　みつこ
ファッションが溢れて淋しくなる季節　サワ子
ふと触れた掌の冷たさよ思慕つのる　祥月
牡丹園島へ観光バスが来て　とし
散る花に無情を悟り老い写経　永楽
サングラスかけて絵になる翔んでる娘　みね子
染み込んだ方言飛び出すクラス会　まさ子
孫二人嫁の体形気にかかる　遊光
万葉の歌にこがれて五十路坂　和子
母と娘の暮し小金ねらわれる　客遊子

川柳藤井寺　赤木和子報

蛙には蛙の言い分ある夜更け　与呂志
ささやきも怒鳴りもしない人と棲む　つや
裃を脱げば気楽にしゃべれます　重樹
脱サラでこんなお仕事しています　三郎
思春期の子が跳び超えた水溜り　治子
日本の象徴脱ぎたい時もあるだろう　昭子
教会で落した垢はしれたもの　吸江
アマリリスささやく様に二輪咲き　須美
俗界の垢を流しに山の宿　志洋

肚の虫一匹宥めるむずかしさ　美代子
韋駄天の速さを嗤う亀である　本蕗棒
ごり押しの解散それでも合憲か　たかし
次々と脱がせたけのこ痩せ細り　伴子
又元の二人になって日の長さ　ふみ
志納金しこりも解けず京の寺　末一
川洗う心は蛍の里づくり　うめ
入梅の五月もずれて風さやか　秋園
円高のメリット雀の涙ほど　麻雄
藻の蔭で囁いている若き鮎　和美
半袖の若さはじける下校途　彩
焼栄螺くるり一気に脱がされる　雅美
監督のささやき打つなと命令す　正人
この世限りのえにしも水を分かち合う　和子

川竹松風報

ご無沙汰の分だけ長居して戻り　佳風
建つまでの夢は無限の設計図　房恵
お友達だからお金は貸しません　孜郎
キッチンの斜光に一輪挿しが映え　春枝
赤い旗今日は働く者の日よ　竹萌
優勝の校旗に泣いた青春譜　幸泉
白旗を夫婦がさげている平和　三吉
星空に一気一気のビヤガーデン　高重
原発の事故で曇った五月空　功
大空の鯉は核には渡せない　朱坊
愛嬌が買う気にさせた不用品　熊男
愛嬌の良さが招いた玉の輿　徳和
愛嬌のある娘が上手に酒をつぎ　酒仙
愛嬌のよいママさんに借りがふえ　松風

川柳大阪　塩満敏報

シャッター開け朝一番はなじみ客　天祥

同日選狐と狸の胸算用　柳弘
本棚の一等席にある句報　司
円高へせめて救いの電気ガス　雅巣
前身は語らぬ蝶の舞い姿　しげお
人形の澄む眼に妻は生きている　我勝
定年がボーナス妥結の記事睨む　希久志
信じ合う若い二人の目が熱い　金太
荒れた手にのれん守って寡婦生きる　洛酔
石段を登ると信者の顔になる　虎酔吟
山河まだ褪せぬままあり国なまり　一介
二匹目のどじょう求めて立候補　酔舟
ダルマ屋をW選挙があわてさせ　鉄心
戦国の武将もかくや選挙戦　比呂志
アメリカの機嫌取りつつ総選挙　与呂志
二枚目の舌も鍛えて同日選　重人
目覚しが憎らしい日と要らぬ日と　河南子
現代っ子生花習ってジャズダンス　天舟
阪神よビールかけ合い忘れたか　喜楽
やめられない冷えたビールとプロ野球　溝渕
泊り明け飲むビールにも勢があり　平川
満腹で昼寝したいが箱の中　和田
ビール飲め先輩の声神の声　浜田
大漁の喜ぶ顔に朝日さし　哲流
喜びを体で示す孫二歳　小柳
そよ風に生きる喜び教えられ　小薮
青空をながめる限り核はなし　もとみ
石段を見上げて登るのは止そう　天平
板さんの風流珍味の腕のさえ　大平
弁慶もチャンネル譲る同日選　本蔭棒
足形のついてるシャツが高くなり　一歩
文明がベタ足の子を多くする　好栽

蝶よ花育てた娘すいと翔ぶ　みつる
ビール呑み寝過しにがい虫をかむ　河村
梅雨空を見上げ見上げビラ配り　敏

倉吉川柳会　渡辺菩句報

湖に今日も来ている太公望　寿満湖
生きざまを湖面に自問自答する　とめ子
山のぼり老人ボケに挑戦状　小生
濡れ衣の二人の愛は美しい　貞山
逆境に立って湖上の月に問う　英治
年金と言う湖で泳いでる　康子
茫然と精霊船を湖に流す　喜美子
子へ送るジゲ名産の宅急便　紫泉
山へ来て邪念を払う滝の前　満春
ジゲの衆まだ新入りに疑惑の目　柳風
宍道湖の夕日蜆の私語を聞く　かつみ
億年を刻み濡れつぐ鐘乳洞　松女
湖に沈んだ釘が拾えない　秋人
一握の米を洗って愛に濡れ　瑞枝
ジゲの人大臣になると言って来た　寿郎
山ん中までポケットベルが追って来る　はるお
牛一頭ケロリと食べてジゲおこし　みなと
ジゲ起こし大分県庁訪れる　千秋
ジゲに居るいい子いい子の非行歴　ゆり子
鋳掛け屋と山に籠って顔見せぬ　荒介
泣きに来た湖はアベックばかりなり　観洋
朝露にバラが真っ赤に濡れている　蛍
広重に見付からぬ様富士を登る　あや子
夜叉の面とれば涙で濡れていた　明
火口湖が透けると見える男の名　千代
太陽を搏ってジゲの庭に置く　十六夜
この石をいくさの血では濡らすまい　やえ

湖を一周まだ決断がつきかねる　秋女
余所者も十年たてばジゲの顔　完司
ジゲ起こす話に鳶の目がひかる　とみお
湖の底にたまっている怒り　文子
山が眠ると西も東も判らない　日枝子
みずうみにチャポンと沈む党もある　石花菜
白鳥の湖が人間臭くなる　独歩
星が歌うのを聴きにみずうみに出る　菩句

富柳会　藤田泰子報

割箸を口で割ってるいい男　千代女
痛いとこ突かれ二の句がつまる喉　荘次
神様もそわそわしてるギャル神輿　文次
箸箱の少し褪せてる夫婦です　森子
おやつどき器用にとまる歯の痛み　冨美子
電車から見える祭に途中下車　文子
喋りたくない日で昔を回してる　美代
ダイヤルを回すとそこに母が居る　花梢
カーニバルサンバの美女に男の目　伊庭勇
引率の教師は箸を五六本　田中勇
祭り追う金魚に雨が嬉しくて　美緒
一本の傘を回している若さ　岳人
溺愛の子に痛さは分るまい　トシエ
箸先をなめた戦時中想い出し　花子
埋れ火を掘り起こしてる老いの箸　金太
箸で豆上手に摑み親日家　富久一
走馬燈回して過去の罪を知り　義雄
梅雨空にかこつけている神経痛　きぬ
一人居のワイングラスに回る過去　美津子
敗北の第一兵器は箸だった　弘生
割箸のタクトで音痴の天下です　優
近松が回す舞台の義理人情　章久

中傷の矢が痛かった回り椅子　曲ん手
思いやり仇にかえったこの痛手　静枝
少しずつ萎む祭のゴム風船　泰子

川柳塔まつえ七月例会　恒松　叮紅報

老母の香がほのかに匂う洗い張り　与根一
呼び捨てにしない先生大禍なし　壮樹
呼び捨てで話がはずむ戦友会　舞吉
まじないで父の再起を待つ私　長三
文明の世にまじないは消えて行く　翠星
まじないを信ずる祖母はまめ息災　ノブ
老母の顔たててまじない聞いてやる　みつこ
まじないに心の弱ささらけ出す　ちかし
紫陽花は雨の呪文に彩移す　愚童
まじないの好きな母から知恵を借り　多賀子
まじないが効き奉納の砂袋　昭二
まじないを素直に信じ阿呆鳥　代仕男
まじない料と思い共済金払う　雄々
お揃いの浴衣で母も若返り　静翁
縫い上げの丈かわいらし浴衣がけ　妻子
そして秋浴衣が一つ咳をする　吾作
輪の中に踊る浴衣の薄化粧　貢範
宿浴衣宿下駄鳴らし門前町　美治
孫はもう浴衣の柄を選り好み　きみえ
浮気しているかも知れぬ宿浴衣　正朗
何時の間か浴衣脱いでた日本人　芳子
手ぼたんにやっぱり浴衣よく似合う　弘生
新婚とひと目でわかる浴衣連れ　寿美子
人生は不可解でよし宿浴衣　叮紅
帆一杯孕んだ風があたたかい　鶴丸
手作りのヨット帆走夢みてる　玄艸
風待ちの港で一夜の帆をたたむ　育子
舵取りは君だよ白い帆を上げて　鳳人
帆に命一筋賭ける男意地　まさし
帆をかけて北前船の雄姿みゆ　友子
白い帆が江戸のロマンを話してる　みえ
帆柱がうなる蜜柑の値が上がる　静江
沖の帆はきっと幸せ乗せている　巡歩

川柳はびきの　田中　隆二報

誕生日一人くらしの上鰻　孤呂二
コミュニティー子供に語る区史写真　重樹
片袖を濡らして粋な走り梅雨　弘子
連休で乱れたリズム整える　シメ子
さまざまの思い表わす指おかし　昇
連休も金欠病で寝るときめ　淑子
灯のかげで男は策をねり直す　隅谷義一
名コック妻の料理に舌鼓　忠宏
国宝の茶椀終生倉暮し　志洋
なつかしや父の形見が寸足らず　白水
お達者な訳を知ってる万歩計　清子
悪役が一人もいないアマ芝居　蛙声
目刺し焼くフル運転の換気扇　繁男
眠ってる議員テレビで大写し　優司
ご近所に仏も鬼も住んで居る　隆二
青丹よし野立ては今も蝶の中　久治
大空の広さへ孫の鯉のぼり　末一
幸せによろこび重ねて姫だるま　寿美
鍵っ子に母さんがいた子どもの日　ケイ子
膝の猫不精になれという目付き　伴子
連休がなんだと拗ねる物干し台　トミ子
栄転も桜の下で酔っている　昭子
退職金内助たたえるフルムーン　憲太郎
定年の歳だよ休まず風邪引かず　敏
ダイアナ妃を迎えるようにバラひらく　悦子
田植機にあわててまどう蛙の子　胡村
チョットした言葉がもとで誤解され　和美
百点を貴方にあげる女癖　比沙胡
昂ぶりを吸うて緞帳下りてゆく　隆
一と言を肚に納めて今日終る　美代子
終りにも良い月日もあると言う　保江
バランスを崩すと夜叉に落ちてゆく　葉子
この鼻にこの口がある神の思慮　吐来
負けている賢い妻のさじ加減　美子
負けることきらいな父も孫に負け　三千代
負けるコツ知って平和が続いてる　満洲子
バランスを崩した人生悔い残る　石橋義一

わかあゆ川柳会　小砂　白汀報

寒くとも心の窓は開けておく　秀穂
窓越しに庭師へお茶を呼ぶこころ　翠星
若いだけが取柄女房紅引かず　ヒデ子
手心を買わせるつもりの天下り　聖子
窓からの風が新酒の香を運び　世似
導心もちゃんと手心知っており　英子
窓開けて幸せ彩の風さがす　笑子
べたほめを手心でしょうと逃げて無事　かつ子
意地張った肩を若いとなだめられ　智重子
イジメなど知らぬ窓際のトットちゃん　歳栄
カーテンがついてゆきたい窓の風　鈴江
手心ももう用なさぬ腕相撲　清泉
草に寝て地球は動くああ緑　天痴人
あの時の握手は月へ捨てました　民子
手心は許さぬ磁石北を指す　はるみ
灯よ窓に幸せ棲むごとし　白汀

サークル檸檬　田形　美緒報

灯が消えて自分独りの天下なり　三四子
赤字消す献立たたずウロウロし　雅子
逢うはずの心をしまう火消し壺　今日子
あこがれは石鹸の香の残る人　千代子
私を消したいと思うのは私　森子
洗濯の泡の多さを信じきる　智恵子
相性が悪くて石けん泡立たず　泰子
ベビー石けんやわ肌が好きぬる湯好き　美緒
小心な夫婦が咲かせた爪切草　美代
雨の日は雨の心になってくる　花梢
心配りを言葉の継目から拾う　維久子
石けんで消えぬ指紋を裁かれる　千万子
こころ無い人十字架のペンダント　薫風

京都塔の会　松川　杜的報

何入れているのかギャルの紙袋　紫香
神様よ定期の利子がまた下がる　白季
狭い部屋夫婦で居ると愚痴ばかり　諷云児
吸殻へ少し不平を言うて捨て　芳子
文鎮に漬物石は大き過ぎ　花村
指切りのその後湿っていく心　和友
連れ舞の蝶を羨む花の私語　花代子
葱畠一列毎に蝶が舞う　武庫坊
訣別の手紙を書いてからの日々　幸
夫の愛の深さに負けるときがある　年代
病院の待合室で友が出来　美枝子
流しそうめん指が生きてる竹の箸　誠史
肩のこる話に欠伸かみころす　巨詩
肩こりへまだ内職が止められず　飛鳥
隙のない人と話して肩がこり　杜的
負けて勝つことを認めた訳でなし　水客
梅雨寒に心のしめり拭われず　笛珠
猫の機嫌なおって鼻が湿ってる　達子
湿らせて浴衣の形ととのえる　孝江
じかに手を当てて湿りを見るお襁褓　白渓子
ふれあいのぬくみ嬉しい電話口　英子
ちょっとしたふれあい縁談たのまれる　栄
回復期がふえて大部屋活気づき　弘生
花に蝶そのふれあいがうれしくて　美穂
ふれあった心に熱いもの走る　求芽

三幸川柳教室　桜井　千秀報

親切で便宜図って噂され　周三
謀りごと清い瞳に耐えられず　由梨
どの足で測ったのやら徒歩五分　鉄治
夕風に大漁旗が活気呼ぶ　かなめ
人波にもまれて孤独かみしめる　静
夏の恋BGMは波の音　文子
個性美を流行の波押しつぶす　一郎
過去いくつ消して砕ける波の音　桂香
ひ弱な子変える波です目を瞑る　靖子
魚たちのロマンは波が知りつくし　愛子
憤る波はテトラに消しにくる　保
人影が絶えてやさしい波の私語　百合子
ひたひたと寄せる小波が隙をつく　千秀
カルガモの話題に今日も無事に暮れ　定子
話する相手もなくて雨の音　三千子
ジェスチャーもまじえ話に尾鰭つき　美代子
薄紙を剝ぐよう貝が口をきき　み ね
話合いベールがとれた今日の空　当代
語らない過去に神話がゆれている　茜
話したい事あり息子へビール酌ぐ　千香子
今だから言う良縁の裏ばなし　智水庵

菜の花句会　高杉　鬼遊報

足を投げ出せる我が家の古畳　壮之助
ほたる火を追うて妻子のある人と　律子
結局は力そう思いとうはない　凡九郎
一冊の本と出会うた炎の眼　悦郎
婿殿がじっと耐えてる底力　シマ子
冷やっこ飲み屋に早い夏が来る　鬼遊
雑草に徹し土下座もいとやすし　柳伸
嫁にやる娘を父親と違う眼で　蕉路
明日も陽は昇る若さを力づけ　頂留子
国境という線はなし夏の雲　恒明
さじ投げた話十三日の金曜日　栞
半顔の菩薩に心のぞかれる　勝美
政治力わが家の路地にアスファルト　章
投げかえす石よ子がいる妻がいる　信治
眼には眼と女涼しい仇を討つ　冬葉
実力はあるが人気がついて来ず　射月芳
マンションが高すぎるので身を投げる　金太
ぶきっちょな男の力だから借りる　翠公
雑草を信じ狂わず生きている　美幸
ひと許す眼に出合う島の船　弥生
眼の奥に女の流れる河がある　雀踊子

駒つなぎ川柳会　里　小路報

強風にすこしはにかむ初夏の裾　美津枝
新入社こわい上役すぐ覚え　春蘭
美しい引込み鬼が待っている　柳影
祝電を打って仲々寝付けない　智子
わんぱくが静か悪さしているな　潔
妻にときどき強いとこ見せておく　冬葉
上役の頭揃えて病む企業　悦郎
その裏が読めず話術に引き込まれ　恒明

祝電を聞くと鳴り出すオルゴール　柳宏子
捨て犬を抱いてわんぱく帰らない　壮之助
強い子は泣くなと尻を捻ってる　幸治
上役に世辞が言えずに強い風　博子
頼まれた祝電もある披露宴　雅風
父の酒わんぱく話で炎えてくる　柳石子
レモン噛ってなお強がりなことを言う　萬的
上役に趣味の道なら勝っている　国公
引込みを仕事にしてる影ひとつ　健司
祝電を打ち貝になる父の背な　真砂
わんぱく眠る九段の坂上る　章
衰えた身体がお灸には強い　眉水
とても上手に男引き込む襟ぼくろ　信治
祝電の中に選挙の顔がある　新造
わんぱくのすり傷位は唾でよし　勝美
たこ糸の強さは母に似た温み　あおい
上役の酒の肴に縄のれん　寿美
円高をもろに引込むくらしの灯　花仔
祝電のトップにあげる時の人　曲ん手
わんぱくな孫に期待の目を細め　甘平
強いこと言えぬ私も過去があり　文秋
上役の小唄あくびを噛み殺す　克己
祝電に鼓舞され奮起する門出　頂留子
ふるさとにわんぱく時代の友が居る　弘生
どの敵もみな強そうに見えてくる　重人
上役も退職したら唯の人　好子
幸せを引き込む朝の明り窓　善信
祝電を受けてる鯛と海老の膳　千代三
わんぱくが走るとついてくる仔犬　史好
ゲートボールに強いが嫁にはおとなしい　鬼遊
上役に上手に負ける腕を持ち　庸佑

子を味方に引き込み妻の城落ちず　楓楽
売名のための祝電だってある　浩一郎
わんぱくが一番高い樹に登る　雀踊子
上役も私情が這入る美人部下　東雲
強いは子等の助け舟　重夫
ライバルに打つ祝電をさわやかに　柳伸
一本に賭けた二浪の強い意志　小路

翠洋会　中西兼治郎報

相談ごと嫁姑はそっぽ向き　萬里
お供えのぶどうちぎった跡がある　春子
ぶどう狩りうちの家族もこつぶです　美津枝
相談を受けて返事に困る顔　飛鳥
コンピューターあふれる紙に流される　さと美
涼しげに上布が似合う京の女　文子
ゆっくりと薄く皮むくマスカット　良江
屁理屈を通して相談まとまらず　為子
充実の味噛みしめる干しぶどう　照子
試着室入ると出るとで人変り　東雲
ぶどう棚母には母の秋がある　宏子
相談の途中で離婚止めになり　光子
ぶどう酒の甘さに恋のほろ苦さ　みつ子
相談に首伸ばしてる親心　綾子
相談に行きたい実家母は亡く　兼治郎
婆ちゃんも結構似合うレオタード　登志実
ぶどう一房わが一族はばらばらに　鬼遊

川柳泉尾　吉川寿美報

ぐずぐずとお言いでないと花しょうぶ　美代子
紫の着物あやめに逢いに行く　美子
一本気さいわい薄い花菖蒲　弘子
猿沢の鯉が水面を赤く染め　伴子
幸せな星に生れて疑わず　葉子

腹割って話せば分る人だった　淑子
衣替え腕の白さが目にしみる　ふみ
「不如帰」読む気にさせた蘆花公園　満洲子
台所のくらし知ってるゴミ袋　昭子
長老の発言待って決めとする　恭子
とまり木で誰を待つのか独り酒　広子
大三元待ってる手の内見破られ　シメ子
大根の緑は畠に捨てて来た　トミ子
貸農園野菜と草が背くらべ　義一
温室の野菜に見せたい青い空　多和子
自家製の野菜は虫さえいとおしい　三千代
この足で走ってみたい車椅子　白水
スポーツに国境はない丸い球　敏
昂りを鎮めて畳む女傘　寿美

川柳後楽　井上柳五郎報

翔んでみたい日もある雨蛙　玉水
不気味なり殿様蛙が庭に出る　照路
湯の街の蛙鳴く刻考える　鮫虎狼
カルガモも未知の世界へジャンプする　拓治
選挙戦坊チャン嬢チャンにもお辞儀　美智子
古都税は古いお経を棚に上げ　恒洋
アメリカの目は冷やかな枯葉剤　草風
イメージを親にまかせてする見合　中建
イメージは遠い昔のおさげ髪　番茶
イメージが独り歩けば笑う視野　たけ志
イメージチェンジ起死回生の賭をする　哲郎
イメージはそっくり亡母が生きている　桃風
爺ちゃんにゃ無理だと孫が提げてくれ　吟平
無理でしょうがと札束をちらつかせ　佐加恵
食うだけの田圃があって無理をせず　葵丘
無理したらどこか歪み出てきます　信善

無理のないフォームで父の変化球　健一
どちらから傾いたのか愛二人　博友
傾けた盃静かに疲れとる　進
傾いた家運をにらむ鬼瓦　柳五郎
傾いた女神でツキが逃げてゆき　護

川柳たけはら　森井　菁居報

かぶと虫まだ赤ちゃんでとらなんだ　少二裕次郎
はいしゃからかえるといたくなってきた　小三晴美
がんばった習字しょうじょうもらったよ　小三晶美
修学旅行土産は話だけですよ　小六純平
新聞を信じたくない記事がある　中一亜貴子
宿題がまだ終わらない窓の月　中三恵子
バーゲンへ母オーナーでついて来る　高二紀
時間だけ過ぎるよ過ぎる試験前　高三真弓
セールスが好きな創作劇である　菁居
酔い覚めてつまらぬことを言った悔い　市三郎
一滴の汗を知ってる土の精　白狐
高三のくりくり坊主にある自信　敬子
たどり着くまでは心に鍵をかけ　笑子
山あり河あり民謡の調べあり　のばら
とりたての野菜作っているおかげ　年子
就職戦線見守るだけの親なりき　輝恵
喜んでくれる子が居て台所　淑子
子は自営みかんの山が泣いている　清水
ストレスを花に語って花に酔う　孝子
亡父のこと亡母のこと聞く伊予路踏む　貞子
捨てられるものなら捨ててみたい意地　一路
本積んで言葉の森で酔っている　博子
流されるコツもおぼえて角がとれ　康子
他人の目にどうあれ私の宝物　春恵
倦怠期らしいお花が活けてある　山久

雨だれの音に生き方ふと想う　臣子
怒るでえ西川きよし出ると言う　静火
喝采はなくとも今日のノルマ追う　西合
鉄骨の軒にツバメの知恵袋　よし江
亡夫の忌や経より好きな酒供え　シゲヨ
日々好日お金があればもっといい　不動
自画像の目は限りない自己批判　笑俳
ポスターの一票媚びてるうす笑い　静水
あれもおかげこれもおかげの灯を供え　房子
救急車いのちをひとつありがとう　蘭幸
ふと吾に返れば悔やむことばかり　笹舟
まだ履ける孫のズックを履いてみる　朝子
アパートに住んでサンマもよう焼かず　政代
もう無理はきかなくなった風邪を寝る　澄江
天と地を活ける野の花山の花　滝代
父よりも大きい靴はき卒業す　キヨ
連休でつかれて帰って来た財布　俊夫
爆弾をかかえて薬の数が増え　由江
紅ぼたん飛鳥美人の顔に似て　勲
やせ細る友を言葉もなく見舞う　喜美子
やすらぎは据え膳囲む宿浴衣　栄恵

川柳わかやま　堀端　三男報

レクイエム雨は心の中に降る　緑良
雨つづく母に確かな心電図　作二郎
ずっと昔に出逢ったような白い雨　狂虎
雨しとど心の奥まで凍み透る　光代
夏の挽歌は土砂降りで通り過ぎ　康勝
ひっそりと炎のあとに待つ青磁　桂香
逆境に炎と燃えた妻の意地　柳宏子
気がつけば俺の炎は消えていた　凡九郎
何色の炎あがるか老いの恋　信子

岡本太郎画面に炎ぶっつける　萬的
水割りのグラスの底にある炎　幸
炎天も避けて通れぬ生きる道　武雄
炎えつきてそれから白い日記帳　稚代
楊貴妃の炎は紫だと思う　紫香
炎えるもの未だあり明日の夢を見る　武庫坊
決断を下す炎の鞭が鳴る　寿子
海が好きで生涯船に乗るだろう　芳朗
砂利船がかたむき一級河川行く　紀美女
航跡へもうたじろぎはせぬ女　白光子
大船が平気で渦を巻いていく　公子
夕陽背に男のロマン満ちる船　栄恵子
荒波へ小舟は小舟なりの知恵　克子
船頭のガイドで島が生きてくる　登志代
時を越え追風をはらむ北前船　天彦
船と一緒に青春捨てた敗戦記　太茂津
解禁を待ちくたびれた船の群　雅子
建前も本音も乗せて揺れる船　英子
友情の証に図星抑えとく　きみ
裏金は図星やっぱり落ちこぼれ　豊太
図星突く武士の情を知らぬやつ　忠
図星指すあいつの手から逃げられぬ　恭子
一言の図星わたしを眠らせぬ　輝子
図星指す人を真すぐ見つめよう　正子
自問自答図星射られた日の焦り　紀久子
少し図星逸らして心たしかめる　千寿子
図星を外して出かたを待っている　雀踊子
ポケットの底に図星を入れてゆく　年代
図星さすその快感が悲しくて　守夫
溜飲が下がる図星を突く啖呵　三男

9月各地句会案内

	日／時及び題	会場と投句先
西宮北口	8日(月) 午後1時より 仏・威力・自由吟	西宮中央公民館　阪急神戸線西宮北口駅南出口歩5分 〒661 尼崎市武庫之荘5—25—17　春城年代 句会費 300円　投句料 60円切手4枚
菜の花	10日(水) 夕6時より 地獄・ひとり・貴重品・眠る	八尾西郷会館　近鉄大阪線八尾駅南西歩5分八尾神社境内 〒581 八尾市弓削町南2—141　飯田悦郎
川柳塔 まつえ	13日(土) 午後1時半より 発明・青年・ガラス	慈雲寺　松江市和多見町 〒690 松江市雑賀町1686　恒松叮紅 句会費 300円　投句料 300円(60円切手可)
川柳 わかやま	14日(日) 午後1時より 世話・読む・骨休め	紀の国会館（県民文化会館西隣） 〒640 和歌山市駕町15　野村太茂津 句会費 300円　投句料 60円切手3枚
堺川柳会	16日(火) 夕6時より 寸志・図太い・隙・ズボン	堺青少年センター3F　阪堺線綾之町西南 〒593 堺市堀上緑町2—9—2　河内天笑
南海電鉄 川柳会	18日(木) 夕6時より 魚市場・あぐら・名人	南海会館ビル内南海電鉄本社地下食堂 〒542 大阪市南区難波5丁目1番60号 南海電気鉄道㈱不動産管理部管理課　広井季雄 句会費 無料　投句料 60円切手1枚
高槻川柳 サークル 卯の花	18日(木) 午後1時より 筒抜け・人柄・自由吟	高槻市民会館301号室　阪急電車高槻下車歩5分 〒569 高槻市桜ヶ丘北町3—19　辻 白渓子 句会費 500円　投句料 200円(60円切手3枚と20円切手1枚)
富柳会	18日(木) 午後1時より まさか・送る・旅	富田林市中央公民館 〒584 富田林市寺池台3—22—18　藤田泰子
南大阪 川柳会	19日(金) 夕6時より 外観・議題・群衆・原色	寺田町高松会館　国鉄環状線寺田町裏駅南100米 〒544 大阪市生野区生野西1—5—2　金井文秋 句会費 500円　投句料 180円(郵券可)
川柳 ねやがわ	21日(日) 午後1時より 道路・関心・天ぷら	寝屋川市立総合センター4階 寝屋川市駅下車京阪バス総合センター前下車 〒572 寝屋川市春日町9—9　高田博泉 句会費 500円　投句料 60円切手3枚
もくせい 川柳会	22日(月) 午後1時より 豊中・晴れやか・結ぶ・自由吟	豊中市立中央公民館　阪急宝塚線曽根下車東南歩5分 〒561 豊中市島江町1丁目3番5—801　田中正坊
駒つなぎ 川柳会	22日(月) 夕6時より 棚・太っ腹・落付く・誤解	寺田町高松会館　国鉄環状線寺田町駅南口下車 南へ1丁3筋目左へ駅より歩3分 〒572 寝屋川市成田町19—28　里 小路
川柳 東大阪	27日(土) 夕6時より 風・カタログ・ポスト・無人駅	東大阪市社会教育センター2階 近鉄布施駅北へ5分　長堂小学校隣 〒579 東大阪市新池島町1丁目4—14　斉藤光利 句会費 500円　投句料 60円切手3枚

★特に記載なき場合　句会費 500円、投句料 300円（郵券可）、各題3句以内

原稿送り先（〆切・毎月20日　予め決定している場合は何ヵ月分でも結構です）

〒596　岸和田市荒木町1—29—1　宮園射月芳

本社9月句会

日時 九月八日（月）午後六時
会場 メンズファッションセンター3階
東区内本町一―一 電06・941・1918
地下鉄谷町4丁目下車（2番出口）交差点西南角

おはなし　橘高薫風

兼題
「筆」　宮尾あいき　選
「網」　堀端三男　選
「物知り」　阿萬萬的　選
「女」　西田柳宏子　選

席題 二題　当日発表　**各題三句以内厳守**
会費 五百円

★投句は柳箋（4cm×19cm）に一葉一句。
投句料 **300円**（60円切手5枚）同封のこと。

川柳塔社

10月の兼題　「青」「魔法」　「深い」「苦心」

10月本社句会は表紙裏参照

「夜市川柳」募集

第4回　「宵」　小出智子　選
3句・締切　9月末日

第5回　「島」　墨作二郎　選
締切　10月末日

投句先　〒593　堺市堀上緑町二―九―二
河内天笑方
堺川柳会

●募集●

十一月号発表（9月15日締切）

川柳塔（10句）西尾栞　選
水煙抄（10句）黒川紫香　選
愛染帖（3句）橘高薫風　選
課題吟（各題5句以内）
「紋」　植山武助　選
「教える」　竹内紫錆　選
「他人」　久保正敏　選

★川柳塔欄の投句は本社同人に限ります。
★水煙抄欄の投句は一般誌友の方です。

十二月号発表（10月15日締切）

川柳塔（10句）西尾栞　選
水煙抄（10句）黒川紫香　選
愛染帖（3句）橘高薫風　選
課題吟（各題5句以内）
「鍵」　田中叶　選
「将来」　都倉求芽　選
「贈る」　竹内寿美子　選

★愛染帖・課題吟へは同人・誌友を限らず。
★用紙は川柳塔社柳箋をご使用ください。

9月の常任理事会は1日（月）

定価 五百円（送料50円）
半年分 **三千二百円**（送料共）
一年分 **六千三百円**（送料共）
昭和六十一年八月二十五日印刷
昭和六十一年九月一日発行
編集兼発行人　西尾巌
印刷所　藤原童心社
〒545 大阪市阿倍野区三明町二―一〇―一六 ウエムラ第2ビル202号室
発行所　川柳塔社
電話（六六三元）六九一四番
振替口座大阪8―三三三六八番

＝編集後記＝

☆東野大八氏の労作、川柳の群像が百回になった。☆河野春三氏を川柳雑誌の編集部長に迎えたのは路郎の晩年、川柳雑誌の灯が消えようとした時で、八木摩天郎、浅川八郎、それに私ら、老人と新入りだけしか居ないような編集部だった☆路郎先生の連絡役に私は幾度となく春三居へ走ったものだ。春三氏の川柳雑誌入りは、殊に岸本水府先生を驚かせ、路郎門下の誰彼も抵抗を感じた事だった。☆川柳群像は表向きの顔の作家が出てくるが、裏面史が書ければと、無理な思いもしないではない。その点もう二三年もして現在活躍中の作家が登場するようになると、いちいちご本人に原稿の検閲確認をお願いしなければならず、大八氏にも二重の手間をおかけすることになる。☆それだけに、川柳現代史の生々しさでさらに読者をひきつけずにはおかないだろう。☆大八氏には、中国吟行の旅も目前に迫ったこととてここ二三ケ月中国に関連した読物をお願いした。行かぬ者には、かえって目障りと感じられる向きもあろうが、ご容赦願いたい。☆旅の感興は、旅の途上だけにあるのではない。旅の前の調査も意外に楽しみなもので、北京の見所や味所をはじめ、折よく開催中のNHK特集「大黄河展」やある写真家が七年間に亘り中国を撮り続けた作品「中国万華」を見たり、炎暑の中、寸暇を惜しまず旅情を高めようとしている。☆そして旅の後のたのしみそれも雑多ではあろうが、川柳作家であれば、作品の整理が第一でなければならない。☆私には旅行吟がかなり多い。それは何年経っても、旅の印象を鮮やかに甦らせてくれる。旅がどこまでも輝いてついて来てくれる感じがするものだ。☆今回は路郎先生の曽遊の地である。稔り多き旅の収穫と、恙無い旅程を心から祈念している。（薫）

▼「注射一本で男性回復」の記事をA新聞でご覧になられた方が沢山おられると思う。翌日、街で行き交うご婦人方が喜色満面に見えたのは、思いすごしか。

▼前を走っていた小型トラックが交差点の手前で方向指示器を出した。途端に〝左へ曲ります。左へ曲ります〟とトラックが声を出した。大型トラックが方向転換をするのか、後退し出した。信号音に続いて〝バックします〟と車がしゃべった。人間がものを言わなくなると機械がしゃべりだす。それでバランスがとれていると思っているのか。

▼駅で切符を買う。行き先までの値段は高いところに掲示してある。終点まで乗る時は探しやすいが、知らない途中の駅は出すのに時間がかかる。混雑の折には後の人に迷惑をかける。客に迷惑をかけるやり方が気にくわない。

▼自動改札機は、「扉の開いているのと、閉っているのとがある。扉の閉っている方へ切符を入れると至極真面目に、私のために扉を開けてくれる。機械と私とのつき合い方である。

▼便利さと合理性を追求したあまり大切なものを忘れてしまった。それは〝工夫する〟〝積み重ねる〟〝味わう〟こころであって、銭やかねなどでたやすく手にすることのできない財産である。川柳と同じようにそれだけに難しい。（き）

☆九月―長友香川酔々兒が亡くなって丸三年過ぎた。去るものは日々に疎しというが、彼のことは、折にふれ懐しさを増して思い出されてくる。☆あの年の七月末、夜市川柳の第一回大会があった。「魚」の選をしたが、驚くほどやつれていて、それでも相変らず意気軒高、控室で一緒にニギリメシをパクついた。その夜市川柳も四回目の大会を迎え、ベストテンの顔ぶれは年々変っていく。☆もう十五年以上も前になろう。酔々・鬼遊・史好三人で鼎談をやったことがある。場所は八尾志紀町の酔々居。この記事は「苦言あれこれ」というタイトルで川柳塔45年10月号に載った。若手に言いたいことを言わせてやろうとの、当時の編集責任者、不二田一三夫さんの企画だった。☆ところが雑誌が出ると早速、清水白柳さんからお叱りのハガキを頂いた「みんな遠慮してものを言ってるのが分って感心しません。もっと突込んでくれると思っていたのに案外でした」遠慮したつもりはないけれど、目の前で録音テープが回っていると、呑み屋の放談みたいなわけにはいかぬ。建前が入ってしまう。それが白柳さんには不満だったのだ。☆さて、今、彼が生きていたら、どんな苦言を呈するだろうか。

（史）

昭和四十一年一月九日　第三種郵便物認可
昭和六十一年八月二十五日　印刷
昭和六十一年九月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年　通巻七一二号　川柳塔　九月号
定価　五百円（送料　五十円）

日刊
電波新聞

投稿欄案内

川柳　選者・橘高薫風
（掲載日）毎週水・土曜日

俳句　選者・小寺正三
（掲載日）毎週火・金曜日

短歌　選者・佐々木信夫
（掲載日）毎週月・木曜日

〈投稿規定〉
はがき一枚に三句（首）以内（川柳・俳句・短歌と明示すること）。投稿随時。
自由課題・秀句には掲載紙贈呈。

〈投稿先〉
〒五三〇・大阪市北区中之島三―二・朝日新聞ビル6F・電波新聞大阪本社「学芸部」あて。

5つの個性・5つの色味!!
アイスキャンデー
ミルク・アズキ・パイン・チョコ・宇治金時

なんば戎橋筋本店
なんば高島屋百貨店
泉北高島屋百貨店
京都高島屋百貨店
阪神百貨店
松坂屋百貨店
そごう百貨店
京阪モール店
サンストア中之島店
サンストア淀屋橋店
アベノ近鉄百貨店
上本町近鉄百貨店
東大阪近鉄百貨店
奈良近鉄百貨店
京都近鉄百貨店
なんば新川店
虹のまち店
ドーチカ店
南海難波駅店
国鉄大阪駅店
梅田大丸百貨店
堺東店

551 HORAI

大阪・なんば
蓬莱
TEL 641―0551

雑誌　05703―9